

教 育 研 究 業 績 書		
		2023年 5 月 1 日
		氏名 村井 文江 印
研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
看護学	生涯発達看護学、地域看護学、基礎看護学	
教 育 上 の 能 力 に 関 する 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例 1) ワークブックの作成 2) 学習管理システムmanabaの活用 3) 反転授業の活用 4) ポートフォーリオの活用	平成17年4月～ 平成26年3月 平成26年4月～ 平成29年3月 平成29年4月～ 令和3年8月 平成29年4月～ 令和3年8月	周産期看護方法論／母性看護方法論の授業において、ワークブックを作成し、学生の自己学習をがスムーズに進むように支援した。 manabaを使用して、事前に授業資料を提示し予習を促すとともに、双方向のやり取りで学生が学びを確認している。 「看護職への道Ⅰ」において、反転授業を実施し、学生が主体的に学修することができるように努めている。 「看護職への道Ⅰ」において、ポートフォーリオを用い、学修及び自分自身に関する気づきを得ることをから、今後どのようにしていくことが必要かを考え、行動化することを促している。
2 作成した教科書、教材 (教科書) 1) 標準母性看護学講座30 母性看護学 第2版、 金原書店 2) 助産学講座Ⅰ基礎助産学Ⅰ 助産学概論 第2 版、医学書店 3) 女性の看護学、メヂカルフレンド社	平成7年6月 平成13年1月増補 平成8年11月 平成12年6月	帝王切開の事例を提示し、看護理論を用いての看護展開例を具体的に記述し、母性看護における看護展開の特徴およびポイントを解説した。 担当部分：pp. 442～455「帝王切開術後の看護」 (単著) 助産学のケアに活用できる個人(対象)との関係を形成し発達させるため看護学関係理論として、セルフケアとカウンセリングについて説明した。セルフケアについては、セルフケアの概念を概観した後、オレムのセルフケア理論を踏まえ、セルフケアを促す助産師の具体的な援助について説明した。カウンセリングは、個人(対象)への接近法として紹介し、看護学におけるカウンセリングの位置づけ・役割、助産学での活用法について説明した。 担当部分：pp. 112-121「個への接近のための理論」 (単著) 従来の母性看護の視点からが奪局し、現代の社会・文化的コンテキストの中で女性の健康を捉えその看護について論じた本である。 担当部分では、看護の立場から女性と運動について論じた。運動と健康の関係、女性の運動機能特性について説明した上で、女性のライフサイクルを通しての運動能力の発達、ライフイベントとの関係を踏まえ、健康のためにそれぞれのライフサイクルの時期にどのように運動を取り入れていくことが大切かについて具体的な状況を提示しながら説明した。これらから運動において求められる看護の役割、そして課題を提示した。 担当部分：pp. 176-185「女性と運動」(単著)

4) 母子看護学 初版、廣川書店	平成15年3月	<p>「新生児の健康を整えるための看護」では、ニーズ論をもとに対象を捉え新生児の看護について記述した。特に、新生児の看護に必要な基礎知識とケアという形式で説明し、エビデンスに基づく新生児の看護を明確にした。</p> <p>「出生時に健康障害のある新生児の看護」は、健康障害のある新生児として、低出生体重児、先天異常のある新生児、分娩障害のある児を取り上げ、その看護について記述した。特に、最近の研究で明らかにされてきている新生児の反応を踏まえ看護を記述し、さらに、身体的側面にとどまらず、心理社会的側面についても理論を踏まえ新生児およびその親への看護を記述した。</p> <p>担当部分：p. 198-210「新生児の健康を整えるための看護」(単著) pp. 211-224「出生時に健康障害のある新生児の看護」(単著)</p>
5) 母子看護学原論 初版、廣川書店	平成15年3月	<p>受胎調節および家族計画に関する看護の内容を女性のリプロダクティブ・ヘルスの視点から捉え、「親になる選択」というタイトルの元に子どもを産む、産まないをどのように考えていくのか、看護としてどのように支援していくことが重要か、から記述した。また、日本で使用されている従来の古典的避妊方法に留まらず、国際的な視野も取り入れ、避妊方法等についてメカニズムも含め具体的に記述した。</p> <p>担当部分：pp. 145-153「親になる選択」(単著)</p>
6) 実践看護技術学習支援テキスト 母性看護学、日本看護協会出版会	平成15年5月	<p>「分娩第1期の看護技術」および「分娩第2期から4期の看護技術」では、それぞれの時期の状況、看護目標、アセスメント技術、直接介入的な看護ケア、看護評価視点について、実際の場面ですぐに使用できるように具体的に喜寿した。</p> <p>「出生後1週間までの新生児看護技術」では、出生後24時間から1週間までの新生児の特徴を記述し、この間の適応を促す看護および不適応の際の看護の実際、看護の評価視点について具体的に記述した。</p> <p>「出生前診断・先天異常時出生をめぐる看護」では事例を提示し、事例展開する形で看護を記述した。その際、看護の根拠となるモデルや理論についても言及した。</p> <p>担当部分：p. 69-87「分娩第1期の看護技術」(共著者：江角二三子、村井文江) pp. 88-103「分娩第2期から4期の看護技術」(共著者：江角二三子、村井文江) pp. 123-149「出生後1週間までの新生児看護技術」(単著) pp. 262-275「出生前診断・先天異常時出生をめぐる看護」(単著)</p>
7) 母子看護学 第2版、廣川書店	平成18年3月	<p>初版発行以後に明らかになった知識やエビデンスを元に追加・修正した。特に、新生児の栄養では母乳育児支援について加筆した。</p> <p>担当部分：p. 249-265「新生児の健康を整えるための看護」(単著) p. 266-280「出生時に健康障害のある新生児の看護」(単著)</p>
8) 母子看護学原論 第2版、廣川書店	平成18年3月	<p>初版発行以後の社会状況を反映させ修正・加筆した。「親になる選択」では不妊症治療の現状を踏まえ、親になることを選択肢を記述した。避妊法についてはそれぞれのメリット・デメリットを追加しより具体的な内容とした。</p> <p>担当部分：pp. 133-147「親になる選択」(単著)</p>

<p>9) 看護判断のための気づきとアセスメント 母性看護</p> <p>(ビデオ) 看護技術学習支援ビデオシリーズ 母性看護学1～5巻、日本看護協会出版会</p> <p>(CD) 母性のアセスメント 講義展開例、メディカ出版</p>	<p>令和4年2月</p> <p>平成11年10月</p> <p>平成16年3月</p>	<p>看護判断のため気づきとアセスメントを高める若手看護師・看護学生を対象としたシリーズ参考書の1冊で母性看護に関する。編集と担当するとともに、分娩期の看護として、産婦のとらえ方、分娩期の気づく力を高める基礎知識について執筆した。担当部分：pp.99-114.第2部 分娩期の看護(第1章、2章)(単著) 編集：茅島江子、村井文江、細坂泰子</p> <p>看護師等資質向上推進事業の一環で作成したビデオ。母性看護のアセスメントと基本的ケア技術の学習支援を目的としており、分娩期～新生児期の看護に焦点をあてたものである。</p> <p>ナーシング・グラフィカ17 基礎看護学のヘルスアセスメントCDとして母性アセスメントについての講義展開例を示したもの。</p>
<p>3 教育上の能力に関する大学等の評価 (自己点検評価に対する大学(部局)の評価:教育に関することを抜粋) 平成27年度自己点検評価</p> <p>平成28年度自己点検評価</p>		<p>教育面では助産教育が大学院に移行するにあたって尽力した。</p> <p>助産教育の大学院化に伴って、教育指導体制が大きく変わる中で、新たな道筋を開拓した実績は評価できる。</p>
<p>4 実務の経験を有する者についての特記事項 育児相談</p> <p>筑波大学附属病院における看護研究</p> <p>筑波大学公開講座『看護研究入門』</p> <p>臨床実習指導者講習会(茨城県看護協会)</p> <p>学校等における性教育</p> <p>教員免許更新講習</p>	<p>平成11年4月～現在</p> <p>平成11年7月から平成14年7月</p> <p>平成16年6月 平成17年6月</p> <p>平成16年8月～平成22年8月</p> <p>平成19年度～現在</p> <p>平成23年6月</p>	<p>非常勤保健師・助産師として、育児相談を担当。子どもへの関わり方、子どもの発達、兄弟姉妹への関わり、母親の健康状況などについて相談に応じる。月2回程度していたが、現在は6回程度/年。</p> <p>臨床における研究について説明し、特に、文献の読み方と検討について、具体的に講義・演習を行った。</p> <p>論文の書き方を担当。具体例を掲示しながら基本的な看護論文の書き方について講義した。</p> <p>看護教育方法(6時間)を担当し、看護教育の考え方、臨床実習指導者に必要な資質、実習における教育的関わりなどについて講義・演習を行った。平成17年度および平成18年度は看護教育方法(6時間)に加え、実習指導案の作成(57時間)にも関わり、具体的に実習指導案の作成を指導した。</p> <p>小学校から高等学校において、外部講師として児童・生徒、保護者を対象に性教育を行っている。茨城県筑西市とは平成19年度から、茨城県行方市とは平成26年度から、各市の事業と連携する形式で関わっている。</p> <p>教員免許更新講習の講師を担当。「思春期の性の健康課題とその援助」について講義を行った。</p>
<p>5 その他 (教育に関する表彰等) 筑波大学Best Faculty Member(教育)受賞</p> <p>(国家試験問題作成等) 保健婦助産婦看護婦国家試験試験委員</p> <p>医道審議会専門委員 保健師助産師看護師分科会委員</p>	<p>平成26年2月</p> <p>平成12年6月～平成18年5月</p> <p>平成14年3月～平成18年3月</p>	<p>大学教員業績評価において、教育分野における活動内容が特に優れたものと認定され表彰された。</p> <p>保健師助産師看護師国家試験問題作成と決定</p> <p>保健師助産師看護師国家試験問題について妥当性の検討</p>

医道審議会専門委員 保健師助産師看護師分科会 員(保健師助産師看護師国家試験出題基準改定部 会) 保健婦助産婦看護婦国家試験試験委員 (科学研究費審査) 科学研究費委員会専門委員(奨励研究部会生物系 Ⅱ小委員会 境界医学・社会医学・看護学等) (大学設置 大学設置・学校法人審議会(大学設置分科会) 専 門委員(至令和 3年10月)	平成20年7月～ 平成21年3月 平成21年5月～ 平成27年4月 平成28年12月～ 平成29年12月 令和元年11月～ 令和4年10月	保健師助産師看護師国家試験出題基準の改定 保健師助産師看護師国家試験問題作成と決定 科学研究費採択に関する審査 大学および大学院の設置認可に関する審査 令和3年11月からは主査の役割をになった。
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格、免許 看護婦免許取得(看護婦籍登録第444560号) 助産婦免許取得(助産婦籍登録第82408号) 保健婦免許取得(保健婦籍登録第66148号)	昭和52年5月 昭和53年5月 平成2年6月	看護師の国家資格 助産師の国家資格 保健師の国家資格
2 特許等		なし
3 実務の経験を有する者についての特記事項 公益社団法人日本助産師会 会長表彰 公益社団法人茨城県看護協会 会長表彰	平成28年5月 平成30年6月	母子保健事業に対し積極的な協力をを行い、母子保健 の啓発、助産技術の改善または助産業務全般の向上 に尽力し、その功績顕著であり、公益社団法人日本 助産師会の模範となる会員であることが認められ表 彰された。 茨城県看護協会への貢献が認められ優良看護職とし て、茨城県看護協会会長から表彰された。
4 その他 外部資金の獲得状況 1) 科学研究費助成/基盤研究(B):日本の高校 生・大学生の健康増進ライフスタイル行動の発達 的・行動科学的研究(分担) 2) 科学研究費助成/萌芽研究:親による乳幼児虐 待を防止するための親子関係調整プログラム作成 のための研究—虐待の観点から見た否定的育児 エピソードの分析—(分担) 3) 科学研究費助成/萌芽研究:女性の月経周期に 関連した"しかたない"という認識の意味と健康増 進行動の関連性(代表) 4) 科学研究費助成/基盤研究(B):思春期健康増 進のための学生ヘルス・ボランティア養成プログ ラム開発とその評価研究(分担) 5) 科学研究費助成/萌芽研究:効果的なSTD予防介 入プログラムの開発に関する研究(分担) 6) 科学研究費助成/基盤研究(C):家族成員の関 係性に着目した未熟児を養育する家族への支援 7) 科学研究費助成/萌芽研究:産褥早期の育児負 担感の軽減を目的とした訪問指導体制試案と outcome評価(分担) 8) 科学研究費助成/基盤研究(B):地域母子保健 活動としての育児支援システム構築の試み(分 担) 9) 寺島薬局株式会社研究助成金:子育てをしている 女性の健康状態に関する研究(代表) 10) 科学研究費助成/基盤研究(C):問題解決型学 習法を主体とした思春期健康支援プログラムの開 発(代表)	平成9年4月～ 平成13年3月 平成13年4月～ 平成16年3月 平成13年4月～ 平成16年3月 平成14年4月～ 平成17年3月 平成16年4月～ 平成19年3月 平成16年4月～ 平成19年3月 平成17年4月～ 平成20年3月 平成17年4月～ 平成21年3月 平成18年4月～ 平成19年3月 平成18年4月～ 平成21年3月	科学研究費助成金/基盤研究(B)(分担) 科学研究費助成金/萌芽研究(分担) 科学研究費助成金/萌芽研究(代表) 科学研究費助成金/基盤研究(B)(分担) 科学研究費助成金/萌芽研究(分担) 科学研究費助成金/基盤研究(C)(分担) 科学研究費助成金/萌芽研究(分担) 科学研究費助成金/基盤研究(B)(分担) 寺島薬局株式会社研究助成金(代表) 科学研究費助成金/基盤研究(C)(代表)

11) 科学研究費助成／萌芽研究：妊娠期における日本型食生活の食育が授乳期の母親の心身の健康に与える効果（分担）	平成19年4月 平成21年3月	～	科学研究費助成金／萌芽研究（分担）
12) 日本看護学教育学会研究助成：実習場で看護学生が受ける患者暴力に対する防止・回避のための教育方法の開発（分担）	平成20年4月 平成21年3月	～	日本看護学教育学会研究助成金（分担）
13) (財) パブリックヘルスリサーチセンター委託研究費：周産期のメンタルヘルスプログラムの開発（分担）	平成20年4月 平成23年3月	～	(財) パブリックヘルスリサーチセンター委託研究費（分担）
14) 科学研究費助成／挑戦的萌芽研究：妊娠女性の睡眠問題と周産期OUTCOME検証（分担）	平成22年4月 平成25年3月	～	科学研究費助成金／挑戦的萌芽研究（分担）
15) 科学研究費助成／基盤研究（C）：養護教諭の健康相談活動スキル向上のためのプログラムの開発（分担）	平成22年4月 平成25年3月	～	科学研究費助成金／基盤研究（C）（分担）
16) 科学研究費助成／若手研究（B）：死産時における母親と亡くなった子どもへの看護支援プログラム開発（連携）	平成22年4月 平成25年3月	～	科学研究費助成金／若手研究（B）（連携）
17) 厚生労働科学研究費補助金（政策科学総合事業）：周産期女性の社会経済的地位（Socioeconomic status）と女性の健康および胎児感情の関連について（分担）	平成23年4月 平成25年3月	～	厚生労働科学研究費補助金（政策科学総合事業）（分担）
18) 科学研究費助成／挑戦的萌芽研究：やせ妊婦が適切な体重増加をするために 体型認識・心理および生活習慣からの分析（分担）	平成23年4月 平成26年3月	～	科学研究費助成金／挑戦的萌芽研究（分担）
19) 科学研究費助成／基盤研究（C）：思春期の子どもを持つ親が家庭で自信を持って性教育できるためのプログラムの開発研究（分担）	平成24年4月 平成27年3月	～	科学研究費助成金／基盤研究（C）（分担）
20) 科学研究費助成／挑戦的萌芽研究：妊娠女性に対する口腔ケア教育プログラム開発の試み（分担）	平成25年4月 平成27年3月	～	科学研究費助成金／挑戦的萌芽研究（分担）
21) 科学研究費助成／挑戦的萌芽研究：妊娠女性の正常体重肥満（いわゆる隠れ肥満）（分担）	平成27年4月 平成29年3月	～	科学研究費助成金／挑戦的萌芽研究（分担）
22) 科学研究費助成／挑戦的萌芽研究：「育児ストレス」軽減に向けた認知行動療法プログラムの開発（分担）	平成27年4月 平成30年3月（予定）	～	科学研究費助成金／挑戦的萌芽研究（分担）
23) 科学研究費助成／基盤研究（C）：バイオマーカーを用いた妊娠期からの産後鬱スクリーニングプログラム開発に関する検討（分担）	平成27年～ 平成30年3月	～	科学研究費助成金／基盤研究（C）（分担）
23) 一般財団法人救急振興財団研究助成：救急現場における周産期救急～わが国の実態調査と病院前周産期救急教育のあり方に関する検討（分担）	平成28年4月 平成29年3月	～	救命救急の高度推進に関する調査研究事業（委託研究）による研究助成金（分担）
24) 科学研究費助成／基盤研究（C）：大学生ピアおよびITを活用した高校生のデートDV予防支援プログラムの開発・評価（課題番号：16K12329）（代表）	平成28年4月～ 令和2年3月	～	科学研究費助成金／基盤研究（C）（代表）
25) 科学研究費助成／基盤研究（C）：若手看護系教員のキャリア開発を支援するためのキャリアパスモデル（課題番号：17K12146）（分担）	平成29年4月～ 令和4年3月	～	科学研究費助成金／基盤研究（C）（分担）
26) 科学研究費助成／基盤研究（C）：子育てに関するヘルスリテラシーの獲得を基盤とした子育て支援モデルの構築（代表）	令和2年4月～ 令和5年3月（予定）	～	科学研究費助成金／基盤研究（C）（代表）
27) 常陽銀行「持続可能社会に向けた地域の環境作り活動」教育研究助成：SDGs Goal 3から捉えた思春期入り口からの家庭における性教育支援プログラムの開発 —小学校3年生の子どもを持つ保護者の家庭における性教育の実態とニーズ調査—（分担）	令和2年4	～	常陽銀行「持続可能社会に向けた地域の環境作り活動」教育研究助成（分担）
28) 科学研究費助成／基盤研究（C）：看護実践者から看護系大学教員への移行支援プログラムの開発（分担）	令和4年4月～ 令和8年3月（予定）	～	科学研究費助成金／基盤研究（C）（分担）

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著 書) 1 標準母性看護学講座30 母性看護学 第2版	共 著	平成7年6月 平成13年1月 増補	金原出版	帝王切開の事例を提示し、看護理論を用いての看護展開例を具体的に記述し、母性看護における看護展開の特徴およびポイントを解説した。 担当部分：pp. 442～455「帝王切開術後の看護」 (単著) 編者：西島正博、関根龍子、渡部尚子、小松美穂子、前原澄子 共著者：関根龍子、堀内成子、渡部尚子、村井文江、他15名
2 女性のスポーツ医学	共 著	平成8年11月	南江堂	運動選手について、月経周期に伴う体調変化の自覚、競技成績、運動負荷試験の結果について説明し、今後求められる現場での対応や研究について記述した。 担当部分：pp. 41～44「月経周期と運動能力」 (共著者：佐々木純一、村井文江) 編者：越野立夫、武藤芳照、定本朋子 共著者：定本朋子、三井悦子、池田恵子、村井文江、他90名
3 助産学講座 I 基礎助産学 1 助産学概論 第2版	共 著	平成9年1月	医学書院	助産学のケアに活用できる個人(対象)との関係を形成し発達させるため看護学関係理論として、セルフケアとカウンセリングについて説明した。セルフケアについては、セルフケアの概念を概観した後、オレムのセルフケア理論を踏まえ、セルフケアを促す助産師の具体的な援助について説明した。カウンセリングは、個人(対象)への接近法として紹介し、看護学におけるカウンセリングの位置づけ・役割、助産学での活用法について説明した。 担当部分：pp. 112-121「個への接近のための理論」 (単著) 編者：武谷雄二、前原澄子 共著者：前原澄子、今関節子、関根龍子、村井文江、他6名
4 女性の看護学	共 著	平成12年6月	メヂカルフレンド社	従来の母性看護の視点からが奪局し、現代の社会・文化的コンテクストの中で女性の健康を捉えその看護について論じた本である。 担当部分では、看護の立場から女性と運動について論じた。運動と健康の関係、女性の運動機能特性について説明した上で、女性のライフサイクルを通しての運動能力の発達、ライフイベントとの関係を踏まえ、健康のためにそれぞれのライフサイクルの時期にどのように運動を取り入れていくことが大切かについて具体的な状況を提示しながら説明した。これらから運動において求められる看護の役割、そして課題を提示した。 担当部分：pp. 176-185「女性と運動」(単著) 編者：吉沢豊予子、鈴木幸子 共著者：飯島美世子、植田喜久子、工藤美子、村井文江、他20名

5 母子看護学 初版	共 著	平成15年3月	廣川書店	<p>「新生児の健康を整えるための看護」では、ニーズ論をもとに対象を捉え新生児の看護について記述した。特に、新生児の看護に必要な基礎知識とケアという形式で説明し、エビデンスに基づく新生児の看護を明確にした。</p> <p>「出生時に健康障害のある新生児の看護」は、健康障害のある新生児として、低出生体重児、先天異常のある新生児、分娩障害のある児を取り上げ、その看護について記述した。特に、最近の研究で明らかにされてきている新生児の反応を踏まえ看護を記述し、さらに、身体的側面にとどまらず、心理社会的側面についても理論を踏まえ新生児およびその親への看護を記述した。</p> <p>担当部分：p. 198-210「新生児の健康を整えるための看護」（単著）、 pp. 211-224「出生時に健康障害のある新生児の看護」（単著） 編者：小松美穂子、茅島江子 共著者：茅島江子、桑名佳代子、鈴木幸子、村井文江、他4名</p>
6 母子看護学原論 初版	共 著	平成15年4月	廣川書店	<p>受胎調節および家族計画に関する看護の内容を女性のリプロダクティブ・ヘルスの視点から捉え、「親になる選択」というタイトルの元に子どもを産む、産まないをどのように考えていくのか、看護としてどのように支援していくことが重要か、から記述した。また、日本で使用されている従来の古典的避妊方法に留まらず、国際的な視野も取り入れ、避妊方法等についてメカニズムも含め具体的に記述した。</p> <p>担当部分：pp. 145-153「親になる選択」（単著） 共著者：安藤広子、蝦名美智子、大平光子、村井文江、他8名</p>
7 実践看護技術学習支援テキスト 母性看護学	共 著	平成15年5月	日本看護協会出版会	<p>「分娩第1期の看護技術」および「分娩第2期から4期の看護技術」では、それぞれの時期の状況、看護目標、アセスメント技術、直接介入的な看護ケア、看護評価視点について、実際の場面にすぐに使用できるように具体的に喜寿した。</p> <p>「出生後1週間までの新生児看護技術」では、出生後24時間から1週間までの新生児の特徴を記述し、この間の適応を促す看護および不適応の際の看護の実際、看護の評価視点について具体的に記述した。</p> <p>「出生前診断・先天異常時出生をめぐる看護」では事例を提示し、事例展開する形で看護を記述した。その際、看護の根拠となるモデルや理論についても言及した。</p> <p>担当部分：p. 69-87「分娩第1期の看護技術」（共著者：江角二三子、村井文江） pp. 88-103「分娩第2期から4期の看護技術」（共著者：江角二三子、村井文江） pp. 123-149「出生後1週間までの新生児看護技術」（単著） pp. 262-275「出生前診断・先天異常時出生をめぐる看護」（単著） 共著者：小松美穂子、楠本万里子、森恵美、村井文江、他10名。</p>
8 母子看護学 第2版	共 著	平成18年3月	廣川書店	<p>初版発行以後に明らかになった知識やエビデンスを元に追加・修正した。特に、新生児の栄養では母乳育児支援について加筆した。</p> <p>担当部分：pp. 249-265「新生児の健康を整えるための看護」（単著）、 pp. 266-280「出生時に健康障害のある新生児の看護」（単著） 編者：小松美穂子、茅島江子 共著者：茅島江子、桑名佳代子、鈴木幸子、村井文江、他4名</p>

9 母子看護学原論 第2版	共 著	平成18年3月	廣川書店	初版発行以後の社会状況を反映させ修正・加筆した。「親になる選択」では不妊症治療の現状を踏まえ、親になることの選択肢を記述した。避妊法についてはそれぞれのメリット・デメリットを追加しより具体的な内容とした。 担当部分：pp. 133-147「親になる選択」（単著） 共著者：安藤広子、蝦名美智子、大平光子、 <u>村井文江</u> 、他8名。
10 カウンセリング心理学事典	共 著	平成20年3月	誠信書房	第XI章医療カウンセリングにおいて、性同一障害について解説した。言葉の定義および診断・治療について説明し、カウンセリングの意義について述べた。今後の課題として、性同一性障害への適切な理解、心理教育的介入における研究の蓄積、家族や社会などの受け入れ、社会における連携の必要性を提示した。 担当部分：pp. 431-433「性同一障害」（単著） 監修者：国分康之 共著者：国分康之、国分久子、高田ゆり子、 <u>村井文江</u> 、渡辺三枝子、他236名
11 性の健康と相談のためのガイドブック	共 著	平成26年4月	中央法規	性に関する健康教育・相談事業を担当する医療従事者や養護教諭など学校保健関係者向けにのガイドブックである。許されない性行動として援助交際について記述した。援助交際の実態について、量的に質的に明らかにする中で、援助交際をする理由に注目して、自分自身を大切さを実感できることの大切さ、命や性に関する価値観を伝える性教育の重要性を言及した。 編集：公益財団法人 性の健康医学財団 担当部分：pp. 64-65、許されない性行動 援助交際（単著） 共著者：東園子、阿部輝夫、飯塚敏子、今井博久、岩崎和代、岩破一博、 <u>村井文江</u> 、他43名
12 思春期学 基本用語集	共 著	令和3年8月	講談社	思春期学の基本用語について収録した。日本思春期学会編集であり、編集委員として編集を担当するとともに、看護に関係のある用語複数の執筆を担当した。また、他の領域の用語についてもピアレビューを行った。 編集：一般社団法人日本思春期学会 担当部分：明記していない 共著者：穂吉秀隆、新井陽、壱岐さより、池田朝彦、池田有、石走知子、 <u>村井文江</u> 、他60名
13 看護判断のための気づきとアセスメント 母性看護	共 著	令和4年2月	中央法規	看護判断のため気づきとアセスメントを高める若手看護師・看護学生を対象としたシリーズ参考書の1冊で母性看護に関するもの。編集と担当するとともに、分娩期の看護として、産婦のとらえ方、分娩期の気づく力を高める基礎知識について執筆した。 編集：茅島江子、 <u>村井文江</u> 、細坂泰子 担当部分：pp. 99-114、分娩期の看護（第1章、2章）（単著） 共著者：茅島江子、阿部正子、藤原聡子、 <u>村井文江</u> 、能町しのぶ、山本弘江、他5名
(学術論文) 1 急性羊水過多症の看護—大量羊水穿刺を経験して—(査読付)	共 著	昭和59年8月	茨城県母性衛生学会誌、第4号、pp. 11-14	急性羊水過多症の症状軽減および産科異常予防の目的で、羊水穿刺で大量の羊水を一時的に除去する治療を試みた症例である。対象症例は、5週間で計5回の羊水穿刺で16.10の羊水を除去した。穿刺直後は子宮収縮が増強し、その後、急性羊水過多症に伴う多呼吸、頻脈、経口摂取困難、排尿障害などは穿刺により軽減するという状態を繰り返し、精神的動揺が持続した。このような状況におけるケアのポイントを急性羊水過多症の看護として記述した。 共著者： <u>村井(菅谷)文江</u> 、新井香代子、佐藤千恵子、周産期病棟スタッフ 担当部分：病棟での事例について中心となってまとめ論文を執筆した。

2 重症妊娠中毒症に対する一考察（査読付）	共 著	昭和61年8月	茨城県母性衛生学会誌、第6号、pp. 18-20	重症妊娠中毒症の管理・治療のために他院から転入された2症例の看護経験から、入院時の看護を中心に、情報収集、患者の状態評価、チームにおける看護の役割、看護記録、コミュニケーションについて、看護のポイントを記述した。 共著者：新井香代子、 <u>村井（菅谷）文江</u> 、周産期病棟スタッフ 担当部分：主に、論文の基本データである症例についてまとめた。
3 もう1人子供を持つ、持たないに関係する両親の意識分析（査読付）	共 著	平成3年3月	筑波大学医療技術短期大学部研究報告、第12号、pp. 81-89	子どもの価値モデルを基に子どもを持つことに影響する因子について検討した。1歳8ヶ月までの子どもを持つ親399組にアンケートを配布し158組から有効回答が得られた。子どもを持つことに影響する因子として「労働負担と仕事の継続性」「楽しい経験・新しい経験」「大人としてのアイデンティティ」「伝統性」「責任・役割」「経済負担」が抽出された。夫は妻より、「楽しい経験・新しい経験」を重要と考えていた。「伝統性」を重要と考える妻に次の子を持つことの希望がより多かった。 共著者：小松美穂子、 <u>村井文江</u> 、諏訪久美子、太田尚子、片岡里美 担当部分：アンケート作成とデータ分析の部分を主に担当した。
4 女子大学生の母性意識についての検討（査読付）	共 著	平成3年9月	思春期学、9(3)、pp. 247-253	女子大学生の母性意識の形成状況と母性意識への影響要因として共感性に焦点をあてて検討した。350名にアンケートを配布し209名から有効回答が得られた。性役割テストでは、「母性」が「女性」「父性」「男性」より高得点であった。共感性は、「母性」と中程度の有意な相関を示した。過去の母子関係を良好と認識している群、現在の母子関係・父子関係を良好と認識している群、一生仕事を続けたいと思っていない群は、「母性」の得点が有意に高得点であった。 共著者： <u>村井文江</u> 、茅島江子、前原澄子 担当部分：卒業研究の一部を修正・加筆した論文。
5 子どもを持つことに対する女子学生の意識（査読付）	共 著	平成4年3月	筑波大学医療技術短期大学部研究報告、第13号、pp. 105-114	子どもの価値モデルを基に、女子学生を対象として子どもを持つことに影響する因子について検討した。343名にアンケートを配布し、266名から有効回答が得られた。「生活上の負担」「創造・深化」「楽しみ」「社会性」「労働負担」の因子が抽出された。母親の結果と比較し、「楽しみ」「創造・深化」を重要と考えていることが示唆された。 共著者： <u>村井文江</u> 、小松美穂子、高橋ゆかり 担当部分：アンケート作成、データ分析を主に担当し、論文執筆をした。
6 男子学生の父親役割の認識についての検討（査読付）	共 著	平成4年6月	思春期学、10(2)、pp. 108-113	男子大学生の父親役割認識状況と影響する要因について検討した。250名にアンケートを配布し124名から有効回答が得られた。性役割では、「男性」が「父性」「母性」「女性」より高得点であった。過去の父子関係が良好と認識している群、現在の父子関係、母子関係が良好であると認識している群でそれぞれそうでない群に対して「父性」の得点が高得点であった。女子大学生に比較し、親役割の準備状態が低いことが示唆された。 共著者： <u>村井文江</u> 、茅島江子、前原澄子 担当部分：卒業研究の一部を修正・加筆した論文。

7 看護教育における「性」に関する因子 ―看護学生の「性」に対する意識と行動の実態調査を通して― (査読付)	共 著	平成6年9月	茨城県母性衛生学会誌、第14号、pp. 18-20	学生の状況を踏まえたヒューマンセクシュアリティに関する授業内容を構成するために、学習前の性に対する意識・知識、および行動の実態についてアンケート調査を実施した。その結果、性に対する意識・知識では、精神的、情緒的、連帯性を中心に考える傾向があり、性の多様な側面について、柔軟に広く捉えられる授業内容の必要性が示唆された。また、性行動が活発化している学生の実態を踏まえた内容の必要性が明らかになった。 共著者：井上恭子、 <u>村井文江</u> 担当部分：アンケート作成、分析に関わった。
8 中学校における性教育の現状 (査読付)	共 著	平成7年9月	茨城県母性衛生学会誌、第15号、pp. 42-46	中学校における性教育の現状を把握する目的で、県内の中学校233校の養護教員を対象にアンケート調査を実施し86名から有効回答が得られた。性教育を実施している学校は49校(57%)であった。担当者は、保健体育の教員が67.3%と最も高く、養護教諭が実施している学校は49%であった。性交についての教えている学校は24.4%と低い割合であった。性教育の実施率が低い理由としては、「統一された方針がない」ということが挙げられた。 共著者：川上真澄、椎名啓子、山本弘江、 <u>村井文江</u> 担当部分：学生の卒業研究に指導教員として関わった。
9 臨地実習指導者の指導に関する検討	共 著	平成8年12月	看護管理、6(12)、pp. 888-894	効果的な臨地実習を実施するために、臨地実習指導者の関わりについて検討を行い今後の課題を明確にすることを目的とした。301名のアンケート回答の結果、臨地実習指導者は、実習指導に関心はあるが、自信のないまま指導していること、学生の実習態度で指導意欲が左右されていることなどが明らかになり、教員と臨床実習指導者の打ち合わせの強化や評価システムについての課題が挙げられた。 共著者：板垣恵子、佐藤洋子、櫛引美代子、山内久子、一戸とも子、高橋博美、 <u>村井文江</u> 担当部分：アンケート作成に主に関わった。
10 思春期の女性の月経に関する保健行動についての探索的研究―フォーカスグループ法およびアンケート法を用いて― (学位論文)	単 著	平成10年3月	筑波大学大学院修士課程 医科学研究科修士論文	思春期女性の月経に関する保健行動と保健行動を規定する要因を明らかにすることを目的とした。質的研究を基にアンケートを作成し、1573名の女子高校生に実施した。結果、実施率の高い保健行動は、「快適に過ごすための行動」「防衛」「欲求」であり、「管理」「運動」はほとんど実施されてなかった。普段の健康行動、月経に関する変化や症状、保健行動への期待でこれらの保健行動の32%が説明された。
11 高校生の「健康の気がかかり」に関する質的研究 (査読付)	共 著	平成11年3月	思春期学、17(1)、pp. 134-140	高校生の健康の気がかかりを明らかにする目的で、男女高校生71名にフォーカスグループインタビューを実施し、内容分析を行った。結果、1) 高校生の持っている健康の気がかかりは、個人の日常生活に密着したものであった。2) 『精神・心理』『対人関係』『疲れ』『睡眠』『栄養』についての気がかかりは男女共通して多く挙げられた。3) 男女間で『体重』と『運動』についての気がかかりの内容が異なっていた。4) 女子は『病気・けが・健康障害』についての気がかかりが多かった。 共著者：岩田裕子、 <u>村井文江</u> 、田代順子、岩瀬信夫、小澤道子。 担当部分：インタビュー、データ分析を担当した。

12 高校生の月経に関する保健行動とその影響要因—フォーカスグループ法による探索的研究— (査読付)	共 著	平成11年12月	思春期学、17(4)、pp. 436-445	高校生の月経に関する保健行動と保健行動に影響する要因を明らかにすることを目的に、17名の高校生を対象にフォーカスグループ法による質的研究を実施した。内容分析の結果、1) 月経に関する保健行動は18コードに分類された。2) 『痛み』、『月経血の漏れ』の順に保健行動が多くなされていた。3) 保健行動に影響する要因として、『結果への期待』『行動の認識』『経験』『価値観』『症状』『周囲との関係』『社会的状況』が挙げられた。 共著者：村井文江、目崎登 担当部分：修士論文の一部を修正・加筆した論文。
13 高校生の月経に関する気がかり (査読付)	共 著	平成12年3月	筑波大学医療技術短期大学部研究報告、第21号、pp. 27-36	月経に関する保健行動の促進を視野にいれて月経に関する気がかりを記述することを目的としている。17名の女子高校生を対象にフォーカスグループ法によりグループインタビューを行い、分析した質的研究。結果、気がかりは、月経そのものや月経随伴症状に限らず生活や人間関係に及ぶものであった。これらは、相互に関係し合う包括的なものであり、ヘルスポモーションの立場からの支援の必要性が示唆された。 共著者：村井文江、目崎登 担当部分：修士論文の一部を修正・加筆した論文。
14 女子看護学生の健康増進行動と関連要因 (査読付)	共 著	平成13年7月	筑波大学医療技術短期大学部研究報告、第22号、pp. 27-36	女性看護学生の健康増進行動の状況とその関連要因を検討する目的でアンケート調査を実施した。426名を分析した結果、健康増進行動の平均実施頻度は“たまに”から“時々”であった。最も多くなされている行動は、『心の健康』に関するものであった。健康行動に影響する要因としては、重回帰分析の結果、『行動のきっかけ数』『行動をしない理由数』『健康状態』『健康の気がかり数』『健康の基準数』であり、これらによって20.2%が説明された。 共著者：村井文江、田代順子、西川浩昭、小澤道子 担当部分：アンケート作成、データ分析を主に担当するとともに、論文を執筆した。
15 一過性レジスタンス運動による血清steroid hormone 応答(査読付)	共 著	平成13年6月	体力医学、50(3)、pp. 293-302	トレーニングによる身体の同化作用を反映する有効な指標を探索するために、一過性レジスタンス運動によるdehydroepiandrosterone sulfate (DHEAS) 応答を評価した。男性6名、女性6名を対象に一過性レジスタンス運動による血清ステロイドホルモン(テストステロン、DHEAS、コルチゾール) 応答を評価した。結果、運動後、血清テストステロンは男女で異なる変動をしたが、血清DHEASは男女共に同様の傾向で増加した。このことから、女性の運動によるDHEAS応答は同化作用を反映していることが示唆された。 共著者：相澤勝治、林貢一郎、秋本崇之、中村真理子、村井文江、目崎登 担当部分：研究計画よりアドバイスするとともに実験の一部を担当した。
16 Characteristics and Related Factors of Health Risk behaviors of Senior High School Students (高校生の健康リスク行動の特徴とその関連要因) (査読付)	共 著	平成13年7月	Japanese Journal of School Health, 42 (Supplement) pp. 108-110	高校生の健康リスク行動の実態を明らかにする目的、アンケート調査を実施した。3,146名高校生から回答が得られた。84%の高校生が飲酒をしていた。喫煙は、男子高校生の35%、女子高校生の14.8%が現在しているか、過去に経験があった。喫煙をしている高校生は、飲酒や性行動をしている割合が有意に高く、健康増進行動をしている割合が低かった。卒業後に就職を予定している高校生に喫煙、飲酒、ドラッグの経験が有意に高かった。 共著者：Junko Tashiro, Fumie Murai, Michiko Ozawa, Kazuko Naruse, Hiroaki Nishikawa. 担当部分：アンケート作成、データ分析を主に担当した。

17 妊娠中の身体的 minor disturbance および不安状態に及ぼす妊娠週数、分娩経験、運動習慣の影響(査読付)	共 著	平成14年1月	日本臨床スポーツ医学会誌、10 (1)、pp.45-53	妊娠中の身体的 minor disturbance (MD) および不安状態に及ぼす妊娠週数、分娩経験、運動習慣の関連を検討するためにアンケート調査を実施した。757名について分析した結果、1) 身体的MDのほとんどは妊娠中期より後期に高値を示した。2) 妊娠週数に関係なく、経産婦の身体的MDが高値であった。3) 不安は初産婦に高く認められた。4) 妊娠中の運動の身体的MDおよび不安への明らかな影響はみとめられなかった。 共著者：林貢一郎、相澤勝治、中村真理子、 <u>村井文江</u> 、目崎登。 担当部分：アンケート作成に関わるとともに、結果について討議した。
18 Path Analysis of Health Promoting Lifestyle Behaviors of High School and University Students and Related Factors (高校生・大学生用健康増進ライフスタイル行動の関連要因のパス分析)(査読付)	共 著	平成14年4月	Japanese Journal of School Health 43 (Supplement) pp.108-110	高校生および大学生の健康増進ライフスタイル行動の状況について発達と性差による状況から検討した。健康増進行動の総合得点は発達および性差による有意差は認められなかったが、下位の項目には有意差が認められ、高校生男子、高校生女子、大学生男子、大学生女子それぞれで健康行動パターンが異なることが明らかになった。また、パス解析の結果、健康増進行動に影響する要因もそれぞれのグループで異なることが明らかになった。 共著者：Fumie Murai, Junko Tashiro, Hiroaki Nishikawa, Kazuko Naruse and Michiko Ozawa 担当部分：アンケート作成、データ分析を主に担当するとともに論文を執筆した。
19 若年女性の月経周期に伴う心臓自律神経活動動態(査読付)	共 著	平成14年6月	体力科学、51(3)、pp.307-316	月経周期に伴う心臓自律神経活動動態について安静時と運動負荷後の反応について検討した。13名の正常月経周期にある女子大学生を対象にした結果、安静時における心臓自律神経活動の有意差は認められなかったが、運動負荷後の反応では、月経周期の各時期による異なった変動が認められ、とくに卵胞期、黄体期前期の差が顕著であり、黄体期における心臓副交感神経反応性の低下が認められた。 共著者：中村真理子、林貢一郎、相澤勝治、 <u>村井文江</u> 、目崎登 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。
20 高校女子柔道選手の月経現象の現状	共 著	平成14年	柔道科学研究、第7号、pp.1-6	ジュニア柔道選手における競技力向上のための経年的総合研究として、高校女子柔道選手392名を対象に月経についてのアンケート調査を実施した。結果、高校女子柔道選手では、運動性無月経が高率であった。また、月経痛が強い傾向にあり、月経周期の時期よりコンディションが大きく変動した。これらより、スポーツ選手としての健康管理の側面、さらにコンディショニングの立場からも積極的な介入の必要性が示唆された。 共著者：目崎登、 <u>村井文江</u> 、山口香、中村良三 担当部分：データ分析に関わった。
21 月経周期は漸増自転車エルゴメーター運動時の呼吸循環系および血漿カテコールアミン応答に影響しない	共 著	平成14年10月	日本臨床スポーツ医学会誌、第10巻、第2号、pp.297-301	月経周期による漸増自転車エルゴメーター運動時の呼吸循環系機能およびカテコールアミン応答に及ぼす影響を検討した。エストラジオールおよびプロゲステロン濃度から月経周期を分類し、卵胞期初期、排卵期、黄体期中期で比較した。6名の正常月経周期にある健康若年女性を対象にした結果、呼吸循環系(心拍数、平均血圧、酸素摂取量、二酸化炭素排泄量、分時換気量、呼吸交換比)は、月経周期による有意差は認められなかった。 共著者：林貢一郎、相澤勝治、中村真理子、 <u>村井文江</u> 、目崎登。 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。

22 月経周期に伴い顔面冷却刺激に対する心臓副交感神経系応答は変化する (査読付)	共 著	平成14年10月	体力科学、51(5)、pp. 437-446	月経周期に伴う心臓副交感神経応答に循環中枢を介する遠心路による影響があるかを検討するために、循環中枢の求心路である動脈圧反射を介さずに心臓副交感神経系活動を促進する顔面冷却刺激に対する心臓副交感神経系活動反応を比較検討した。正常月経周期にある8名の若年女性を対象とした結果、顔面冷却刺激に対する心臓副交感神経活動の反応時間は、月経周期によって異なる変動を示し、卵胞期において短縮、黄体期前期において遅延した。 共著者：林貢一郎、相澤勝治、中村真理子、 <u>村井文江</u> 、目崎登 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。
23 運動習慣からみた妊娠中の運動実施状況と実施理由の検討 (査読付)	共 著	平成15年1月	日本臨床スポーツ医学会誌、11(1)、pp. 38-47	妊娠期の運動の実施状況とその理由について、運動習慣との関連を検討した。757名のアンケートを分析した結果、1) 妊娠中の運動実施率は30.5%であり、最も多くされている運動は散歩であった。2) 運動非実施者の70.7%は妊娠中に運動を実施したいと考えていた。3) 運動をしない理由から、運動を促進するためには具体的な情報提供、出産後に親子でできる運動に支援の必要性が示唆された。 共著者： <u>村井文江</u> 、林貢一郎、中村真理子、相澤勝治、佐々木純一、目崎登。 担当部分：アンケート作成、データ分析を主に担当するとともに論文を執筆した。
24 運動が月経周期および月経に関する意識に及ぼす影響 (査読付)	共 著	平成15年7月	日本女性心身医学学会誌、8(2)、pp. 161-168	女性スポーツ選手の日常的なトレーニングが、月経周期や月経周期に伴う身体症状に影響しているかを検討した。正常月経周期を有する大学女子ハンドボール選手12名と運動習慣のない女子大学生(15名)を月経期、卵胞期、黄体期で比較した。結果、正常月経周期でありながらも、ハンドボール群では、黄体期の血清 estradiol、progesterone は有意に低値であった。トレーニングによる月経周期および月経についての意識への影響が示唆された。 共著者：橋本有紀、目崎登、 <u>村井文江</u> 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。
25 Restoring serum dehydroepiandrosterone sulfate level increases after 8-week resistance training among young females (若年女性における8週間のレジスタンストレーニング後血清DHEA: dehydroepiandrosteron の増加) (査読付)	共 著	平成15年11月	European Journal of Applied Physiology, 90(5-6)、pp. 575-580	dehydroepiandrosteron (DHEA) が女性のレジスタンス運動に伴う身体の同化作用の指標になりえるかを検討した。運動習慣のない健康な若年女性を対象とし、トレーニング群(9名)は、1週間に2回のレジスタンストレーニングを8週間実施し、非トレーニング群(10名)と比較した。結果、8週間のレジスタンストレーニングによって筋量の増加と安静時血中DHEA-S濃度の増大が認められ、血中DHEA-Sがレジスタンストレーニングに伴う身体の同化を反映する指標とする可能性が示唆された。 共著者：Katuji Aizawa, Takayuki Akimoto, Hironomu Inoue, Fuminori Kimura, Mihyun Joo, <u>Fumie Murai</u> , Noboru Mesaki 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。
26 若年女性と月経周期に伴う動的・静的バランス能力の変化 (査読付)	共 著	平成16年4月	体力科学、53(2)、pp. 197-204	運動能力の1つであるバランス能力が月経周期によって影響を受けているかを検討した。定期的な運動習慣を持ちかつ正常月経周期の12名の若年女性を対象として、動的バランス(動的バランステスト)、静的バランス能力(重心動揺テスト、関節弛緩性テスト)を月経周期の5つの時期で比較した。結果、重心動揺テストと関節弛緩性テストのいくつかの項目で、月経周期による有意な差が認められ、静的バランス能力は月経周期の影響を受ける可能性が示唆された。動的バランス能力は月経周期による差は認められなかった。 共著者：林ちか子、池田瑞音、相澤勝治、 <u>村井文江</u> 、目崎登 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。

27 ヘルスボランティア指向のある看護大学生の『身近な健康問題とケア』の認識とボランティア活動（査読付）	共 著	平成16年6月	聖路加看護学会誌、8(1)、pp. 36-43	看護学教育におけるサービス・ラーニングプログラムの開発の視点からヘルス・ボランティアを指向する看護大学生が認識する身近な健康問題とケア、ボランティア活動経験を明らかにすることを目的とした。16名の看護大学生にフォーカスグループインタビューを実施し、内容分析を行った。結果、身近な健康課題は、生活習慣や人間関係における精神的ストレスであり、健康課題とは認識しているが行動に移せない状況が語られた。ボランティア活動については、将来の自らの目標達成の一助として行っていた。大学の地域・社会貢献としての学生ヘルス・ボランティア支援に関する課題が挙げられた。 共著者：三橋恭子、田代順子、小澤道子、菱沼典子、川越博美、森明子、荒木田美香子、村井文江、野口真貴子 担当部分：文献検討、インタビューガイド作成、学生募集に関わった。
28 The relationship between exercise induced oxidative stress and the menstrual cycle(運動による酸化ストレスと月経周期の関連)（査読付）	共 著	平成16年10月	European Journal of Applied Physiology, 93(1-2), pp. 82-86	女性ホルモンの運動による酸化ストレスの影響を検討するために、月経周期による比較を行った。正常月経周期で運動習慣のない成人女性18名を対象とした。結果、運動後、TBARS(thiobarbituric acid reactive substance)は卵胞期に、T-SODは黄体期に有意に減少した。△T-SOD(thiobarbituric acid reactive substance)と△EC-SOD(extracellular superoxide dimutase)はestradiolとの負の相関を示した。estradiolの高い時期には、運動によるフリーラジカルが除去される可能性が示唆された。 共著者：Mi Hyun Joo, Eisuke Maehata, Tetsuo Adachi, Akiko Ishida, Fumie Murai, Noboru Mesaki 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。
29 臨地実習における看護学生の気分変化と自律神経反応との関連（査読付）	共 著	平成19年3月	札幌市立大学研究論文集、1(1)、pp. 31-34、	臨地実習による看護学生の気分の自覚および自律神経反応の変化ならびに関連を明らかにすることを目的とした。19名の看護学生に実習前・中・後でPOMS 短縮版による気分状態および自律神経反応を測定した。その結果、実習中に緊張、不安、抑うつ、疲労、困惑を自覚しても、活気得点の実習前、中、後と高い学生は、自律神経反応が実習終了後には実習前の状態に回復していた。一方、自律神経反応が不安定な学生は、ネガティブな気分の自覚が実習後も続き、実習前の状況には回復していなかった。 共著者：樋之津淳子、林啓子、村井文江、高島尚美 担当部分：研究計画の協議、実験の遂行をするとともに、分析の一部に関わった。
30 月経周期における一過性レジスタンス運動時の骨代謝応答（査読付）	共 著	平成19年4月	体力科学、56(2)、pp. 215-222	一過性レジスタンス運動を用い、健常者のアディポネクチン、レプチンの応答を検討した。日常生活において特別な運動習慣を持たない健常男性8名を対象とし、5種類のレジスタンス運動と、運動を行わない対照実験を1~2週間の間隔においてランダムな順序で実施した。レプチンは、運動60分後、および運動24時間後に有意な低下が認められた。アディポネクチンに明らかな変化はなかった。また、交互作用が認められた血糖、インスリン、乳酸について検討したところ、運動群のインスリン、乳酸は、運動後に有意な増加を認めたが血糖値には変化がなかった。全身の大筋群を使用した一過性レジスタンス運動は、運動後に血中のレプチンの濃度を低下させることが示された。 鈴木なつ未、相澤勝治、銘苺瑛、朱美賢、村井文江、向井直樹、目崎登 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。

<p>31 Pre-germinated brown rice could enhance maternal mental health and immunity during lactation. (授乳期の玄米食が母親のメンタルヘルスと免疫状態を高める可能性) (査読付)</p>	共 著	平成19年10月	European Journal of Nutrition, 46(7), pp. 391-396	<p>玄米食が、授乳期女性のメンタルヘルスおよび免疫状態を高めるかを検討した。母乳栄養をしている出産後2か月から11か月の女性41名をRCTにて、玄米食群と白米食群に分け、2週間のそれぞれの指定された主食にて食事をした。結果、玄米食群は、介入後、POMSの得点の上昇、唾液中のアミラーゼ上昇および母乳中のs-IgA上昇が認められた。白米食群では認められなかった。これらより、玄米食による精神的健康への影響が示唆された。</p> <p>共著者：Shigeko Sakamoto, Takashi Hayashi, Keiko Hayashi, Fumie Murai, Miyo Horii, Kiyoshi Kimoto, Kazuo Murakami 担当部分：研究計画の協議、実験の遂行、分析結果の討議に関わった。</p>
<p>32 女性アスリートの骨代謝動態に月経状態および種目特性が及ぼす影響 (査読付)</p>	共 著	平成20年1月	日本臨床スポーツ医学会誌、16(1)、pp. 72-78	<p>女性アスリートの骨代謝動態への月経状態および種目特性の影響を検討した。対象は、大学女性アスリート20名で、正常月経群13名(柔道選手6名、長距離選手7名)と月経異常群7名(長距離選手)と対照群としての一般健康女性7名である。骨形成マーカーの骨型アルカリフォスファターゼ(BAP)と骨吸収マーカーのI型コラーゲンCテロペプチド(ICTP)は、正常月経群で高値を示した。月経異常は低エストロゲン状態による低骨代謝回転を導くことが示唆された。</p> <p>共著者：鈴木なつ未、相澤勝治、中村真理子、今井智子、朱美賢、村井文江、目崎登、今川重彦 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。</p>
<p>33 UNICEF/WHOの「母乳育児成功のための10ヶ条」の視点からみた関東6県における母乳育児の状況(第2報) 母乳育児支援と母乳育児率の関連 (査読付)</p>	共 著	平成20年1月	母性衛生、48(4)、pp. 505-513	<p>UNICEF/WHO「母乳育児成功のための10ヶ条」の視点から母乳育児支援状況と母乳育児率について検討した。関東6県の分娩施設にアンケート調査を実施し、243の有効回答が得られた。母乳育児率は、退院時50.5%、1ヵ月健診時50.7%であった。出生当日からの母子同室と自律授乳が実施できる状況であれば80%以上の母乳育児率であった。加えて、ミルクを補充しない意向があり、そのために支援が実践されている場合には90%以上の母乳育児率になることが示唆された。</p> <p>共著者：村井文江、齋藤早香枝、野々山未希子、江守陽子、谷川裕子 担当部分：アンケート作成、データ分析を主に担当するとともに、論文を執筆した。</p>
<p>34 UNICEF/WHOの「母乳育児成功のための10ヶ条」の視点からみた関東6県における母乳育児の状況(第1報) 母乳育児支援の現状 (査読付)</p>	共 著	平成20年1月	母性衛生、48(4)、pp. 496-504	<p>UNICEF/WHOの「母乳育児成功のための10ヶ条」の視点から母乳育児支援の実態を明らかにすることを目的とした。関東6県の243分娩施設のアンケートを分析した。結果、98.8%の施設が母乳栄養を勧めており、半数以上で完全母乳栄養が試みられていた。80%以上の施設が正しい授乳方法と妊婦への教育を実施している反面、実施施設が50%未満である支援には、早期接触、出生当日からの自律授乳、終日の母子同室などが含まれていた。また、ルーチンで実施している支援について見直しの必要性も示唆された。</p> <p>共著者：村井文江、江守陽子、齋藤早香枝、野々山未希子、谷川裕子 担当部分：アンケート作成、データ分析を主に担当するとともに、論文を執筆した。</p>

35 臨地実習で看護学生が体験した患者からの暴力とそれに対する学生の認識（査読付）	共 著	平成21年7月	日本看護学教育学会誌、19(1)、pp.45-59	<p>臨地実習で看護学生が体験した患者からの暴力の実態を明らかにすることを目的に、A県内の看護師養成学校15校の最終学年にある学生にアンケート調査を行い、593名より有効回答を得た。その結果、352名(59.4%)の学生が臨地実習で患者からの暴力を体験しており、精神的暴力が670件(44.7%)で最も多く、以下、性的暴力645件(43.1%)、身体的暴力183件(12.2%)の順であった。領域別では精神看護学領域(29.9%)、成人看護学領域(28.7%)、高齢者看護学領域(22.0%)が多かった。また、領域による暴力の種類にも特徴が認められた。</p> <p>共著者：村井文江、三木明子、江守陽子 担当部分：アンケート作成、データ分析を主に担当するとともに、論文を執筆した</p>
36 妊娠12週以降の死産を経験した母親への分娩施設における看護支援 茨城県での実態調査（査読付）	共 著	平成21年11月	茨城県母性衛生学会、第27号、pp.1-7	<p>分娩施設における死産を経験した母親に対する看護支援の現状を明らかにすることを目的とした。A県内で分娩施設にアンケート調査を依頼し、21施設から有効回答が得られた。亡くなった子どもとの面会を実施している施設は19施設(90.5%)であった。子どもの遺品を渡している施設は11施設(52.4%)、子どもの着替えなどの母児関係を築く支援を実施している施設は16施設(76.2%)、退院後の支援を実施している施設は13施設(61.9%)であった。死産を経験した母親に対する看護支援方針があると答えた施設は12施設(57.1%)であり、看護支援方針の有無により有意差が認められた支援は遺品提供のみであった。</p> <p>共著者：能町しのぶ、村井文江、江守陽子 担当部分：研究計画の協議、アンケート作成、分析結果の討議に関わった。</p>
37 看護学士課程修了後1年から3年の看護職の就業動向と職場定着状況（査読付）	共 著	平成23年5月	日本看護学論文集：看護管理、第41号、pp.129-132	<p>A大学で看護学士課程を修了した卒業生の就業動向と職場定着状況について調査した。75名を分析対象とした。就業形態は「正規職員」が68名(91%)であった。就職してからこれまでに退職したと思ったことが「ある」人は23名(31%)で、理由は「仕事が大変」8名、「自分の能力不足」5名、「理想と違う」5名、「人間関係」5名、などであった。退職したことのある人は10名(13%)で、退職理由は「転職」「進学」「他病院への移動」「体調不良」「職場環境」「家庭の事情」であった。今後退職を予定している人は20名(27%)であり、同様の理由が挙げられた。</p> <p>共著者：小池秀子、江守陽子、三木明子、村井文江 担当部分：研究計画およびアンケート調査に関わった。</p>
38 看護学生が看護実習中に経験した患者からの暴力について（査読付）	共 著	平成23年7月	日本看護学教育学会誌、21(1)、pp.59-64	<p>看護学生が実習中に経験した患者からの暴力を明らかにすることを目的に、実習中の患者からの暴力のうち最も困った1事例について自由記述によるアンケート調査を行った。その結果、学生は、精神・成人看護学領域で暴力を多く体験しており、「性的接触を要求する」「性的な発言・質問をする」など性的暴力が多く挙げられた。また、患者からの暴力を受けた学生の2割が、暴力を受けた事実を教員や実習指導者に全く伝えていないことが分かった。</p> <p>共著者：江守陽子、三木明子、村井文江 担当部分：研究計画の協議、アンケート調査、分析結果の討議に関わった。</p>

39 Home-visit program for mother during child-raising: comparing mother who did and did not receive home-visit services. (育児期の母親による家庭訪問サービスの評価: 家庭訪問を受けた母親と受けなかった母親の比較) (査読付)	共 著	平成23年11月	General Medicine, 12(2), pp.61-68	<p>出産後に家庭訪問指導を受けた母親と受けなかった母親の対比から家庭訪問サービスの評価をすることを目的とした。家庭訪問を受けた群、受けなかった群、それぞれ273名であった。家庭訪問を受けた群は、子育てに対する不安が軽減し自信がついたことを高く評価しており、初産婦において有意に高かった。一方、全ての母親に家庭訪問についての情報が伝わっていないこと、母親のニーズに合った訪問時期になっていないことが課題として見出された。</p> <p>共著者: Yoko Emori, Miyuki Hashimoto, Kayuri Furuya, <u>Fumie Murai</u></p> <p>担当部分: 研究計画の協議、分析結果の討議に関わった。</p>
40 不妊治療女性の日常生活と健康状態 (査読付)	共 著	平成24年3月	茨城県母性衛生学会誌、第30号、pp. 36-42	<p>不妊治療目的医療で機関を受診した女性の治療に伴う生活状況と健康状態を明らかにすることを目的とした。199例について分析を行った。対象女性の平均年齢は34.7(SD=4.2)歳で、有職者は67%、月収は85%が400万円以上、1ヵ月の平均治療費は約6万円であった。SF-36の結果から、心身の健康度は、国民標準値と比較して低いことが示された。不妊治療の過程のみならず生活全般の健康支援が必要である。</p> <p>共著者: 鶴巻陽子、江守陽子、<u>村井文江</u>、</p> <p>担当部分: 第一著者の修士論文の一部分。担当教員として計画から分析、執筆まで指導をした。</p>
41 低出生体重児を持つ母親の心の支えとなったNICU看護師の関わり 母親の自由記述の内容分析 (査読付)	共 著	平成24年3月	茨城県母性衛生学会誌、第30号、pp. 42-46	<p>NICU看護師のどのような関わりが、母親の心の支えとなったかを明らかにすることを目的とした。全国のNICUにおいて承諾が得られた35施設にて、低出生体重児を持つ母親を対象にアンケート調査を実施した。78名の自由記述を分析した結果、NICUに子どもが入院している母親にとって心の支えとなった看護師の関わりは、【自分を尊重していることが感じられる】【明るい気持ちにさせる】【子どもの大切な扱い】【子どもの様子を伝える】【子どもへの関わりを促す】であった。</p> <p>共著者: 南雲史代、<u>村井文江</u>、江守陽子</p> <p>担当部分: 研究計画から分析まで関わった。</p>
42 実務経験20年以上の看護師におけるキャリア・アンカーとキャリア継続要因 (査読付)	共 著	平成24年4月	日本看護学論文集: 看護管理、第42号、pp. 138-140	<p>A大学病院に勤務する看護実務経験20年以上の看護師65名に対し、『キャリア・アンカーセルフアセスメント』を用いた調査と、キャリア継続要因の自由記述式アンケートを行った。その結果、キャリア・アンカー項目のうち平均スコアが最も高かったのは[生活様式]、次いで[奉仕・社会貢献]であり、最も低かったのは[全般的管理コンピタンス]であった。キャリア継続要因で最も多かった内容は「支援者の存在・協力」(42件)であり、次いで「仕事が好き・やりがいがある」(18件)、「生活のため」(5件)などであった。</p> <p>共著者: 三木明子、<u>村井文江</u>、小池秀子、江守陽子</p> <p>担当部分: 研究計画の協議、アンケート調査、分析結果の討議に関わった。</p>

43 初めて育児をする母親が離乳を通して母親役割を獲得していくプロセス 離乳後期における母親役割の質的研究 (査読付)	共 著	平成25年4月	母性衛生、54(1)、pp. 69-77	離乳という育児をとおして獲得される母親役割のプロセスを明らかにすることを目的とした。離乳後期にある第1子を育てている母親24名に面接調査を行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。抽出された7つのカテゴリーは、Mercerの母親役割獲得の予期的段階、非形式的段階、形式的段階、個人的段階の内容に一致していた。【自分の子どもがわかる】は、コアカテゴリーであり、離乳をとおしての母親役割獲得の順調さに関連すると同時に、母親役割獲得の個人的段階を充実させていた。 共著者：中田久恵、村井文江、江守陽子 担当部分：第一著者の修士論文の一部分。指導教員として計画から分析、執筆まで指導をした。
44 不妊治療の長期化が女性の日常生活と健康に与える影響について (査読付)	共 著	平成25年4月	母性衛生、54(1)、pp. 78-85	不妊治療の期間が女性の日常生活状況と健康状態への影響を明らかにする。不妊治療の開始後4年以内で、過去に不妊治療通院歴のない未産婦199名に対し質問紙調査を実施した。結果、治療期間13ヵ月以上と12ヵ月以下比較した。13ヵ月以上の群は、1ヵ月あたりの治療費が高額であり、治療のために余暇やレジャーの中断が多かった。就労者は治療について職場に告知しているものが多く、職場の協力が得られていた。SF-36では身体機能が低かった。一方、健康関連QOLは、治療開始当初から低かった。 共著者：鶴巻陽子、江守陽子、村井文江、永井泰、小笠原加代子、石渡勇 担当部分：第一著者の修士論文の一部分。担当教員として計画から分析、執筆まで指導をした。
45 低出生体重児を持つ母親の育児に対する自信に関連する要因の検討 レジリエンスに焦点をあてて (査読付)	共 著	平成25年7月	小児保健研究、72(4)、pp. 500-507	低出生体重児を持つ母親のレジリエンスと育児に対する自信の関連、レジリエンスと看護支援の関連を明らかにするために、無記名自記式質問紙調査を実施し74名を分析した。育児に対する自信は、レジリエンス($\beta=0.34$)、および育児経験($\beta=0.27$)が影響していた。レジリエンスは、両親・親戚からの援助(以下:両親・親戚)($\beta=0.29$)、夫($\beta=0.25$)、および年齢($\beta=-0.26$)が影響していた。 共著者：南雲史代、村井文江、江守陽子 担当部分：第一著者の修士論文の一部分。指導教員として計画から分析、執筆まで指導をした。
46 小学校3年生の保護者がとらえる“性教育”と“家庭における性教育の取り組み”に関する質的分析 思春期の子どもを持つ家庭における性教育の支援の検討に向けて (査読付)	共 著	平成26年4月	思春期学、32(1)、pp. 176-187	性教育のとらえ方と家庭における性教育の取り組みを質的に明らかにすることを目的として、小学校3年生の保護者に質問紙調査を実施した。242人の有効回答を内容分析した。【性教育の内容】は、《思春期におけるからだやこころの成長》、《命について》、《人間関係について》、《性行動について》と包括的に挙げられたが、個々の保護者がとらえる性教育の内容は限られていた。【家庭での性教育の取り組み】としては、〈親が教える・話す〉が、〈子どもの質問に答える〉より多く挙げられた。一方で【家庭で教える内容】は、【性教育の内容】に比べ内容、数ともに少なかった。 共著者：村井文江、江守陽子 担当部分：アンケート作成、データ分析を主に担当するとともに、論文を執筆した。

47 Relationship of socioeconomic status with psychological state and the number of weeks of pregnancy at the time of a first prenatal examination among perinatal women. (褥婦の社会経済的状態と心理的状态および妊娠初診時期の関連) (査読付)	共 著	平成26年6月	General Medicine, 15(1), pp.34-42	SESと妊娠の初診時期および心理的状态の関連を明らかにすることを目的とした。妊娠33～37週の妊婦に、質問紙法にて抑うつ状況の可能性と人生満足度尺度を測定し、出産後に構造面接にてSESおよび属性のデータを得た。有効回答151名について分析を行った。結果、経済的困窮を感じている女性は、妊娠期のEPDSが9点以上の割合が多かった。また、パートナーの学歴が高卒以下の場合、妊娠の初診が妊娠12週以降になる可能性が高かった、OR =10.99、95%CI [3.15, 86.79]。 共著者：Yoko Emori, Sizuka Amagai, Hiomi Koizumi, Fumie Murai, Atsuko Kawano, Chihoko Sankai 担当部分：研究計画の協議、分析結果の討議に関わった。
48 妊娠女性の社会経済的地位と抑うつおよび人生満足度の関係 (査読付)	共 著	平成26年7月	母性衛生、55(2)、pp.387-395	妊婦の社会経済的地位と抑うつおよび人生満足度との関連について明らかにすることを目的とした。アンケート調査および面接にて調査し、153名の分析をした。結果、対象者の年齢は20歳代が多く、学歴は夫婦とも高くなく、拡大家族が多かった。人生満足度得点はパートナーの学歴と関連が認められた。経済的困難感を自覚している女性は、妊娠中に抑うつであることが多くOR=4.611、95%CI [1.341, 15.850]、パートナーの雇用形態が正規雇用のときは、抑うつであることが少なかったOR=0.099、95%CI [0.016, 0.631]。 共著者：天貝静、江守陽子、村井文江、小泉仁子 担当部分：第一著者の修士論文の一部分。担当教員として計画から分析の指導をした。
49 家庭における性教育を支援するプログラム開発と評価 (学位論文)	単 著	平成27年3月	筑波大学審査学位論文 (博士)	思春期の性の健康を促進するために家庭における性教育を充実させる必要性から、親が性教育を実施するための支援プログラムを開発・評価してプログラムの有用性を検討することを目的とした。プログラム理論に基づいて計画・実施し、ニーズ調査、プログラムの開発、プログラムの評価を行った。結果、開発されたプログラムは、思春期前期である小学校3年生の親に対して、性教育の自信を高め、性教育の実施を促進する有用性が示された。
50 茨城県内の産科医療機関における母乳育児の実態 (査読付)	共 著	平成27年3月	茨城県母性衛生学会誌、第33号、pp.1-5	茨城県内の産科医療機関における母乳育児支援の実態を明らかにすることを目的とした。無記名自記式質問紙を用いた横断的調査を実施し、有効回答が得られた39施設について分析した。結果、94.9%の施設が母乳育児を勧めており、完全母乳育児の母親の割合は退院時49.1%、産後1ヵ月健診時57.7%であった。母乳育児支援の実践率は、「妊婦へ母乳育児の利点を説明」74.4%、「退院後の支援」92.3%、「分娩直後からの早期母子接触」38.5%、「分娩直後からの母子同室」30.8%、「分娩当日からの自律授乳」41.0%であった。 共著者：小野加奈子、村井文江、江守陽子 担当部分：研究計画の協議、分析結果の討議に関わった。
51 産科医療機関における母乳育児のための実践と退院時母乳育児率との関連 (査読付)	共 著	平成27年7月	母性衛生、56(2)、pp.387-395	母乳育児のための実践と退院時母乳育児率との関連を明らかにすることを目的とした。関東圏の産科医療機関に質問紙調査を行い、221施設について分析した。結果、退院時母乳育児率は、平均47.6%であった。母乳育児のための実践と退院時母乳育児率は、全ての実践において相関を認めた(p<0.01)。母乳育児のための実践と退院時母乳育児率では、「母乳育児環境」(OR=2.378、95%CI[1.265, 4.470])と「継続化への支援」(OR=1.897、95%CI[1.021, 3.526])の2変数が関連要因として抽出された。 共著者：小野加奈子、村井文江、江守陽子 担当部分：第一著者の修士論文の一部分。担当教員として計画から分析の指導をした。

52 Willingness to participate in a sex education parent support (SEPS) program and contributing factors among parents with adolescent child(思春期の子どもを持つ親への性教育支援講座への参加意思に関連する要因の検討) (査読付)	共 著	平成28年7月	The Asian Journal of Child Care, No. 7, pp. 1-11	家庭における性教育への支援に対するニーズ調査の一部として、性教育支援講座の参加を希望する親の特徴を明らかにすることを目的とした。A市の小学校3年生と中学2年生の親1461名に質問紙を配布し、627名を分析した。結果、性教育支援講座の参加希望に関連が認められたのは、家庭での性教育の必要性、OR = 6.141、95%CI [3.617, 10.427]、子どもの性に関する心配、OR = 3.526、95%CI [1.813 , 6.790]、家庭における性教育の実践状況、OR = 0.468、95%CI [0.303 , 0.723]、子どもの学年、OR = 0.468、95%CI [0.445 , 0.982]であった。 共著者：Fumie Murai, Yoko Emori 担当部分：博士論文の一部を修正・加筆した論文。
53 死産した母親が亡くなった子どもと関わることで生じる体験	共 著	平成29年12月	臨床死生学、22、pp. 1-10	死産した子どもと関わった22人の母親を対象に、亡くなった子どもとの関わりによって生じる体験をグランデッドセオリーアプローチ法に基づいて分析した。亡くなった子どもと関わることで、死産体験の意味づけ、亡くなったことの受け入れがされていることが明確になった。 共著者：野町しのぶ、村井文江 担当部分：第一著者の修士論文の一部。指導教員として計画から執筆の指導をした。
54 健康問題としての高校生・大学生のデートDVの現状と予防の検討	共 著	平成31年3月	常磐看護学研究雑誌、第1号、pp. 7-16	文献よりデートDVの状況およびデートDV予防について検討した。高校生・大学生のデートDV経験率が増加傾向にあることは認められなかったが、デートDVがエスカレートする要因が複数存在した。包括的にアプローチする必要性が示された。 共著者：村井文江、坂間伊津美、猿田和美 担当：文献の検討から執筆まで、主として行った。
55 早期産・低出生体重児が音声的コミュニケーションを図る場としての保育器内外の環境音の実態	共 著	平成31年3月	常磐看護学研究雑誌、第1号、pp. 37-43	保育者が入院中の早期産・低出生体重児と音声的コミュニケーションを図ることができると適切な場であるかを検討するために、環境音の実態を明らかにした。結果から、保育者とコミュニケーションを図ることが可能な環境であることが示唆された。 共著者：南雲史代、村井文江、江守陽子 担当：第一著者の博士論文の一部。指導教員として計画から執筆までの指導をした。
56 地域包括ケアシステムにおいて看護師に求められる能力に関する文献検討 (査読付)	共 著	令和2年3月	常磐看護学研究雑誌、第2号、51-91.	看護基礎教育で育成する能力を検討するために、わが国の地域包括ケアシステムで求められる看護師の能力を文献から明らかにした。6つのカテゴリー、43サブカテゴリーが抽出された。看護基礎教育における達成と教育方法が今後の課題として挙げられた共著：海野潔美、田村麻里子、村井文江 担当部分：共に分析を行い、執筆に関わった。
57 中国の看護教育と看護教員のキャリア開発 (査読付)	共 著	令和2年3月	城西国際大学紀要 看護学部、28 (8)、41-55	中国における看護教育に関する文献レビューおよび中国A大学看護学院での研修を通して、中国の看護教育と看護教員のキャリア開発支援に対する示唆を得ることを目的とした。結果、看護系大学教員としての資格およびキャリア支援、中国の兼任教員制度からの日本の看護教員不足への対策に関する示唆が得られた。 共著：鈴木明子、山本裕子、村井文江、石原あや、石村佳代子、山田律子、王玉英 担当部分：中国にてインタビューに関わるとともに、主に考察部分を担当した。

<p>58 1. 介護保険施設における看護実践能力の実態と関連因子</p> <p>59 小学3年生親子性教育「命のたんじょう」活動報告</p>	<p>共 著</p> <p>共 著</p>	<p>令和4年3月</p> <p>令和4年3月</p>	<p>常磐大学看護学研究雑誌, 5巻, pp. 1-11.</p> <p>常磐大学看護学研究雑誌, 5巻, pp. 45-55.</p>	<p>介護保険施設における看護実践能力の実態と関連因子を明らかにするため介護施設の看護職員245人を対象とした質問紙調査を実施した。結果、170人より回答が得られた（有効回答率69.3%）。看護実践能力の項目得点の中央値は3.8、下位尺度の得点は変調に気づき対応する力が4.0で最も高かった。介護保険施設における看護実践能力の向上には、ケアカンファレンスの定期的な開催、看取りケア体制を整えること、組織における学習を支援することが示唆された。 共著：菅原直美、<u>村井文江</u> 担当部分：データ分析方法等のアドバイスをを行い、共に考察した。</p> <p>A市と連携のもと実施している親子性教育について、活動報告として、その内容を紹介した。また、親子性教室後の保護者への家庭における性教育についてのアンケート調査結果を紹介した。家庭での性教育の必要性を認めながら実施できてない課題が明らかになった。 共著：南雲史代、中田久恵、<u>村井文江</u> 担当部分：実践に関わるとともにアンケート結果の集計・分析についてアドバイスした。</p>
<p>(その他：総説/依頼稿)</p> <p>1 ホルモン補充療法と運動療法</p> <p>2 妊娠に伴う生理的变化:骨格系の変化</p> <p>3 思春期の性機能とスポーツ</p> <p>4 思春期の痩せ・肥満と性機能</p>	<p>共 著</p> <p>共 著</p> <p>共 著</p> <p>共 著</p>	<p>平成8年12月</p> <p>平成10年4月</p> <p>平成10年4月</p> <p>平成11年2月</p>	<p>臨床スポーツ医学、13(12)、pp. 1367-1369</p> <p>ペリネイタルケア、17(4)、pp. 341-346</p> <p>産婦人科の実際、47(11)、pp. 1829-1835</p> <p>産婦人科治療、78(2)、pp. 226-229</p>	<p>更年期障害とスポーツの特集において執筆した論文。中高年女性の健康上の問題が、加齢に伴う卵巣機能の低下による estrogen の欠乏や運動不足が関連していることを指摘したうえで、更年期におけるホルモン補充療法と運動療法の実際および効果について具体的に記述した。 共著者：目崎登、<u>村井文江</u> 担当部分：共同執筆につき、本人の担当部分の抽出は不可能</p> <p>周産期の生理学の連載講座において執筆した論文。妊娠に伴う生理的变化として骨格系の変化について、脊柱の構成と変化、骨盤の構成と変化、妊娠中の歩行特性について記述した。 共著者：目崎登、<u>村井文江</u>、白土真紀 担当部分：共同執筆につき、本人の担当部分の抽出は不可能</p> <p>特集：見直してみよう思春期の諸問題において執筆した論文。一流女子スポーツ選手では、初経発来の遅延、続発性無月経などの月経周期異常が高率に認められ、原因として①精神的・身体的ストレス、②体重（体脂肪）の減少、③ホルモン環境の変動など挙げられている。一流選手に限らず、スポーツによって生じるこれらの問題に対応が必要であることを論じた。 共著者：目崎登、<u>村井文江</u> 担当部分：共同研究につき、本人の担当部分の抽出は不可能</p> <p>リプロダクティブヘルスの視点から、思春期の痩せおよび肥満が性機能に及ぼす影響について論じた。女性の身体における体脂肪の意義は、女性らしい丸みを帯びた体型を作り出すばかりでなく、各種生理機能の維持のために重要な役割を果たしている。体脂肪は、性ステロイドホルモンの代謝に関与していることから、思春期における初経発来や成熟期の排卵性月経周期確立のためにも、体脂肪を適切に保持することが非常に重要である。 共著者：目崎登、<u>村井文江</u> 担当部分：共同研究につき、本人の担当部分の抽出は不可能</p>

5	プライマリケアにおける思春期女性の診かた	共 著	平成12年7月	治療、82(7)、pp.13-17	思春期女性の診療に際して必要な産婦人科疾患に関連する注意点について解説した。性機能評価と関連して身体発育状態のチェックが必要である。思春期における婦人科疾患の2/3は月経異常であり、その中で続発性無月経が最も多い。また、月経異常に関連して食事状況を始めとする日常生活について評価する必要がある。性交経験がある場合には、妊娠および性感染症 (STD) の存在についてのチェックが必要であり、産婦人科受診も考慮する。 共著者：目崎登、村井文江 担当部分：共同研究につき、本人の担当部分の抽出は不可能
6	学生のヘルス・ケアを考えるー看護系大学保健でのヘルスプロモーションー	共 著	平成13年2月	Quality Nursing、7(2)、pp.116-126	「高校生・大学生の健康増進ライフスタイル行動の発達の・行動科学研究」を元にした総説である。 看護学生は他の一般学生に比較し、健康に関する知識の獲得には有利であり、その知識を使って何をすべきかを理解しているが、実際の健康増進行動に結びついていない現状がある。今後の課題として、自らの健康についての概念の意識化と健康評価技術の育成、「健康の気がかり」の軽減に向けての取り組み、健康リスク・ライフスタイルの軽減、健康的セクシュアリティの理解と確実な避妊技術、自分に合った運動やフィットネス方法の選択と継続力の育成などが挙げられる。 共著者：田代順子、村井文江 担当部分：共同研究につき、本人の担当部分の抽出は不可能
7	月 経	単 著	平成14年6月	小児科診療Q&A、第36号、pp.914-917	思春期の月経に関する諸問題とその対応について、看護の視点から解説したもの。臨床的問題としては思春期に多い無月経に焦点をあてその要因について解説した。また日常的問題として、月経随伴症状を取り上げ、QOLの視点から考えていく必要性を強調した。これらの現状を踏まえ、医療者の対応として、適切な症状の軽減に加え思春期女性が受診しやすい医療施設作りについて述べた。
8	ウィメンズヘルスとスポーツ	共 著	平成16年6月	治療、86(6)、pp.111-116	健康意識の高揚に伴い、日常的にスポーツに親しむ人々が増加している。しかし、誤った方法でスポーツは健康障害にもつながる。ライフサイクルの視点からは、妊娠期および中・高年女性のスポーツの効果と問題点を提示し、今後の方向性を示した。また、女性の躍進が目覚しい競技スポーツ界においても激しいトレーニングのために月経現象に影響を及ぼすことがある。競技スポーツにおける無月経を始めとする問題の現状と対処方法について解説した。 共著者：目崎登、村井文江 担当部分：共同研究につき、本人の担当部分の抽出は不可能
9	思春期における栄養の基礎知識	単 著	平成20年7月	小児看護、31(8)、pp.1021-1030	子どもの発達段階別にみる栄養の基礎知識として解説した。思春期は、成長のために、人生の中で最もエネルギーおよび栄養摂取の多い時期である。この時期に生じやすい食行動の問題として、欠食、偏食・過食・少食、孤食・個食、飲酒が挙げられる。これらの食行動が生じやすい社会的背景およびこれら食行動の結果生じている、貧血、肥満、神経性食欲不振症、ビタミンB欠乏症について解説し、家庭を基盤として栄養・食事の教育の必要性を提示した。
10	母乳育児支援とその現状	単 著	平成21年10月	産婦人科治療、99(4)、pp.360-366	母乳育児が推進されている中、約20年間、母乳栄養率が横ばいで推移している。このような経緯を踏まえ、著者が2004年に実施した母乳育児支援に関する調査等を基に、支援状況および支援における課題について述べた。課題として、専門職として、どうすれば母乳育児ができるのかを根拠をもって支援できる能力が必要であることを提示した。産後の乳房管理と母乳育児支援の特集の1つとして解説した。

11 助産の場での看護実践 「赤ちゃんの死」に対する助産の場での子どもへの看護ケアと家族に寄り添う看護ケア	共 著	平成21年12月	小児看護、32(13)、 pp. 1727-1733	「赤ちゃんの死」の1つである死産・誕生死に対する看護ケアについて解説した。助産の場では、母親の悲嘆過程へのケア、死産・誕生死した子どもの尊厳が保てるend of life のケアが行われている。これらの看護ケアを異なった角度からみると、死産・誕生死した子どもの親になること、死産・誕生死した子どもを看護ケアの対象として関わることの重要性が見えてくる。また、これらの看護ケアが、母親や家族に寄り添ってなされることで、助産の場における質の高いend of life の看護ケアとなっていく。 共著者：能町しのぶ、村井文江 担当部分：共同執筆につき、本人の担当部分の抽出は不可能
12 妊娠中の運動実施状況	単 著	平成22年4月	日本臨床スポーツ医学会誌、18(2)、pp. 208-212	研究者による妊娠中の運動実施状況についての1998年調査（前回調査）と2009年調査を比較し妊娠中の運動状況の変化を明らかにした。今回の調査では、妊娠中の運動実施率は54.0%であり、88.7%がウォーキングをしており、個人で気軽にできる運動種目が好まれていた。前回調査の30.5%と比較し有意に高くなっていった。また、妊娠中に運動をしたほうがよいと考える人の割合が多くなり、日常生活活動も含めて身体活動を考えている人が増えていた。
13 【私はこうして学生と向き合ってきた一日々出会うさまざまな悩み】学生の態度・志向性編 学生の研究がうまく進まないとき	単 著	平成24年2月	看護教育、53(2)、 pp. 112-114	看護教員が日々出会うさまざまな悩みで、学生の態度・志向性に関連した例を提示し、学生への関わりを提示した。事例として、研究がうまく進められずにいる大学院生を提示し、学生との向き合い方について説明した。
14 臨地実習期間中に学生が経験した患者からの暴力事例 学生が最も困ることと対応方法の分析を通して	共 著	平成25年8月	看護教育、53(8)、 pp. 700-705	学生が臨地実習中に患者暴力を経験した際、何に困っているのかおよび対応方法について、調査の結果を示した。調査基準に適合した68事例を分析した。困ったことで最も多く挙げられたことは「対応がわからない」であり、次いで「患者との関わりに対する嫌悪感」「患者の対する怖さ」「ケアの拒否」等であった。そのような中、その場から離れる、対象との距離を置く、相談するなどの対応をとっていた。実習での暴力防止には、学生に対する具体的な対応方法の教育の必要性が示唆された。 共著者：三木明子、村井文江、江守陽子 担当部分：研究計画の協議、アンケート調査、分析結果の討議に関わった。
15 性教育における試行錯誤を通しての気づき	単 著	平成28年3月	外来小児科、19(1)、 pp. 59-63	小児科外来における思春期診療の実際という特集の中で、性教育の実践例を報告した。著者が、行政、学校、教育委員会と連携して実施している性教育から、学校で性教育をする際に必要なことをととして、対象を知ると言うこと、対象の準備状態を知る、学校と教員の理解を得る、保護者を巻き込んでいく、子どもたちや保護者に伝えるための工夫について説明した。

<p>16 救急現場における周産期救急 わが国の実態調査と病院前周産期救急教育のあり方に関する検討</p>	<p>共 著</p>	<p>平成29年3月</p>	<p>平成28年度 救急救命の高度化の推進に関する調査研究事業 報告書</p>	<p>周産期救急の現状を明らかにするために、わが国の病院前周産期救急の実態および病院前周産期救急教育の実態を7調査によって明らかにした。調査は、1) 全消防署を対象とした救急の現場から見た病院前周産期救急の実態と教育体制、2) 総合周産期センター、地域周産期母子医療センターを対象にした、周産期母性威容センターからみた病院前周産期救急の実態と教育体制、3) 47都道府県を対象にした病院前周産期医療への関り状況、4) 救急救命士養成機関における周産期救急教育、5) 助産師養成機関における周産期救急教育、6) 救急医療機関における病院前周産期救急の実態と救急医の関り、7) 周産期救急に関する講習会の開催状況である。これらを踏まえ、病院前周産期救急教育の体制構築にむけての提言と示した。救命振興財団のから委託された調査研究の報告書である。 共著者：宮園弥、新井順一、村井文江、日高大介、金井雄、梶川大悟、小山泰明、榎本有希、井上貴昭 担当部分：計画から関り、全てのアンケート作成にかかわるとともに、助産師養成機関における周産期救急教育について中心となり実施した。</p>
<p>16 常磐大学看護学部のカリキュラム コンピテンシーに基づくカリキュラム構築と専門領域を横断する科目の設定</p>	<p>単 著</p>	<p>令和元年7月</p>	<p>看護展望、44(9)、888-896</p>	<p>2022年度改訂になる保健師助産師看護師養成所指定規則の改訂に伴うカリキュラム構築にあたり、カリキュラム評価・開発の実際として、常磐大学看護学部のカリキュラム構築の考え方について紹介した。</p>
<p>17 コロナ禍の臨地実習をとおしてこれからのを考える</p>	<p>共 著</p>	<p>令和3年7月</p>	<p>看護展望、46(9)、129-131</p>	<p>2020年度・コロナ禍で臨地実習を実施するために行った施設との連携、学修内容の工夫等の紹介をした。同時に、コロナ禍での実習の課題および臨地実習全体における課題を提示した。 共著者：村井文江、坂間伊津美、菅原直美、沼口知恵子、池内彰子、黒田暢子、田村真理子 担当部分：論文全体の構成をするとともに、担当者からの具体的な内容をまとめた。</p>
<p>(その他：座談会) 1 助産婦としてルーチン処置を見直す</p>	<p>共 著</p>	<p>平成7年4月</p>	<p>助産婦雑誌、49(4)、pp. 15-23</p>	<p>助産婦雑誌に7回に渡り連載された「日常ケアを見直そうー助産学への確立に向けて」を踏まえての座談会。特集 ルーチンの医療処置を見直すとして企画されたもの。ルーチンとしてされている医療処置やケアを見直すと同時に、助産師の経験を科学に変えて、助産学を確立していくために必要なことは何か等について、語られた。 共著者：園生陽子、田口貞子、中島桂子、村井文江、小竹久美子、菅沼ひろ子、宮里和子</p>
<p>(その他：ビデオ) 1 看護技術学習支援ビデオシリーズ 母性看護学 Vol.1 新しい家族誕生への支援(1) 分娩第1期の看護技術</p>	<p>共 著</p>	<p>平成11年12月</p>	<p>日本看護協会出版会</p>	<p>出生直後から24時間までの新生児の胎外生活への適応が円滑に行われるように支援するためのアセスメントとケア技術、予測されるリスクに備えた蘇生や医療処置などの準備と報告、健全な母子関係の確立に向けた支援などを説明したビデオ。平成10年度厚生省看護婦等資質向上推進事業に基づいて制作された。 担当部分：シナリオ作成からビデオの完成に至るまで関わった。共同監修のため担当部分不明。 監修：山川美智子、森恵美、村井文江、江角二三子、小松美穂子</p>

2 看護技術学習支援ビデオシリーズ 母性看護学 Vol. 2 新しい家族誕生への支援(2) 分娩第2期から第4期までの看護技術	共 著	平成11年12月	日本看護協会出版会	<p>分娩室入室から分娩終了までの母児の観察やケアをはじめ、分娩進行状況の判断や分娩促進のための援助、心身の苦痛の緩和なそ、産婦・家族にとって満足度の高い出産への援助を紹介したビデオ。平成10年度厚生省看護婦等資質向上推進事業に基づいて制作された。</p> <p>担当部分：シナリオ作成からビデオの完成に至るまで関わった。共同監修のため担当部分不明。</p> <p>監修：江角二三子、村井文江、森恵美、山川美智子、小松美穂子</p>
3 看護技術学習支援ビデオシリーズ 母性看護学 Vol. 3 新しい家族誕生への支援(3) 褥婦のアセスメントとケア	共 著	平成11年12月	日本看護協会出版会	<p>分娩後2時間を経過した時点から退院までの褥婦を新生児を対象とした、主として褥婦に対するアセスメントとケアを紹介。時間の毛かと共に変化する褥婦の様子や反応の変化、各場面でどのような情報から褥婦をアセスメントするのかを解説したビデオ。平成10年度厚生省看護婦等資質向上推進事業に基づいて制作された。</p> <p>担当部分：シナリオ作成からビデオの完成に至るまで関わった。共同監修のため担当部分不明。</p> <p>監修：森恵美、山川美智子、村井文江、江角二三子、小松美穂子</p>
4 看護技術学習支援ビデオシリーズ 母性看護学 Vol. 4 新しい家族誕生への支援(4) 新生児のアセスメントとケア (1) 出生直後から24時間	共 著	平成11年12月	日本看護協会出版会	<p>出生直後から24時間までの新生児の胎外生活への適応が円滑に行われるように支援するためのアセスメントとケア技術、予測されるリスクに備えた蘇生や医療処置などの準備と報告、健全な母子関係の確立に向けた支援などを説明したビデオ。平成10年度厚生省看護婦等資質向上推進事業に基づいて制作された。</p> <p>担当部分：シナリオ作成からビデオの完成に至るまで関わった。共同監修のため担当部分不明。</p> <p>監修：山川美智子、森恵美、村井文江、江角二三子、小松美穂子</p>
5 看護技術学習支援ビデオシリーズ 母性看護学 Vol. 5 新しい家族誕生への支援(5) 新生児のアセスメントとケア (2) 出生後1週間	共 著	平成11年12月	日本看護協会出版会	<p>新生児の生後一週間の生理的変化と経過にあわせた観察技術、日常ケアについてのアセスメントとケアについて紹介。また、母子の愛着形成を促すこと、母親や家族が退院後の育児に不安なく取り組むことができるような計画的なかかわりの重要性について説明したビデオ。平成10年度厚生省看護婦等資質向上推進事業に基づいて制作された。</p> <p>担当部分：シナリオ作成からビデオの完成に至るまで関わった。共同監修のため担当部分不明。</p> <p>監修：山川美智子、森恵美、村井文江、江角二三子、小松美穂子</p>
<p>(その他：翻訳)</p> <p>1 キム/マクファーランド/マクレイン 看護診断と看護計画 第1版 (原著：Mi Ja Kim, Gertrude k. McFarland, and Andrey M. McLane “Mi Ja Kim, Gertrude k. McFarland, and Andrey M. McLane: Pocket Guide to Nursing Diagnoses” fifth edition, Mosby-Year Book, Inc., 1993)</p>	共 著	平成6年4月	医学書院	<p>看護診断の定義、関連因子、危険因子、維持・促進因子、看護診断の存在を示す特徴を明らかにした上で、看護診断ごとに模範的な看護計画を記した本の訳書。</p> <p>担当部分：第1部および2部においては、それぞれ107ある看護診断の内、21の看護診断を、さらに第3部、用語解説、付録を翻訳した (P54～64, 78～83, 269～311, 361～368, 395～408)。</p> <p>共訳者：村井文江、川波公香、小室佳文、羽子田純子、山本亨子、山本弘江、監訳：高木永子</p>
<p>2 キム/マクファーランド/マクレイン 看護診断と看護計画 第2版 (原著：Mi Ja Kim, Gertrude k. McFarland, and Andrey M. McLane “Mi Ja Kim, Gertrude k. McFarland, and Andrey M. McLane: Pocket Guide to Nursing Diagnoses” seventh edition, Mosby-Year Book, Inc., 1997)</p>	共 著	平成12年4月	医学書院	<p>看護診断の定義、関連因子、危険因子、維持・促進因子、看護診断の存在を示す特徴を明らかにした上で、看護診断ごとに模範的な看護計画を記した本の訳書。第2版では、看護診断の改訂に伴う変更・追加、模範的看護計画の理論的・研究的根拠が追加され、第1版の3分の2程度が改訂された。</p> <p>担当部分：全体ページ数の4分の1程度を担当するとともに訳者間のレビューをした</p> <p>共訳者：村井文江、川波公香、小室佳文、倉持亨子、山本弘江、監訳：高木永子</p>

<p>(その他：学会発表)</p> <p>1 妊娠・分娩・産褥期の血液動態の一検討</p> <p>2 急性羊水過多症の看護—大量羊水穿刺を経験して—</p> <p>3 コルポイリーゼについての再評価</p> <p>4 重症妊娠中毒症に対する一考察</p> <p>5 女子大学生の母性意識についての検討</p>	<p>—</p> <p>—</p> <p>—</p> <p>—</p> <p>—</p>	<p>昭和58年9月 (発表) 昭和58年12月 (抄録)</p> <p>昭和59年6月 (発表)</p> <p>昭和60年10月 (発表) 昭和60年12月 (抄録)</p> <p>昭和61年6月 (発表)</p> <p>平成2年8月 (発表)</p>	<p>第24回日本母性衛生学会 (札幌市) 母性衛生、24(3・4)、 pp. 122</p> <p>第4回茨城県母性衛生学会 (水戸市)</p> <p>第25回日本母性衛生学会 (東京) 母性衛生、24(4)、 pp. 582—583</p> <p>第6回茨城県母性衛生学会 (水戸市)</p> <p>第9回日本思春期学会 (甲府市)</p>	<p>妊娠期における内分泌・代謝系の著明な変化に注目し、血液生化学データが妊娠に伴う変化するかを明かにすることを目的とした。蛋白質および脂質において、正常値を超える変化が認められ、生理的範囲について検討する必要性が示唆された。共著者：佐藤由美子、小原弘子、清水広子、村井(菅谷)文江、森川真一、板倉千栄子、西本栄子 担当部分：助産学校の卒業研究。指導を受けながら、学生4名でデータを分析しまとめた。</p> <p>急性羊水過多症の症状軽減および産科異常予防の目的で、羊水穿刺で大量の羊水を一時的に除去する治療を試みた症例報告。対象症例は、5週間で計5回の羊水穿刺で16.10の羊水を除去した。穿刺直後は子宮収縮が増強し、その後、急性羊水過多症に伴う多呼吸、頻脈、経口摂取困難、排尿障害などは穿刺により軽減するという状態を繰り返し、精神的動揺が持続した。このような状況におけるケアのポイントを急性羊水過多症の看護として記述した。共著者：村井(菅谷)文江、新井香代子、佐藤千恵子、周産期病棟スタッフ 担当部分：病棟での事例について中心となってまとめ口頭発表した。</p> <p>骨盤位分娩の管理方法として使用されているコルポイリーゼについてその効果を再評価することを目的とした。過去5年間の分娩記録・助産録から62例の経膈骨盤位分娩について分析をした。結果、コルポイリーゼの挿入が遅延分娩を招いている症例があり、順調な陣痛、頸管開大・軟化が認められる場合は自然な分娩経過を管理することが適切であることが示唆された。共著者：小笠原圭子、重光貞彦、伊藤俊一、金子實、岩崎寛和、村井(菅谷)文江、新井香代子 担当部分：分析に関わった。</p> <p>重症妊娠中毒症の管理・治療のために他院から転入された2症例の看護経験から、入院時の看護を中心に、情報収集、患者の状態評価、チームにおける看護の役割、看護記録、コミュニケーションについて、看護のポイントを報告した。共著者：新井香代子、村井(菅谷)文江、周産期病棟スタッフ 担当部分：論文の基本データである症例についてまとめた。</p> <p>女子大学生の母性意識の形成状況と母性意識に影響をしている要因として共感性に焦点をあてて検討した。性役割テストでは、「母性」が「女性」「父性」「男性」より高得点であった。共感性は、「母性」と中程度の有意な相関を示した。過去の母子関係を良好と認識している群、現在の母子関係・父子関係を良好と認識している群、一生仕事を続けたいと思っていない群は「母性」の得点が有意に高得点であった。共著者：村井文江、茅島江子、前原澄子 担当部分：卒業研究の一部を修正・加筆し、口頭発表した。</p>
--	--	---	--	--

6 子どもの数の決定に係る要因	—	平成2年9月 (発表) 平成2年12月 (抄録)	第31回日本母性衛生学会 (神戸市) 母性衛生、31(4)、 pp. 535-536	子どもを持つことの決定に関連する要因を明らかにすることを目的に調査した。今後出産する可能性がある158組の夫婦を対象にホフマンらの子どもを持つことの価値モデルから作成したアンケートを実施した。結果、子どもを持つことの価値観は社会的属性によって違いが認められたが、子ども数の決定への影響は明らかではなかった。一方、子どもを持つことで子どもに対する価値観が変化することが示唆された。 共著者：諏訪久美子、片岡里美、太田尚子、村井文江、小松美穂子 担当部分：データ分析を主に担当した。
7 男子大学生の父親役割の認識についての検討	—	平成3年8月 (発表)	第10回日本思春期学会 (千代田区)	男子大学生の父親役割認識状況と影響する要因について検討した。250名にアンケートを配布し124名から有効回答が得られた。性別では、「男性」が「父性」「母性」「女性」より高得点であった。過去の父子関係が良好と認識している群、現在の父子関係、母子関係が良好であると認識している群で「父性」の得点が高得点であった。女子大学生に比較し、親役割の準備状態が低いことが示唆された。 共著者：村井文江、茅島江子、前原澄子 担当部分：卒業研究の一部を修正・加筆し、口頭発表した。
8 もう1人子どもを持つ、持たないに関係する両親の意識第2報	—	平成3年10月 (発表) 平成3年12月 (抄録)	第32回日本母性衛生学会 (水戸市) 母性衛生、32(4)、p. 559	子どもの価値モデルを基にして、1歳8ヶ月まで子どもを持つ親を対象に、子どもを持つことに影響する因子について検討した。158組から有効回答が得られた。子どもを持つことに影響する因子として「労働負担と仕事の継続性」「楽しい経験・新しい経験」「大人としてのアイデンティティ」「伝統性」「責任・役割」「経済負担」が抽出された。夫は妻より「楽しい経験・新しい経験」を重要と考えていた。「伝統性」を重要と考える妻は、次の子を持つことの希望がより多かった。 共著者：村井文江、小松美穂子、太田尚子、諏訪久美子、片岡里美 担当部分：アンケート作成とデータ分析の部分を主に担当するとともに口頭発表した。
9 子供を持つことに関する看護系女子学生の意識	—	平成4年10月 (発表) 平成4年12月 (抄録)	第33回日本母性衛生学会 (浜松市) 母性衛生、33(4)、p. 643	子どもの価値モデルを基に、女子学生を対象として子どもを持つことに影響する因子について検討した。343名にアンケートを配布し、266名から有効回答が得られた。「生活上の負担」「創造・深化」「楽しみ」「社会性」「労働負担」の因子が抽出された。母親の結果と比較し、「楽しみ」「創造・深化」を重要と考えていることが示唆された。 共著者：高橋ゆかり、村井文江、小松美穂子 担当部分：アンケート作成とデータ分析の部分を主に担当した。
10 看護教育における「性」に関する因子—看護学生の「性」に対する意識と行動の実態調査を通して—	—	平成6年6月 (発表)	第14回茨城県母性衛生学会 (水戸市)	ヒューマンセクシュアリティの授業内容を検討するために、学習前の性に対する意識・知識、および行動の実態をアンケート調査した。結果、性に対する意識・知識では、精神的、情緒的、連帯性を中心に考える傾向があり、性の多様な側面について、柔軟に広く捉えられる授業内容の必要性が示唆された。 共著者：井上恭子、村井文江 担当部分：アンケート作成、分析に関わった。

11 中学校における性教育の現状	—	平成7年6月 (発表)	第15回茨城県母性衛生学会(水戸市)	中学校における性教育の現状を把握する目的で、県内の中学校233校の養護教員を対象にアンケート調査を実施した。性教育を実施している学校は49校(57%)であった。担当者は、保健体育の教員が67.3%と最も高く、養護教諭が実施している学校は49%であった。性交についての教えている学校は24.4%と低い割合であった。性教育の実施率が低い理由としては、「統一された方針がない」ということが挙げられた。 共著者：川上真澄、椎名啓子、山本弘江、 <u>村井文江</u> 担当部分：学生の卒業研究を指導したもの。
12 本邦女子一流スポーツ選手の月経現象	—	平成9年12月 (発表)	第10回女性スポーツ研究会学術集会(中央区)	激しいスポーツ活動が月経現象に及ぼす影響を明らかにすることを目的に調査を実施した。1987～1995年度の9年間にオリンピック代表選手、オリンピック強化指定選手、アジア大会代表選手などになった延べ1,790名を対象とした。結果、選手群では初経初来の遅延、遅発月経、原発性無月経、続発性無月経、稀発月経などの月経異常が高率に認められた。若年期からの激しいトレーニングを実施している選手への月経異常へ対応の必要性が示唆された。 共著者：田副真美、林貢一郎、古田都、 <u>村井文江</u> 、佐々木純一、目崎登 担当部分：データの集計・分析に関わった。
13 高校生の健康問題についての質的研究	—	平成10年8月 (発表) 平成10年3月 (抄録)	第17回日本思春期学会(千代田区) 思春期学、17(1)、p. 76	高校生・大学生の健康増進ライフスタイル行動に関する研究の一部分であり、高校生が考える健康問題を明らかにすることを目的としている。高校生が報告した健康問題は多岐にわたっていた。男子では「運動」や「体力」、女性では「栄養」や「外見」についての問題を多く挙げた。また、これらの内容は男女で異なっていた。「精神衛生」は男女共通の健康問題であった。 共著者：岩田裕子、 <u>村井文江</u> 、田代順子、岩瀬信夫、小澤道子 担当部分：インタビューおよび分析に関わった。
14 高校生の考える『健康』と『元気』	—	平成10年8月 (発表) 平成10年3月 (抄録)	第17回日本思春期学会(千代田区) 思春期学、17(1)、p. 77	高校生・大学生の健康増進ライフスタイル行動に関する研究の一部分であり、高校生の考える健康の概念を明らかにすることを目的とした研究である。高校生は、健康の概念を『健康』と『元気』という概念で定義した。『健康』と『元気』は、全く異なった概念とするもの、同じ概念とするもの、連続したレベルの異なった概念として捉えられていた。 共著者： <u>村井文江</u> 、岩田裕子、田代順子、岩瀬信夫、小澤道子 担当部分：インタビューおよび分析を担当し、口頭発表した。
15 高校生の月経に関する保健行動と獲得方法 —フォーカスグループ法を用いて—	—	平成10年8月 (発表) 平成10年3月 (抄録)	第17回日本思春期学会(千代田区) 思春期学、17(1)、p. 78	高校生の月経に関する保健行動と保健行動に影響する要因を明らかにすることを目的にフォーカスグループ法による質的研究を実施した。内容分析の結果、1) 月経に関する保健行動は18コードに分類された。2) 『痛み』、『月経血の漏れ』の順に保健行動が多くなされていた。3) 保健行動に影響する要因として、『結果への期待』『行動の認識』『経験』『価値観』『症状』『周囲との関係』『社会的状況』が挙げられた。 共著者： <u>村井文江</u> 、目崎登 担当部分：修士論文の一部分を修正・加筆し、口頭発表した。

16 高校生の月経に関する保健行動に影響する要因 ーフォーカスグループ法を用いた質的研究ー	—	平成10年10月 (発表) 平成10年12月 (抄録)	第39回日本母性衛生学会 (前橋市) 母性衛生、39(3)、p. 160	高校生が実施している月経に関する保健行動に影響する要因を記述することを目的にフォーカスグループ法を実施した。内容分析の結果、1) 存在する症状、2) 月経についての認識、3) 月経に関する保健行動の経験、4) 保健行動の認識、5) 症状緩和や社会参加といった保健行動の結果への期待、6) 周囲との関係、7) 社会的影響、8) 普段の健康行動、9) 現在の健康状態が、影響する要因として挙げられた。 共著者：村井文江、目崎登 担当部分：修士論文の一部を修正・加筆し、口頭発表した。
17 母親が障害児を受容する過程 ー8症例の検討からー	—	平成10年10月 (発表) 平成10年12月 (抄録)	第39回日本母性衛生学会 (前橋市) 母性衛生、39(3)、p. 221	障害児の母親への援助を検討するために母親が障害を受容する過程を記述することを目的とした。8名の母親から3パターンを受容過程が明らかになった。1つめは児に抱いていた期待が実現されないために落ち込み、葛藤を経て受容しているパターン、2つめは衝撃やショックが強かったが時間と共に受容としているパターン、3つめは基本的に児がよくなる事を期待しているが本当にできるのかと揺れているパターンであった。 共著者：武田いずみ、竹内由佳、山本清美、岩田裕子、村井文江 担当部分：学生の卒業研究を指導したもの。
18 女子高校生の健康増進ライフスタイル行動の質的・探索的研究	—	平成10年11月	第45回日本学校保健学会 (つくば市) 学校保健研究、40(増補) pp. 242-243	女子高校生の健康増進ライフスタイル行動に影響する「健康・元気の概念」「健康の気がり」「自覚的健康状態」「行動の阻害要因」「行動のきっかけ・動因」を記述することを目的とした。自分の目標がはっきりしてきたとする高校2年生グループから『健康』の理解も広がり、自分の生活を目標達成に向かってコントロールする行動が報告された。自信をもって自らの健康を管理するためには意識的な学習が必要と考えられた。 共著者：田代順子、村井文江、岩田裕子、小澤道子 担当部分：インタビューおよび分析に関わった。
19 女子高校生・大学生の健康増進ライフスタイル行動の質的・記述的研究 ー知覚している健康増進行動とその理由数ー	—	平成10年12月	第18回日本看護科学学会 学術集会(札幌市) 第18回日本看護科学学会 学術集会講演集、 pp. 154-155	女子高校生・大学生の健康増進ライフスタイル行動をその影響要因を明確にすることを目的に、実行している健康増進行動とそのきっかけ、実行できていない健康行動をその阻害要因を比較検討した。結果、『良い経験』や『1人暮らし』と認識できることは行動を促進し、『時間』や『欲求』などが行動を制限していた。『1人暮らし』は生活経験を広げ、健康の重要性・責任を感じさせ健康増進行動を探索させていた。 共著者：田代順子、村井文江、岩田裕子 担当部分：インタビューおよび分析に関わった。
20 高校生の月経に関する保健行動についての探索的研究	—	平成10年12月	第18回日本看護科学学会 学術集会(札幌市) 第18回日本看護科学学会 学術集会講演集、 pp. 244-245	高校生の月経に関連する保健行動に影響する要因が、どの程度、保健行動を説明できるかを明らかにすることを目的とした。先行研究で得られた結果を元にアンケートを作成した。1,573名の結果についてステップワイズ法による重回帰分析を行い、普段の健康行動、変化や症状、保健行動への期待が影響変数として選択され、これらで月経に関する保健行動の32.36%が説明された。 著者：村井文江 担当部分：修士論文の一部を修正・加筆し、口頭発表した。

21 小児外科開業医の乳幼児健診：小児外科医の特色といかすには	—	平成11年5月	第36回日本小児外科学会学術集会（仙台市） 日本小児外科学会雑誌、35(3)、p. 427	ミニシンポジウム：乳児検診への小児外科医の関与における、小児外科医が開業しているクリニックの乳児健診についての実践報告。小児外科の特徴をいかし、腹部超音波検査を行うとともに、他の専門家を連携し、育児相談、栄養相談、股関節脱臼等のチェックと実践していることおよびこれらの成果について報告した。 共著者：越智五平、平井みさ子、前田和子、宮腰由紀子、 <u>村井文江</u> 担当部分：乳児健診を担当している1人として関わった。
22 Perceived Health-related Concepts and Health Promoting Lifestyle Behaviors of High School Female Students and College Women Japan(日本の女子高校生および大学が認識している健康の概念と健康増進ライフスタイル行動)	—	平成11年6月	The 10th International Interdisciplinary Congress on Women's Health Issues (Indianapolis, USA) The 10th International Interdisciplinary Congress on Women's Health Issues Abstracts, III C-2	高校生・大学生の健康増進ライフスタイル行動に関する研究の一部分。女子高校生・大学生の健康増進ライフスタイル行動と健康の概念について記述することを目的とした。高校生36名、大学生38名のフォーカスグループ法によるデータが分析された。結果、高校生も大学生も健康を表現する言葉として、『元気』を『健康』より用いていた。また、高校生は、『元気』はコントロールできるが『健康』はできないと語った。大学生は高校生に比較し多様な健康増進行動を報告した。 共著者：Tashiro Junko, <u>Murai Fumie</u> , Iwata Hiroko, Ozawa Michiko 担当部分：インタビューおよび分析に関わった。
23 高校生の「健康の気がかり」	—	平成11年8月（発表） 平成12年3月（抄録）	第18回日本思春期学会（和歌山市） 思春期学、18(1)、p. 41	高校生・大学生の健康増進ライフスタイル行動に関する研究の一部分。高校生の「健康の気がかり」に焦点を当てて、性別、学年、自覚的健康状態との関連を知ることを目的とした。男子182名、女子230名を対象としたパイロットスタディ。結果、気がかりには男女差が認められ、「体重」、「容姿」、「ダイエット」、「便秘」は女子に多い気がかりであった。学年による違いも認められた。また、「健康の気がかり」が少ないほど自覚的健康状態を高く自覚していた。 共著者：岩田裕子、 <u>村井文江</u> 、田代順子、小澤道子 担当部分：インタビューおよび分析に関わった。
24 マタニティスポーツの実施と運動習慣	—	平成11年9月（発表） 平成11年12月（抄録）	第54回日本体力医学会大会（熊本市） 体力科学、48(6)、p. 292	マタニティスポーツ実施について、実施状況および実施状況と運動習慣との関連を明らかにすることを目的とした。妊娠16週以降の正常妊娠経過にある757名についてのアンケートを分析した結果、マタニティスポーツ実施には、継続されてきている運動習慣、スポーツに対する肯定的感情が関連していることが示唆された。 共著者： <u>村井文江</u> 、林貢一郎、中村真理子、相澤勝治、佐々木純一、目崎登 担当部分：アンケート作成、データ分析を中心的に行い、口頭発表した。
25 妊婦の止息潜水（いわゆる水中座禅）による不整脈の発現と diving reflex試験の有用性	—	平成11年9月（発表） 平成11年12月（抄録）	第54回日本体力医学会大会（熊本市） 体力科学、48(6)、p. 787	妊婦水泳の一般的プログラムとして用いられている止息潜水における、潜水と心拍反応および不整脈の発現状況の関連性を記述すること、および、不整脈発現を予測する方法としてdiving reflex試験が有用であるかを検討した。対象は、妊婦水泳教室に参加している妊婦24名である。不整脈の発現に明らかなパターンは見出されず、diving reflex 試験の有用性についても確認されなかった。 共著者：林貢一郎、佐々木純一、中村真理子、 <u>村井文江</u> 、目崎登 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。

26 高校生の健康増進行動と自覚的健康状態の関連性	—	平成11年9月	第4回聖路加看護学会(中央区) 聖路加看護学会誌、3(2)、p. 23	高校生・大学生の健康増進ライフスタイル行動に関する研究の一部分。高校生の健康増進行動および自覚的健康状態との関連について検討することを目的としたパイロットスタディ。女子199名、男子165名について分析した。女子は「栄養」、「心身のリラクゼーション」に積極的であり、男子は、「運動」、「心身のリラクゼーション」、「メンタルヘルス」に積極的であった。自覚的健康状態に男女差は認められず、健康状態がよいほど健康増進行動がなされていた。 共著者：村井文江、岩田裕子、田代順子、小澤道子 担当部分：アンケート作成、データ分析の中心となりまとめ、口頭発表した。
27 妊婦スポーツと妊娠中の身体的マイナートラブルおよび不安要因との関係	—	平成11年11月	第10回日本臨床スポーツ医学会学術集会(東京) 日本臨床スポーツ医学会誌、7(4)、p. S75	妊娠中の運動が、身体的マイナートラブルおよび不安に及ぼす影響について検討することを目的としたアンケート調査による研究。妊娠16週以降の正常妊娠経過にある妊婦757名について分析した結果、妊娠中の運動が身体的マイナートラブルの軽減につながり、軽減の内容や程度が運動種目によって異なることが示唆された。 共著者：林貢一郎、村井文江、佐々木純一、目崎登 担当部分：アンケート作成、データ分析に関わった。
28 女子高校生の健康増進行動の関連因子	—	平成11年11月	第46回日本学校保健学会(名古屋市) 学校保健研究、41(増補)、pp. 704-705	高校生・大学生の健康増進ライフスタイル行動に関する研究の一部分。女子高校生の健康増進行動およびその関連要因について記述・検討することを目的としたパイロットスタディ。有効回答199。健康増進行動は、「メンタルヘルス」、「生活のリズム」、「栄養・食事」、「運動」、「健康探索・促進」から構成された。健康増進行動は、「自覚的健康状態」「きっかけ」や「情報源」との相関が認められたが、健康の気がかりとの相関は認められなかった。女子高校生の健康増進行動は、情報に基づく目標指向型であることが示唆された。 共著者：田代順子、小澤道子、村井文江、岩田裕子 担当部分：アンケート作成、データ分析に関わった。
29 女子高校生用の健康増進ライフスタイル行動測定用具の開発：その妥当性と信頼性	—	1999年12月	第19回日本看護科学学会(静岡市) 第19回日本看護科学学会講演集、pp. 266-267	高校生・大学生の健康増進ライフスタイル行動に関する研究の一部分。高校女子用の健康増進ライフスタイル行動尺度の妥当性と信頼性を検討することを目的とした。分析は有効回答の199について実施した。健康増進行動は、29項目・5因子「栄養・食事」、「生活のリズム」、「運動」、「メンタルヘルス」、「健康探索・促進」から構成され、これらのChronbach α 係数は0.60以上であった。 共著者：村井文江、岩田裕子、田代順子、 担当部分：アンケート作成、データ分析を中心的に行い、口頭発表した。
30 運動習慣からみたマタニティスポーツの実施状況と実施理由	—	平成11年12月	第13回女性スポーツ医学研究会学術集会(中央区) 第13回女性スポーツ医学研究会学術集会抄録集、p. 11	マタニティスポーツの実施状況および実施理由を運動習慣との関連から検討することを目的とした。757名のアンケートを分析した結果、運動習慣の『継続群』が有意にマタニティスポーツを実施していた。運動習慣の『中断群』は時間がないことを、『なし群』運動が苦手、興味がないなどを、マタニティスポーツをしない理由として挙げた。 共著者：村井文江、林貢一郎、中村真理子、相澤勝治、佐々木純一、目崎登 担当部分：アンケート作成、データ分析を中心的に行い、口頭発表した。

31 マタニティスポーツが妊娠中の身体的なマイナートラブルおよび不安に及ぼす影響	—	平成11年12月	第13回女性スポーツ医学研究会学術集会（中央区） 第13回女性スポーツ医学研究会学術集会抄録集、p. 12	妊娠中の運動が身体的マイナートラブルと心理的不安要因に及ぼす影響を検討することを目的とした。757名のアンケートを分析した結果、30.5%の妊婦が運動を実施していた。身体的マイナートラブルでは、「疲れやすい」「腰痛」「鼠径部の痛み」で効果があり、種目による差異も認められた。一方、「妊娠による身体的変化に対する不安」「医療施設・スタッフへの不安」が強かった。 共著者：林貢一郎、村井文江、鈴木麻里、中村真理子、相澤勝治、中尾喜久子、佐々木純一、目崎登 担当部分：アンケート作成、データ分析に関わった。
32 Health Risk Behaviors of Senior High School Girls in Japan: A Pilot Survey (日本の女子高校生の健康リスク行動：パイロットスタディ)	—	平成12年1月	The 11th International Interdisciplinary Congress on Women's Health Issues (San Francisco, USA) The 11th International Interdisciplinary Congress on Women's Health Issues Abstracts, p. 208	高校生・大学生の健康増進ライフスタイル行動に関する研究の一部分。女子高校生の健康リスク行動の状況について記述することを目的とした。結果、喫煙者28%、飲酒経験者76%、性行動経験者24%おり、避妊の知識については、53%が不十分であると回答した。喫煙、飲酒、性行動のリスク行動は、相互に関連していた。また、喫煙者や性行動経験者は、クラブ活動をしていない人、就職を考えている人が多かった。 共著者：Tashiro Junko, <u>Murai Fumie</u> , Iwata Hiroko, Ozawa Michiko 担当部分：アンケートの作成、データ分析に関わった。
33 Cold Face Test 時の循環応答に及ぼす月経周期の影響	—	平成12年9月 (発表) 平成12年12月 (抄録)	第55回日本体力医学大会（富山市） 体力科学、49(6)、p. 749	若年女性における、心拍数および心臓自律神経系の反応に対する月経周期の影響を検討することを目的とした。対象は、運動習慣を持たない女性（平均年齢19.9歳）13名である。月経周期を5つの時期に分け、検討した結果、月経周期による影響は、安静時の心拍数と心臓交感神経活動・心臓副交感神経、Cold Face Test時の心臓副交感神経活動反応の大きさと認められた。 共著者：林貢一郎、中村真理子、相澤勝治、池田瑞音、井上桐子、橋本有紀、村井文江、目崎登 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。
34 若年女性における心臓自律神経活動の変動	—	平成12年9月 (発表) 平成12年12月 (抄録)	第55回日本体力医学大会（富山市） 体力科学、49(6)、p. 758	月経周期に伴う女性のコンディションの変動を検討するために安静時の心臓自律神経系活動の変動および運動終了後の心臓副交感神経系活動の応答反応を検討した。対象は正常月経周期を有する女性（平均年齢19.9歳）13名である。結果、安静時の心臓副交感神経系活動と運動終了後の副交感神経系活動回復応答に、月経周期に伴う変動が認められた。 共著者：中村真理子、林貢一郎、相澤勝治、池田瑞音、橋本有紀、井上桐子、村井文江、目崎登 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。
35 看護学生の健康増進行動と関連要因	—	平成12年9月	第5回聖路加看護学会（大阪市） 聖路加看護学会誌、5(2)、p. 39	高校生・大学生の健康増進ライフスタイル行動に関する研究の一部分である。看護学生の健康増進行動およびその関連要因について検討することを目的とした。426の有効回答を分析し、結果、健康増進行動は、『栄養』、『生活のリズム』、『精神衛生』、『運動』、『健康探索』から構成され、『精神衛生』が最も実施されていた。健康増進行動は、行動のきっかけ、しない理由、健康状態、健康の気がかり、健康の基準によって20%が説明された。 共著者：村井文江、田代順子、小澤道子 担当部分：アンケート作成、データ分析を中心的に行い、口頭発表した。

36 一流女子柔道選手に対するメディカルサポート	—	平成12年11月	第11回日本臨床スポーツ医学会学術集会（宮崎市） 日本臨床スポーツ医学会誌、8(4)、p. S97	女子柔道強化選手に対するメディカルサポートの一貫として、疾病・外傷等の届出およびアンチドーピング教育としての薬物確認システムを試みた報告。疾病・外傷等の届出は63.3%であった。薬物は53薬剤の使用が確認され、その中には、禁止薬物である総合感冒薬、気管支拡張剤、鎮痛薬、婦人皮質ホルモンなどが含まれていた。これらの結果を踏まえ、女子柔道選手に対するメディカルサポートの必要性が示唆された。 共著者：目崎登、林貢一郎、村井文江、佐々木純一 担当部分：データ分析に関わった。
37 高校生の健康リスク行動の特徴とその関連要因	—	平成12年11月	第47回日本学校保健学会（福岡市） 学校保健研究、42(増補)、pp. 244-245	高校生・大学生の健康増進行動に関する研究の一部分である。高校生の健康リスク行動の特徴を記述しその関連因子について検討することとした。高校生男子1,467名、女子1,679名の有効回答について分析を行った。結果、喫煙、飲酒、薬物、性行動、避妊行動のリスク行動間には相互に関連が認められ、複数のリスク行動を実施しているハイリスク群の存在が示唆された。また、就職希望者やアルバイト経験者がリスク行動を多くとることが認められた。 共著者：田代順子、村井文江、小澤道子、成瀬和子、西川浩昭 担当部分：アンケート作成およびデータ分析に関わった。
38 月経周期に伴う心臓自律神経活動の変動	—	平成12年12月	第14回女性スポーツ医学研究会学術集会（中央区） 第14回女性スポーツ医学研究会学術集会抄録集、p. 9	女性の身体的コンディションの変動要因の一つを明らかにするために、若年女性の月経周期に伴う心臓自律神経活動の変動について12名を対象に縦断的に検討した。換気性閾値（VT）80%の強度で4分間のエルゴメーター運動を負荷し、運動終了後の心臓副交感神経活動回復応答を評価した結果、月経周期に伴う変動が認められた。 共著者：中村真理子、橋本有紀、井上桐子、林貢一郎、相澤勝治、池田瑞音、村井文江、目崎登 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。
39 月経周期がパフォーマンスに及ぼす影響の検討	—	平成12年12月	第14回女性スポーツ医学研究会学術集会（中央区） 第14回女性スポーツ医学研究会学術集会抄録集、p. 10	月経周期によるパフォーマンスの違いを検討するために、大学女子ハンドボール選手を対象に瞬発力と敏捷性の関連を評価した。25m方向変換走は月経期に低下したが、垂直跳びおよびサイドステップは月経周期による差を認めなかった。 共著者：橋本有紀、村井文江、目崎登 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。
40 一過性レジスタンス運動による血清testosterone, dehydroepiandrosterone sulfate (DHEAS), cortisol 応答の性差	—	平成12年12月	第14回女性スポーツ医学研究会学術集会（中央区） 第14回女性スポーツ医学研究会学術集会抄録集、p. 14	一過性レジスタンス運動による血清testosterone, dehydroepiandrosterone sulfate (DHEAS), cortisol 応答の性差を検討した。健康成人男性6名、女性6名を対象とした。結果、男性の血清testosterone濃度は運動前に比べ運動直後に有意に増加したが、女性は有意に減少した。男女共に、血清DHEAS濃度は運動直後に有意に増加し、血清cortisol濃度は低下傾向を示したが有意ではなかった。 共著者：相澤勝治、林貢一郎、池田瑞音、中村真理子、橋本有紀、井上桐子、村井文江、目崎登 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。
41 月経周期に伴う抹消循環機能の変化	—	平成13年7月	第30回日本女性心身医学会学術集会（京都市） 女性心身医学、6(1)、p. 31	月経周期に伴う抹消循環機能の変化を検討することを目的とした。正常月経周期の13名を対象とした。抹消循環機能の変化には加速度脈派（APG）を用いた。結果、安静時心拍数は、黄体期において卵胞期より有意に高値であったが、APG-indexには明らかな変化を認められなかった。 共著者：中村真理子、村井文江、目崎登 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。

42 一過性レジスタンス運動による血清steroid hormone 応答	—	平成13年9月 (発表) 平成13年12月 (抄録)	第56回日本体力医学会 (仙台市) 体力科学、50(6)、p. 837	運動による同化ホルモン応答評価の指標の可能性を探るために、一過性レジスタンス運動による血清steroid hormone(testosterone, DHEAS, cortisol) 応答について検討した。血清 testosterone濃度は、男性では運動直後に有意に増加するのに対して、女性では有意な低下を示した。一方、血清DHEASは男女ともに運動直後に増加した。これらのことから、女性の高強度レジスタンス運動においてanabolic hormone関与の可能性およびDHEAS応答が同化作用の評価指標となりうる可能性が示唆された。 共著者：相澤勝治，秋本崇之，井上博信，朱美賢，木村文津， <u>村井文江</u> ，目崎登 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。
43 漸増負荷自転車運動時の呼吸循環系および血漿カテコールアミン応答に及ぼす月経周期の影響	—	平成13年9月 (発表) 平成13年12月 (抄録)	第56回日本体力医学会 (仙台市) 体力科学、50(6)、p. 890	運動に対する呼吸循環系および交感神経-副腎系応答の月経周期による違いを検討することを目的とした。自転車エルゴメーターによる漸増運動負荷を実施し、運動後の応答を比較した。結果、心拍数、血圧、呼気ガス、血漿カテコールアミン濃度において、月経周期による違いは認められなかった。 共著者：林貢一郎，相澤勝治，池田瑞音，橋本有紀，井上桐子，中村真理子，佐々木純一， <u>村井文江</u> ，目崎登 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。
44 大学生用健康増進ライフスタイル行動尺度の開発—その妥当性と信頼性の検討	—	平成13年11月	第48回日本学校保健学会 (宇都宮市) 学校保健、43(増補)、 pp. 358-359	高校生・大学生の健康増進行動に関する研究の一部分である。自作の「健康増進ライフスタイル行動インデックス」25項目の構成概念妥当性、信頼性(内部一貫性)を検討した。結果、25項目は、「栄養・食事」「運動」「心の健康」「生活のリズム」「健康探索」の下位尺度から構成された。25項目のCronbach's α 係数は0.83であり、下位尺度においても0.70以上が確保された。 共著者：田代順子， <u>村井文江</u> ，西川浩昭，成瀬和子，小澤道子 担当部分：アンケート作成、データ集計・分析に関わった。
45 高校生・大学生の健康増進ライフスタイル行動と関連要因のパス分析	—	平成13年11月	第48回日本学校保健学会 (宇都宮市) 学校保健、43(増補)、 pp. 362-363	高校生・大学生の健康増進行動に関する研究の一部分である。高校生・大学生の健康増進行動および関連要因の性別・発達段階による相違を検討した。高校生、大学生の男女別の4グループに分けパス解析を実施した。結果、健康増進行動の得点および自覚的健康状態に差は認められなかった。しかし、下位のカテゴリにおいては差が認められた。男女共に発達とともに「健康の気付き」が減少し「健康増進行動」を促進する方向に作用していた。 共著者： <u>村井文江</u> ，田代順子，西川浩昭，成瀬和子，小澤道子 担当部分：アンケート作成、データ集計・分析を中心的に行い、口頭発表した。
46 運動が月経周期および月経に関する意識に及ぼす影響	—	平成14年8月	第31回日本女性心身医学会 学術集会(東京) 女性心身医学、7(1)、 p. 28	運動が月経周期および月経に関する意識に与える影響を検討することを目的とした。大学女子ハンドボール選手と一般女子大学生において月経周期における血清ホルモン値、身体症状、心理状態、および月経についての意識を比較した。結果、選手群は、血清ホルモン値が低く月経に伴う身体症状も少なくかつ弱かった。しかし、心理状態および月経に対する意識には有意差は認められなかった。 共著者：橋本有紀，目崎登， <u>村井文江</u> 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。

47 月経周期に伴い顔面冷却刺激に対する心臓副交感神経系応答は変化する	—	平成14年9月 (発表) 平成14年12月 (抄録)	第57回日本体力医学会 (高知市) 体力科学、51(6)、 p. 596	経周期に伴う心臓副交感神経応答に循環中枢を介する遠心路による影響を検討した。循環中枢の求心路である動脈圧反射を介さず心臓副交感神経系活動を促進する顔面冷却刺激にて比較検討した。正常月経周期の若年女性を対象とした結果、顔面冷却刺激に対する心臓副交感神経活動の反応時間は、月経周期によって異なる変動を示し、卵胞期において短縮、黄体期前期において遅延した。 共著者：林貢一郎、相澤勝治、中村真理子、村井文江、目崎登 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。
48 若年女性におけるレジスタンス運動トレーニングが安静時血清 dehydroepiandrosterone sulfateに及ぼす影響	—	平成14年9月 (発表) 平成14年12月 (抄録)	第57回日本体力医学会 (高知市) 体力科学、51(6)、 p. 701	dehydroepiandrosteron(DHEAS)が女性のレジスタンス運動に伴う身体の同化作用の指標になりえるかを検討した。8週間のレジスタンス運動トレーニングの結果、8週間のレジスタンストレーニングによって体重および除脂肪体重の増加と安静時血中DHEA-S濃度の増大が認められ、血中DHEA-Sがレジスタンストレーニングに伴う身体の同化を反映する指標とする可能性が示唆された。 共著者：相澤勝治、秋本崇之、井上博信、朱美賢、木村文津、村井文江、目崎登 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した
49 女性が健康に関して“しかたない”と認識することとそれに対する健康行動	—	平成14年12月	第22回日本看護科学学会 (千代田区) 第22回日本看護科学学会 講演集、p. 312.	女性が健康に関して“しかたない”と認識することの意味と健康行動の特徴を検討した。31~71歳28名のインタビューについて内容分析を行った。結果、健康上の“しかたない”ことは、病気ではない症状が多く、繰り返されるが生活に支障がなく、自分では納得していないことであった。健康行動としては解決のために適切な行動がとれていない状況が認められた。 共著者：村井文江、谷川裕子、田代順子 担当部分：データ収集・分析を中心的に行い、ポスター発表した。
50 女性サッカー選手における競技期間中の内分泌応答とコンディション評価	—	平成14年12月	第16回女性スポーツ医学 研究会学術集会(千代田 区) 第16回女性スポーツ医学 研究会学術集会抄録集、 p. 10	女性サッカー選手を対象に、競技期間中を通じた高強度運動による内分泌応答とコンディションの関係について検討した。結果、主観的運動強度は試合期の2日目、3日目に有意な高値を示した。唾液中DHEA濃度、唾液中cortisol濃度もトレーニング期に比較し試合期に増加し、回復期に減少した。 共著者：相澤勝治、村井文江、目崎登 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。
51 月経周期が運動に生じる酸化ストレスに及ぼす影響	—	平成15年9月 (発表) 平成15年12月 (抄録)	第58回日本体力医学会 (静岡市) 体力科学、52(6)、p. 901	女性ホルモンの運動による酸化ストレスの影響を検討するために、月経周期による比較を行った。正常月経周期で運動習慣のない成人女性18名を対象とし、結果、運動後、TBARS(thiobarbituric acid reactive substance)は卵胞期に、T-SOD(total superoxide dimutase)は黄体期に有意に減少した。∠T-SODと∠EC-SOD(extracellular superoxide dimutase)はestradiolとの負の相関を示した 共著者：朱美賢、村井文江、目崎登、池田瑞音 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。
52 若年女性における8週間のレジスタンストレーニングが安静時IGF-1レベルに及ぼす影響	—	平成15年9月 (発表) 平成15年12月 (抄録)	第58回日本体力医学会 (静岡市) 体力科学、52(6)、p. 908	安静時インスリン様成長因子(IGF-1)は、一過性レジスタンス運動後に筋組織の肥大や骨組織の同化作用を有している。若年女性を対象として、8週間のレジスタンス運動トレーニングによるIGF-1の変動を検討した。結果、8週間のレジスタンス運動で、体重および除脂肪体重の増加、1RMの増加は認められたが、血清IGF-1およびIGFBP-3の有意な変動は認められなかった。 共著者：相澤勝治、秋本崇之、林貢一郎、朱美賢、村井文江、目崎登 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。

53 若年女性の月経周期に伴うバランス能力の変化	—	平成15年9月 (発表) 平成15年12月 (抄録)	第58回日本体力医学会 (静岡市) 体力科学、52(6)、p.969	月経周期による主観的コンディションと身体的パフォーマンスへの影響の1つとしてバランス能力について検討した。運動習慣のある若年女性12名を対象とした。重心動揺テストでは月経周期に伴う変化が認められた。また、関節弛緩性テストでは左手首のみに変化が認められた。動揺バランステストは、月経周期に伴う明らかな変化は認められなかった。 共著者：林ちか子、池田瑞音、相澤勝治、村井文江、目崎登 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。
54 女性が健康上“しかたない”と認識することとしないことについての比較 —健康行動を中心に—	—	平成15年12月	第23回日本看護科学学会 (津市) 第23回日本看護科学学会 講演集、p.408	女性が健康上“しかたない”と認識することとしないことの相違と健康行動との関連を質的探索的に検討することを目的とした。“しかたない”という認識は、適切な健康行動がとれずに満足していない状況で認められた。健康行動の情報が多く偶然に出会っていることは同様であったが、“しかたない”と認識している群は自分に合った健康行動を獲得するまでに時間が要していた。 共著者：村井文江、谷川裕子、田代順子 担当部分：データ収集・分析を中心的に行い、ポスター発表した。
55 ヘルス・ボランティア指向のある看護大学生の『身近な健康問題とケア』の認識と健康学習ニーズ	—	平成15年12月	第23回日本看護科学学会 (津市) 第23回日本看護科学学会 講演集、p.553	ヘルス・ボランティアを指向する看護大学生が認識する身近な健康問題、身近な人へ健康支援、およびこれらの学習方法等について記述することを目的とした。16名の看護大学生にフォーカスグループ法インタビューを実施し、内容分析を行った。結果、身近な健康問題は学年とともに変化し、自らの健康管理が中心課題になっていた。また、身近な人は学年とともに拡大し、大学での学習を活用した支援が認められた。一方、ボランティアも含め、知識や技術の伴わない活動の経験も有していた。 共著者：田代順子、菱沼典子、川越博美、森明子、三橋恭子、村井文江、荒木田美香子 担当部分：文献検討、インタビューガイド作成に関わった。
56 妊婦水泳前後の筋硬度と腰痛の関連性	—	平成15年12月	第17回女性スポーツ医学 研究会学術集会(港区) 第17回女性スポーツ医学 研究会学術集会抄録集、 p.5	妊婦水泳前後における筋硬度の変化を検討した。腰痛群と腰痛なし群で比較検討をした。結果、腰痛なし群は、水泳後に腰部、臀部の筋硬度が有意に低下した。一方、腰痛群は腰部の一部のみで筋硬度の低下が認められたのみで他の部位では変化が認められなかった。 共著者：及川愛子、石田安紀子、橋本聡子、佐々木純一、林貢一郎、村井文江、目崎登 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。
57 若年女性における月経周期とバランス能力との関連	—	平成15年12月	第17回女性スポーツ医学 研究会学術集会(港区) 第17回女性スポーツ医学 研究会学術集会抄録集、 p.9	月経周期によるバランス能力の変化について検討した。運動習慣のある若年女性12名を対象とした。重心動揺テストは黄体期後期に高値を示した。また、関節弛緩性テストでは左手首のみであるが、月経期および黄体前期に有意な増加を示した。動揺バランステストでは明らかな変化は認められなかった。 共著者：林ちか子、池田瑞音、朱美賢、林貢一郎、村井文江、目崎登 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。
58 女性アスリートの急速減量に伴うコンディション評価—栄養状態と食行動の観点から—	—	平成15年12月	第17回女性スポーツ医学 研究会学術集会(港区) 第17回女性スポーツ医学 研究会学術集会抄録集、 p.10	短期的急速減量に伴う栄養状態および食行動の変化について縦断的に検討した。大学女性柔道選手5名を対象とし、試合3週間前から試合後3日までの測定を実施した。結果、体重は、試合前3週間から試合後3日まで有意に減少した。除脂肪体重および総体水分量は、試合前まで有意に減少した。栄養充足率では摂取エネルギーおよび脂質が試合前まで減少した。また、EAT-26は試合前に高値を示した。 共著者：相澤勝治、林貢一郎、橋本聡子、斉藤陽子、市川あゆみ、村井文江、目崎登 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。

59 思春期女子新体操選手のボディ・イメージと体型に関する一考察	—	平成16年8月	第23回日本思春期学会(つくば市) 第23回日本思春期学会総会学術集会抄録集、p. 90	思春期女子新体操選手における発達に伴うボディ・イメージを検討した。新体操部および新体操クラブに所属する7～17歳92名の女子を対象とした。結果、身長・体重は同年代の平均値を下回っていた。年齢が高くなるにつれ、“太っている”と認識する傾向が強くなっていった。 共著者：林ちか子、村井文江、目崎登 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。
60 若年女性における運動が安静時の酸化ストレスにおよぼす影響	—	平成16年9月(発表) 平成16年12月(抄録)	第59回日本体力医学会(さいたま市) 体力科学、第53巻、6号、p. 716	若年女性における月経状態と運動が安静時の酸化ストレスに及ぼす影響を検討した。結果、estrogen値は異常月経アスリート群で有意に低値を示した。TBARS(thiobarbituric acid reactive substance)およびT-SOD(total superoxide dimutase)活性は、正常月経アスリート群が一般群に比較し有意に低値であり、安静時の酸化ストレスが少ないことが示唆された。 共著者：朱美賢、林ちか子、橋本有紀、鈴木なつ未、村井文江、目崎登 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。
61 母乳育児に対する看護ケアの現状と退院時母乳率の関連 — 関東6県における調査から —	—	平成16年9月(発表/抄録)	第45回日本母性衛生学会(新宿区) 母性衛生、第45巻、3号、p. 162	効果的な母乳育児支援のあり方を明らかにするために、母乳育児支援の実態と母乳率について検討した。242のアンケートを分析した結果、母乳育児の希望者は8.6割であり、母乳育児率は退院時5.6割、1ヶ月健診時5.7割であった。施設における実施率は母子同室64.5%、自律授乳70.7%であったが、出生当日から終日の母子同室および自律授乳をしている施設は21.9%であり、母乳育児率は退院時8.8割であった。 共著者：村井文江、斉藤早香枝、野々山未希子、江守陽子、谷川裕子 担当部分：アンケート作成、データ収集・分析を中心的に行いまとめた。
62 思春期女子新体操選手の身体成熟度と重心動揺性との関連	—	平成16年11月(発表/抄録)	第15回日本臨床スポーツ医学会(大阪市) 日本臨床スポーツ医学会誌、12(4)、p. S87	思春期女子新体操選手の初経発来および第二次性徴の程度と重心動揺性の関連を検討した。新体操部および新体操クラブに所属する7～17歳92名の女子を対象とした。結果、外周面積、矩形面積、実行値面積の値は、身体の成熟とともに減少した。動揺平均中心変位も身体の成熟とともに身体の中心への移動が認められた。総軌跡長、単位軌跡長には変化が認められなかった。 共著者：林ちか子、村井文江、目崎登 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。
63 若年女性における月経状態と運動が安静時の酸化ストレスに及ぼす影響	—	平成16年12月	第18回女性スポーツ医学研究会学術集会(港区) 第18回女性スポーツ医学研究会学術集会抄録集、p. 10	若年女性における月経状態と運動が安静時の酸化ストレスへの影響を検討した。結果、estrogen値は異常月経アスリート群が他の2群より有意に低値を示した。酸化ストレス指標であるTBARSおよびT-SOD活性は、正常月経アスリート群が一般群に比較し有意に低値であり、安静時の酸化ストレスが少ないことが示唆された。 共著者：朱美賢、鈴木なつ未、林ちか子、橋本有紀、村井文江、目崎登 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。
64 臨地実習における看護学生の自律神経機能の変動(その1) — 心臓自律神経機能の変化 —	—	平成17年7月(発表) 平成17年6月(抄録)	第31回日本看護研究学会(札幌市) 日本看護研究学会雑誌、28(3)、p. 173	臨地実習によってもたらされる看護学生の自律神経活動の変化について心拍変動パワースペクトル解析を用いて検討した。19名のデータを分析した結果、安静時のHR、HF、LF/HFは実習前—中—後で差が認められなかった。しかし、CWT刺激の変化は差が認められ、実習中および後でHFの応答性が有意に低下し、臨地実習が心臓自律神経機能、特に副交感神経反応に影響を及ぼしていることが示唆された。 共著者：村井文江、樋之津淳子、高島尚美、林啓子 担当部分：実験およびデータ分析に関わりポスター発表した。

65 臨地実習における看護学生の自律神経機能の変動（その2）－気分変化との関連－	—	平成17年7月 （発表） 平成17年6月 （抄録）	第31回日本看護研究学会 （札幌市） 日本看護研究学会雑誌、 28(3)、p. 173	看護学生の臨地実習前後の気分変化と心臓自律神経機能との関係を検討した。気分変化の測定にはPOMS短縮版を使用した。19名のデータを分析した。実習前後のPOMSの得点は年齢相当であったが、実習中は、「緊張・不安」「困惑」が注意の60点を上回り、実習前および後に比較し有意に高値となった。POMSのパターンで実習前・中・後において逆氷山型を示した学生は副交感神経反応が低かった。共著者：樋之津淳子、林啓子、村井文江、高島尚美 担当部分：実験およびデータ分析に関わった。
66 臨地実習における看護学生の自律神経機能の変動（その3）－愁訴との関連－	—	平成17年7月 （発表） 平成17年6月 （抄録）	第31回日本看護研究学会 （札幌市） 日本看護研究学会雑誌、 28(3)、p. 174	臨地実習に関係して、不定愁訴と月経関連愁訴、心臓自律神経応答の関連を検討した。19名のデータを分析した。結果、不定愁訴数は、実習中に有意に多く認められた。月経関連愁訴は、不定愁訴多数群において、実習中に有意に増加していた。自律神経応答については、交感神経と副交感神経応答のバランスが崩した症例が実習中に増加不定愁訴および月経関連愁訴との関連は認められなかった。共著者：高島尚美、村井文江、樋之津淳子、林啓子 担当部分：実験およびデータ分析に関わった。
67 月経周期における一過性運動が骨代謝マーカーに及ぼす影響	—	平成17年9月 （発表） 平成17年12月 （抄録）	第60回日本体力医学会 （岡山市） 体力科学、54(6)、p. 474	女性における運動と骨代謝応答の基礎データを得るために、月経周期における一過性運動が骨代謝マーカーへの影響を検討した。運動習慣のない若年健常女性10名を対象とした。安静時、骨型アルカリフォスファターゼ（BAP）、I型コラーゲンCテロペプチド（ICTP）は月経周期で変化が認められなかった。しかし、一過性レジスタント運動を負荷後の反応は月経周期による変化が認められ、黄体期のICTA増加がなく、骨吸収応答が抑制されている可能性が示唆された。共著者：鈴木なつ未、相澤勝治、村井文江、銘苺瑛子、林ちか子、木下裕光、目崎登 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。
68 一過性運動時の骨代謝動態に月経周期が及ぼす影響	—	平成17年12月	第19回女性スポーツ医学研究会学術集会（港区） 第19回女性スポーツ医学研究会学術集会抄録集、 p. 13	一般若年女性の月経周期による一過性運動時の骨代謝応答を検討した。結果、卵胞期では、骨型アルカリフォスファターゼ（BAP）、およびI型コラーゲンCテロペプチド（ICTP）が運動直後に有意に増加し、黄体期ではBAPのみに有意な増加が認められた。黄体期における骨吸収応答が抑制されていることから、骨代謝応答へのエストロゲンレベルの関与が示唆された。共著者：鈴木なつ未、相澤勝治、村井文江、目崎登、銘苺瑛子、林ちか子 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。
69 臨地実習における看護学生の月経関連愁訴と心臓自律神経機能の変化	—	平成18年7月 （発表） 平成18年6月 （抄録）	第32回日本看護研究学会 （別府市） 日本看護研究学会雑誌、 29(3)、p. 278	臨地実習によってもたらせる月経周期に関連する愁訴の変化と心臓自律神経応答の関連について検討した。月経周期に関連する愁訴数は、実習に関連して有意な変化する群があり実習による影響が考えられた。一方、心臓自律神経応答は、月経関連愁訴数の変化に関連する明確な変動は認められなかった。共著者：村井文江、高島尚美、樋之津淳子、林圭子 担当部分：実験およびデータ分析に関わりポスター発表した。
70 コラージュ表現の特徴とSelf-esteem・自覚症状等との関連(1) 形式分析	—	平成18年8月 （発表） 平成19年3月 （発表）	第25回日本思春期学会学術集会（大阪市） 思春期学、25(1)、p. 68	コラージュ表現の特徴に自己がどのように反映されているかを検討した。自己の検討としては、Self-esteem尺度、共感経験尺度、アサーティブ・チェックリスト、自覚症状尺度を用いた。コラージュについては形式分析を行った。看護系大学の3年生、女性52名の作品を分析した。結果、切片数が多いものは「受容性」が高かった。余白分量が多い群および無彩色切片のある群は、「正当な権利主張」得点が高かった。コラージュ表現が、その時の自己を映し出している可能性が示唆された。共著者：高田由美子、村井文江、坂田由美子 担当部分：データ分析に関わった。

71 コラーゲ表現の特徴とSelf-esteem・自覚症状等との関連(2) 内容分析	—	平成18年8月	第25回日本思春期学会学術集会(大阪市) 思春期学、25(1)、p. 69	コラーゲ表現の内容に自己がどのように反映されているかを検討した。自己の検討としては、Self-esteem尺度、共感経験尺度、アサーティブ・チェックリスト、自覚症状尺度を用いた。看護系大学の3年生、女性52名の作品を分析した。結果、人間の貼ってある割合が先行研究に比較し多かった。また、食べ物貼ってある群は、「自己信頼」の得点が高かった。これらの解釈についてはさらなる研究の蓄積が必要である。 共著者：坂田由美子、高田由美子、 <u>村井文江</u> 担当部分：データ分析に関わった。
72 閉経後女性におけるレジスタンストレーニングが骨代謝動態におよぼす影響	—	平成18年9月(発表) 平成18年12月(抄録)	第61回日本体力医学会(神戸市) 体力医学、55(6)、p. 632	閉経後女性における低強度レジスタンストレーニングが骨代謝動態に及ぼす影響を検討した。骨代謝マーカー(BAP、ICTH)および骨代謝関連ホルモンの1つカルシトニンは、低強度レジスタンストレーニングによる変化を認めなかった。しかし、骨代謝関連ホルモンの1つ副甲状腺ホルモンはトレーニング後に減少を認め、骨代謝関連ホルモンが改善する可能性が示唆された。 共著者：鈴木なつ未、相澤勝治、今井智子、清水和弘、難波秀行、朱美賢、鈴木光実、 <u>村井文江</u> 、 <u>目崎登</u> 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。
73 女子長距離ランナーの月経異常が唾液分泌型免疫グロブリンAに与える影響	—	平成18年9月(発表) 平成18年12月(抄録)	第61回日本体力医学会(神戸市) 体力医学、55(6)、p. 670	女子長距離ランナーにおける月経異常が唾液中SIgAに与える影響を検討した。結果、月経異常のある長距離ランナーは、SIgAの分泌速度が低値であり、血中エストロゲン濃度も低値であった。また、女子長距離ランナーは月経異常に関係なく、リンパ球/好中球比が高く、日常の運動ストレスが高く疲労した状態にあることが考えられた。 共著者：清水和弘、相澤勝治、鈴木なつ未、木村文律、中尾喜久子、鈴木尚人、 <u>村井文江</u> 、河野一郎、 <u>目崎登</u> 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。
74 高齢女性のレジスタンストレーニングでの糖・脂質代謝と血清レプチンの反応	—	平成18年9月(発表) 平成18年12月(抄録)	第61回日本体力医学会(神戸市) 体力科学、55(6)、p. 857	高齢女性のレジスタンストレーニングが、糖・脂質代謝およびレプチンに及ぼす影響を検討した。結果、レジスタンストレーニング後、筋力の増加、ウェストの減少が認められた。糖代謝では、インスリン、インスリン抵抗性が低下したが、脂質代謝の指標であるレプチンにおける変化は認められなかった。 共著者：今井智子、相澤勝治、鈴木なつ未、清水和弘、難波秀行、中村真理子、市川あゆみ、 <u>村井文江</u> 、 <u>目崎登</u> 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。
75 Are there differences between corporal punishment as a method of child discipline and child abuse by the parents? (親による子どもに対するしつけとしての体罰と虐待の違いはあるだろうか)	—	平成18年11月	Ninth International Congress of Behavioral Medicine (Bangkok, Thailand) International Journal of Behavioral Medicine, 13 (Supplement), p. 271	日本において、親が子どもを殴る(体罰)という行為がしつけとして認められるか、虐待と考えられるかを調査した。782人にアンケート調査を実施した。結果、親が子どもを殴るという行為について、子どものころに親に殴られた経験のあるものは、「子どもを殴ることは虐待ではない」と考えるものが多かった。また、殴る部位、子どもの性別、年代によって、受け止め方が異なった。 共著者：Emori Yoko, Saito Sakae, Nonoyama Mikiko, <u>Murai Fumie</u> 担当部分：アンケート調査、データ分析に関わった。
76 運動由来の月経異常が免疫機能に与える影響	—	平成18年12月	第20回女性スポーツ医学研究会学術集会(港区) 第20回女性スポーツ医学研究会学術集会抄録集、p. 5	運動に由来する月経異常が免疫機能に与える影響について検討した。結果、運動に由来する月経異常がある状況では、日常の運動ストレスによって疲労していることに加え、唾液分泌型免疫グロブリンA値が低値であった。 共著者：清水和弘、相澤勝治、鈴木なつ未、 <u>村井文江</u> 、河野一郎、 <u>目崎登</u> 、中尾喜久子 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。

77 大学女子柔道選手における骨代謝動態の検討	—	平成18年12月	第20回女性スポーツ医学研究会学術集会（港区） 第20回女性スポーツ医学研究会学術集会抄録集、 p. 7	大学女子柔道選手における骨代謝動態を検討した。女子柔道選手と一般の女子大学生を比較した結果、女子柔道選手においては、骨形成マーカー（BAP）および骨吸収マーカー（ICTP）共に有意に高く、骨代謝状態が高いことが示された。 共著者：鈴木なつ未、相澤勝治、朱美賢、 <u>村井文江</u> 、目崎登、鈴木光実 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。
78 レジスタンストレーニングが血清アディポネクチンとインスリン抵抗性に及ぼす影響	—	平成18年12月	第20回女性スポーツ医学研究会学術集会（港区） 第20回女性スポーツ医学研究会学術集会抄録集、 p. 9	レジスタンストレーニングが血清アディポネクチンとインスリン抵抗性に及ぼす影響を検討した。若年女子7名を対象に検討した。結果、インスリン抵抗性は明らかな低下を示した。しかし、血清アディポネクチンには明らかな差は認められなかった。 共著者：今井智子、相澤勝治、鈴木なつ未、清水和弘、難波秀行、中村真理子、市川あゆみ、 <u>村井文江</u> 、目崎登 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。
79 母親の経験からみた死産のケアガイドライン中間評価	—	平成19年3月（発表） 平成19年2月（抄録）	第21回日本助産学会学術集会（別府市） 日本助産学会誌、20(3)、 p. 99	病棟で作成した死産のケアガイドラインについて、死産を経験した母親による評価を試みた。インタビューにてデータ収集をして分析を行った。16名の母親のうち8名から協力が得られた。結果、環境調整によってプライバシーが守られ、感情の表出が自由にできたこと、家族としての絆が強まったことが語られた。児との面会や一緒に過ごすことについては、当初は戸惑いもあったが、実際に過ごすことで児への愛着も高まり、親としての達成感も得られたことが語られた。ガイドラインの有用性が示唆された。 共著者：能町しのぶ、中嶋真弓、 <u>村井文江</u> 担当部分：研究計画から関わり分析をした。
80 臨地実習期間中に学生が経験した患者からの暴力 学生が最も困った暴力場面と事例の分析	—	平成19年8月	第17回日本看護学教育学会学術集会講演集（福岡市） 日本看護学教育学会誌、 17(学術集会講演集)、 p. 233	臨地実習中に学生が最も困った暴力場面の分析を通して、臨地実習中の学生が経験した患者からの暴力について明らかにすることを目的とした。質問紙法の自由記述にて学生が挙げた107事例について分析を行った。結果、繰り返し暴力行為をする患者を受け持っている状況もあり、受け持ち患者の選定から調整の必要性が示された。また、学生は、暴力が、疾病等に由来するのか、自分の対応の問題かを悩み、実習後においても対処方法について悩んでいる状況が認められた。 共著者：三木明子、江守陽子、 <u>村井文江</u> 担当部分：研究計画の協議、アンケート調査、分析結果の討議に関わった。
81 学生が臨地実習で経験した患者からの暴力と受けた暴力に対する学生の気持ち	—	平成19年8月	第17回日本看護学教育学会学術集会講演集（福岡市） 日本看護学教育学会誌、 17(学術集会講演集)、 p. 234	臨地実習での暴力への教育的支援の基礎資料として、患者から看護学生が受けた暴力の状況、および、受けた暴力に対する学生の気持ちを明らかにすることを目的とした。546名について分析した。臨地実習において暴力を受けた経験がある学生は60.6%であった。言語的暴力の体験者が最も多かったが、身体的暴力や性的暴力を受けた学生もいた。受けた暴力に対して、嫌な気持ちを抱いている学生は平均54.3%であり、暴力行為による差が認められた。 共著者： <u>村井文江</u> 、三木明子、江守陽子 担当部分：研究計画、アンケート調査、分析に関わり、ポスター発表した。

82 日本における思春期健康 養育の質の確保について 10 年間（1997～2006年）の文献 検討より	—	平成19年8月 （発表） 平成19年3月 （抄録）	第26回日本思春期学会学 術集会（港区） 思春期学、26(1)、 pp.115-116	日本において思春期を対象に実施されている健康 教育の質がどのように確保されているかを文献検 討することを目的とした。1997年から2006年の10 年間に発行された文献について、プログラムの開 発過程（Plan-Do-Check）の段階および Donabedian（1987）の質評価の枠組みを基にして 分析した。134件文献が抽出され、99件が分析対 象となった。99件中、76件は、健康教育のための 基本的資料を提供する“Plan”の段階のためのも のであった。残り23件は“Check”段階でもの であり、うち22件はアウトカム評価であった。 著者：村井文江
83 早産・低出生体重児を養 育する母親の育児困難感とそ の関連要因について	—	平成19年10月 （発表／抄 録）	第48回日本母性衛生学会 学術集会（つくば市） 母性衛生、48(3)、p.149	3歳未満の早産・低出生体重児で出生した子ども を持つ母親の育児困難感と育児支援のニーズにつ いて検討した。202名の母親を対象とした。育児 困難感は、第1子、出生体重1,000g未満、父親の 教育歴が低い場合に高かった。支援のニーズは1 歳児で最も高く、母子家庭、父親の教育歴、第1 子、在胎日数、入院日数、発達の遅れに関連して いた。 共著者：齋藤早香枝、江守陽子、村井文江、野々 山未希子、廣瀬たい子 担当部分：分析に関わった。
84 早産・低出生体重児の母 親の被養育体験と育児困難感 との関連	—	平成19年10月 （発表／抄 録）	第48回日本母性衛生学会 学術集会（つくば市） 母性衛生、48(3)、p.149	3歳未満の早産・低出生体重児で出生した子ども の母親の被養育体験と育児困難感の関連を検討し た。196名の母親を対象とした。結果、自分の親 から暖かく優しい養育をあまり受けていないと認 識している母親は、育児困難感を抱きやすく育児 支援の必要性が高くなる傾向が認められた。育児 支援の必要性が高い群は、自分の父親が過干渉、 統制的であったと認識する傾向が認められた。 共著者：齋藤早香枝、村井文江、江守陽子、野々 山未希子、廣瀬たい子 担当部分：分析に関わった。
85 性暴力被害者への急性期 看護ケアに関するDVD教材の 評価	—	平成19年10月 （発表／抄 録）	第48回日本母性衛生学会 学術集会（つくば市） 母性衛生、48(3)、p.159	性暴力被害者に対する看護職の支援における基本 的な支援方法を普及させるために作成したDVDの 評価を行った。看護系大学の4年生を対象に視聴 後に質問紙にて評価をした。女性83名、男性6名 の回答を分析した。結果、二次被害、安心の配 慮、プライバシーの配慮、意思の尊重、プロセス の説明については、7割以上が非常にわかると回 答した。一方、来院の準備や外傷の見方はわから ないとする割合が多かった。 共著者：三隅順子、加納尚美、米山奈々子、島田 智織、梶原祥子、山海千海子、村井文江、高瀬泉 担当部分：DVD作成および質問紙の作成に関わ った。
86 ポッター症候群と診断さ れ自然経過で新生児を看取っ た一症例 バースプランの有 効性に関する考察	—	平成19年10月 （発表／抄 録）	第48回日本母性衛生学会 学術集会（つくば市） 母性衛生、48(3)、p.178	事例を通して、出産後まもない時期に死亡が予測 される出産に対するバースプランの役割について 検討した。新生児の看取りを決意した妊婦のバ ースプランは、妊婦自身の予期的悲嘆だけでなく、 スタッフ全員が対象の思いを受け止めてひとつの 方向で看護ができるという点で大きな役割を果た したと考えられた。 共著者：白根みゆき、鷹巣結香里、中嶋真弓、村 井文江 担当部分：分析に関するアドバイスをを行った。

87 帝王切開を体験した母親の出産に対する受け止めの	—	平成19年10月 (発表/抄録)	第48回日本母性衛生学会 学術集会(つくば市) 母性衛生、48(3)、p.186	帝王切開を体験した母親の出産に対する受け止めに明らかであることを目的とした。帝王切開を経験した8名に半構造面接を実施し、質的に分析を行った。結果、帝王切開が児にとって安全な方法をして捉え、児が無事に産まれたことへの安堵感を抱いていた。経膈分娩から帝王切開に変更となった母親は、心残りを持っていたが、最終的に子どもの顔を見てしまえばよかったのように折り合いをつけていた。 共著者：大貫真知子、久保田由紀子、中嶋真弓、阿部正子、村井文江 担当部分：分析に関するアドバイスをを行った。
88 助産師による妊娠期外来(助産師外来)の質の確保について 10年間(1997年～2006年)の文献検討より	—	平成19年10月 (発表/抄録)	第48回日本母性衛生学会 学術集会(つくば市) 母性衛生、48(3)、p.230	妊娠期を対象に実施されている助産師外来の質の確保について明らかにするために文献検討を行った。Donabedian(1987)の質評価の枠組みを基にして分析を行った。分析対象となった文献は11件であった。評価は、対象の受け止め、満足度、不安の解消、助産師の満足についてなされていた。ストラクチャとプロセスを踏まえてアウトカムを評価しているものはなく、信頼性・妥当性が確保されている尺度を用いている研究も認められなかった。 共著者：芳賀裕子、村井文江 担当部分：第一著者の修士論文の一部分である。指導教員として、研究計画から発表まで関わった。
89 月経周期における一過性有酸素運動が骨代謝マーカーに及ぼす影響	—	平成19年10月 (発表) 平成19年12月 (抄録)	第62回日本体力医学会 (秋田市) 体力科学、56(6)、 p.627	若年女性において、一過性有酸素運動が骨代謝マーカーに及ぼす影響について月経周期(卵胞期と黄体期)で検討をした。運動習慣がなく、正常月経周期にある若年女性8名を対象とした。結果、骨形成マーカーのBAPおよび骨吸収マーカーのICTPは、運動直後に増加し24時間後には回復したが、月経周期による差は認められなかった。 共著者：鈴木なつ未、朱美賢、鈴木光実、相澤勝治、村井文江、目崎登、今川重彦 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。
90 酸化ストレスと月経周期が運動による溶血に及ぼす影響	—	平成19年10月 (発表) 平成19年12月 (抄録)	第61回日本体力医学会 (秋田市) 体力科学、56(6)、 p.658	運動によって引き起こされる酸化ストレスと溶血の関連を月経周期(月経期、卵胞期、黄体期)で検討した。運動習慣がなく、正常月経周期にある若年女性7名を対象とした。自転車エルゴメーターによる高強度運動を負荷し評価した。結果、月経の時期に関係なく、運動によって溶血が生じていることが確認された。月経期のみ、酸化ストレスの指標と溶血レベルに相関が認められた。 共著者：鈴木光実、朱美賢、鈴木なつ未、相澤勝治、田辺解、今有礼、谷村佑子、村井文江、目崎登 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。
91 若年女性における高強度運動が血中酸化ストレス指標の変動に及ぼす影響	—	平成19年10月 (発表) 平成19年12月 (抄録)	第61回日本体力医学会 (秋田市) 体力科学、56(6)、 p.659	若年女性における高強度運動が酸化ストレスマーカーの返送に及ぼす影響について検討した。運動習慣がなく正常月経周期である若年女性8名を対象とした。結果、運動後、血中乳酸は増加した。血漿MDAは増加し、血清T-SOD activityは減少した。血清CPKは運動による有意な変動は認められなかった。 共著者：朱美賢、鈴木光実、鈴木なつ未、中村真理子、今井智子、村井文江、目崎登 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。

92 一過性レジスタンス運動が血中アディポサイトカインに及ぼす影響	—	平成19年10月 (発表) 平成19年12月 (抄録)	第61回日本体力医学会 (秋田市) 体力科学、56(6)、 p. 672	一過性レジスタンス運動におけるアディポサイトカインの変化について検討した。対象は若年男性8名であり、アディポサイトカインとしてアディポネクティンとレポチンを評価した。結果、レジスタンス運動によって、レプチンの減少が認められたが、アディポネクティンの変化は認められなかった。また、乳酸、TC、HDL-C、インスリンの増加を認めた。これらよりレジスタンス運動がアディポサイトカインに影響する可能性が示唆された。 共著者：今井智子、 <u>村井文江</u> 、目崎登、今川重彦 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。
93 出産における満足	—	平成20年3月 (発表) 平成20年2月 (抄録)	第22回日本助産学会学術 集会(神戸市) 日本助産学会誌、21(3)、 p. 116	「出産満足」について概念の定義を導き出すための分析を行い再定義することを目的とした。2002～2007年の5年間の文献を対象として、最終的には45件の文献を分析対象とした。結果、出産満足を「助産ケアの目的のひとつであり、産婦が期待する出産に対して、継続したケアを通して母子ともに健康なお産がうみだす出産に対する自信、母親としての自覚を促し、母親役割を促進する」と定義した。 共著者：小木千代子、 <u>村井文江</u> 担当部分：分析に関わった。
94 死産を経験した母親への分娩施設における看護支援茨城県での実態調査	—	平成20年3月 (発表) 平成20年2月 (抄録)	第22回日本助産学会学術 集会(神戸市) 日本助産学会誌、21(3)、 p. 150	茨城県内の分娩施設において周産期喪失を経験した母親へどのような看護支援が提供されているか、現状把握を行った。21施設から回答を分析した。結果、57.1%の施設において、死産を経験した母親に対する支援方針・計画を持っていた。環亡くなった児との面会支援は全ての施設でされていたが、遺品等の説明は52.3%であり、退院後の支援をしている施設は61.9%であった。 共著者：能町しのぶ、小木千代子、中田久恵、西出弘美、山本梨花、 <u>村井文江</u> 担当部分：研究計画の協議、アンケート作成、分析結果の討議に関わった。
95 What a woman who has gone through stillbirth experiences by seeing her stillborn child, caring for her stillborn child and having mementos of her stillborn child(死産後に亡くなった児との面会、児への関わり、遺品を持つことをした女性の経験)	—	平成20年7月	The ICM 28th Triennial Congress, 2008 (Glasgow, UK)	死産後に亡くなった児と面会すること、児への関わりをすること、遺品を残すことをしている女性がどのような経験をしているか明らかにすることを目的とした。死産後1～6か月にある女性にインタビューを実施し分析した。結果、女性は、児に会うことで死産したことを認識するとともにその子が自分の子、家族であるという認識をしていた。また、子どもに親として何かをしたい気持ちになり関わりを持つとともに子どもの証を残そうとしていた。これらを通して、死産の体験を意味づけていた。 共著者：Sinobu Noumachi, <u>Fumie Murai</u> , Mayumi Nakajima 担当部分：研究計画についてアドバイスし、分析を行った。
96 Factors Influencing a Father's Child-rearing of a low birth weight infant(低出生体重児の父親の育児に影響する要因)	—	平成20年8月	The 11th World Congress of the World Association for Infant Mental Health (Yokohama, Japan)	低出生体重児の育児における父親役割に影響する要因を検討した。外来でフォローを受けている低出生体重児の母親197名に父親の育児参加について質問紙で回答を得た。父親の育児参加に影響する要因として、在胎週数、入院中の面会時期、退院してからの日数、父親の健康状態、母親の抑うつ傾向、母親の教育レベル、児の特徴が挙げられた。また父親の育児参加は母親の育児不安を低下させていた。 共著者：Sakae Saito, Yoko Emori, <u>Fumie Murai</u> , Mikiko Nonoyama, Taiko Hirose, Miho Kusanagi 担当部分：分析に関わった。

97 産後の生活の実態とサポート状況、育児不安、抑うつとの関連	—	平成20年10月 (発表/抄録)	第49回日本母性衛生学会 学術集会(浦安市) 母性衛生、49(3)、p.174	出産後の自宅での生活の実態とサポート状況、育児不安等の関連を検討した。産後1か月健診にて質問紙調査を実施し、112名の回答を分析した。結果、産後1か月健診の時点で、ほとんど家事をしていないか10%程度である母親は48%、退院直後から中程度している母親は13%であった。家事分担の状況と育児不安、産後の抑うつとの関連は認められなかった。 共著者：齋藤早香枝、江守陽子、村井文江 担当部分：分析に関わった。
98 助産師外来における妊娠期の自己肯定感を高めることへの効果的ケアの検討	—	平成20年10月 (発表/抄録)	第49回日本母性衛生学会 学術集会(浦安市) 母性衛生、49(3)、p.285	助産師外来において妊婦が自己肯定感を高める(自信が持てる)ケアについて検討した。助産師外来を受診し出産した女性に産後1か月以降に半構造面接を実施し16名のデータを内容分析をした。結果、妊婦に親身になり、聴く姿勢でいること、不安の解決を促すこと、児の順調な成長から妊娠の喜びを感じることができるよう、ゆっくりと関わることで、妊婦の自信に関わっていた。 共著者：芳賀裕子、村井文江 担当部分：第一著者の修士論文の一部分。指導教員として、研究計画から発表まで関わった。
99 月経周期を考慮した一過性レジスタンス運動がアディポサイトカインおよび糖脂質代謝に与える影響	—	平成20年10月 (発表) 平成20年12月 (抄録)	第63回日本体力医学大会 (別府市) 体力科学、57(6)、p.759	一過性レジスタンス運動がアディポサイトカインおよび糖脂質代謝に及ぼす影響について、月経周期(卵胞期、黄体期)で検討した。正常月経周期になる若年女性7名を対象とした。結果、一過性レジスタンス運動によって、乳酸、アディポネクティン、レプチン、総コレステロール、高比重リポ蛋白コレステロール、トリグリセリド、インスリン、グルコースの運動時応答は、月経周期によって差が認められなかった。 共著者：今井智子、相澤勝治、村井文江、目崎登、今川重彦 担当部分：研究計画からアドバイスするとともに、実験の一部を担当した。
100 専門職連携教育プログラムにおけるシナリオ映像化の試み	—	平成21年7月 (発表/抄録)	第41回日本医学教育学会 大会(大阪市) 第41回日本医学教育学会 大会予稿集、p.133	医学・看護・医療科学の3つの学類が合同で行う専門職連携教育プログラムとしてケア・コロキウム(チームワーク演習)を導入している。この授業は、シナリオ患者のケアについて3学類混成の小グループで討論するプログラムである。シナリオの一部を映像化しその評価を行った。映像化することでケースをイメージしやすくなり、積極的な討論への参加の動機付けに効果的と考えられた。 共著者：前野貴美、三木明子、村井文江、齋藤菊枝、高屋敷明由美、安梅勅江、東野英利子、前野哲博、原晃 担当部分：映像化したシナリオ作成者として関わった。
101 小学校3年生の保護者が考える性教育と家庭での性教育	—	平成21年8月 (発表) 平成22年3月 (抄録)	第28回日本思春期学会学 術集会(浜松市) 思春期学、28(1)、 pp.97-98	家庭における性教育支援を構築するにあたり、保護者の性教育にとらえ方や家庭における性教育の取り組みを検討した。245名の保護者の回答を分析した。性教育については、男女の違い、大人になっていく身体や心変化、命の大切さなどを教えていくことであり、必要なこと、大切なこととして捉えていた。家庭での性教育としては、発達や子どもの目線に合わせて教えたいと考えている一方で、どのように教えたらいかがわからないという回答もあった。 著者：村井文江
102 母親の育児に対する自信の変化と影響する因子について	—	平成21年10月 (発表/抄録)	第50回日本母性衛生学会 学術集会(横浜市) 母性衛生、50(3)、p.185	産後1か月と4か月の母親の育児に対する自信、子育て環境、子どもの気質、母親の自尊感情、抑うつの変化と母親の育児に対する自信に影響する要因を検討した。151名の回答を分析した。結果、1か月から4か月になることで、援助者が増え、育児への自信が高まり、抑うつ傾向が低くない、育てにくさも少なくなっていた。育児への自信に影響する要因としては、子どもの気質、自尊感情、母親の抑うつが挙げられた。 共著者：山本弘江、村井文江 担当部分：研究計画から分析まで関わった。

103 修正版グランデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した離乳における初産婦の母親役割獲得のプロセス	—	平成21年10月 (発表/抄録)	第50回日本母性衛生学会 学術集会(横浜市)母性 衛生、50(3)、p.248	離乳を通して獲得する母親役割獲得のプロセスを明らかにすることを目的とした。生後6か月から12か月の子どもを初めて育児をしている母親を対象に半構造面接を実施し、修正版グランデッド・セオリー・アプローチにて分析をした。24名のデータを分析した。結果、生後6～12か月の子どもを持つ母親の母親役割獲得のプロセスは、「自分の子どもがわかる」によって母親自身を成長させ、母親役割獲得の促進に関与していた。 共著者：中田久恵、村井文江、江守陽子 担当部分：第一著者の修士論文の一部分。指導教員として、研究計画から発表まで関わった。
104 妊娠中のスポーツ活動 妊娠中の運動実施状況	—	平成21年11月 (発表/抄録)	第20回日本臨床スポーツ 医学会学術集会(神戸 市)	シンポジウムにおける講演。妊娠期の運動実施状況について、2003年の著者の調査に加え、2009年の新たな調査との比較を行い発表した。 著者：村井文江
105 硬膜外無痛を体験した女性の分娩満足に至るプロセスの検討	—	平成22年3月 (発表/抄録)	第24回日本助産学会学術 集会(つくば市) 日本助産学会誌、23(3)、 p.410	硬膜外無痛分娩をした女性の分娩満足に関連した体験を明らかにすることを目的とした。硬膜外無痛分娩を体験した19名の女性に半構造面接を実施し質的帰納的に分析した。結果、硬膜外無痛分娩における満足は、「自分の選択を肯定化」および「主体的な痛みコントロール」のように、自分のしたい分娩を実現しようとする取り組みの中で得られていた。また、経過において、「安心できる分娩進行」や「良い分娩としての実感」をしていた。 共著者：小熊千代子、江守陽子、村井文江 担当部分：第一著者の修士論文の一部分。指導教員として、研究計画から発表まで関わった。
106 死産後の母親がなくなった子どもと関わることでの体験	—	平成22年3月 (発表/抄録)	第24回日本助産学会学術 集会(つくば市) 日本助産学会誌、23(3)、 p.488	死産後の母親が亡くなった子どもと関わることでの体験を明らかにすることを目的とした。グランデッドセオリーアプローチ法を用いて、22名の死産を体験した産後1年以内にある女性に半構造面接を実施した。結果、母親が亡くなった子どもと関わることは、子どもの喪失と向き合う契機であり、死産体験に肯定的な意味をもたらすこととして効果的に作用することが示唆された。 共著者：能町しのぶ、村井文江、江守陽子 担当部分：第一著者の修士論文の一部分。指導教員として、研究計画から発表まで関わった。
107 救急救命士に対する周産期医療教育 新生児蘇生法と分娩に関連した救急対処法の講習会 同時開催の試み	—	平成22年7月 (発表) 平成22年6月 (抄録)	第46回日本周産期・新生 児期医学会学術集会(神 戸市) 日本周産期・新生児医学 会雑誌、46(2)	緊急要請で分娩に遭遇した際の対処法について講習会開催希望が救命救急士からあることを踏まえ、救急救命士に対する新生児蘇生法と分娩に関連した救急対処法の講習会の同時開催を実施した活動報告である。分娩対処については、新生児蘇生法と異なり国際基準がない。さいたま赤十字病院の助産師が考案している方法で実施し、「すぐに活用できる」との回答が88%であった。また、今後もこのような講習会が必要と全員が回答していた。 共著者：宮園弥生、齋藤誠、中尾厚、西村一記、日高大介、須磨崎亮、村井文江 担当部分：分娩に関連した救急対処法の講習会のプログラムを作成し実施した。
108 実習場で看護学生が受ける患者暴力を防止するための教育方法	—	平成22年7月	第20回日本看護学教育学会 (大阪市) 日本看護学教育学会誌、 20(学術集会講演集)、 p.299	学生が受ける患者暴力を防止するための教育方法を明らかにすることを目的として。実習指導者および看護教員28名を対象にグループインタビューを実施し質的に分析した。結果、暴力行為のあった患者を受け持たない、暴力行為への具体的対処方法をオリエンテーションするなどの対応が明らかにされた。一方、対応マニュアルは存在していません。安全管理体制や方針を明確にしていく必要性が示唆された。 共著者：三木明子、江守陽子、村井文江 担当部分：研究計画の協議、インタビュー調査、分析結果の討議に関わった。

109 看護基礎教育終了後1～3年の看護職の動向と職場定着状況	—	平成22年10月	第41回日本看護学会 看護管理（新潟市）	看護学士課程を修了した卒業生の就業動向と職場定着状況について調査した。卒業後1～3年にある75名を分析対象とした。就業形態は「正規職員」が68名(91%)であった。就職してからこれまでに退職したいと思ったことが「ある」人は23名(31%)で、理由は「仕事が大変」8名、「自分の能力不足」5名、「理想と違う」5名、「人間関係」5名、などであった。退職したことのある人は10名(13%)で、退職理由は「転職」「進学」「他病院への移動」「体調不良」「職場環境」「家庭の事情」であった。 共著者：小池秀子、江守陽子、三木明子、 <u>村井文江</u> 担当部分：研究計画およびアンケート調査に関わった。
110 先天性心疾患を出生前診断された女性の心理	—	平成22年10月 (発表/抄録)	第51回日本母性衛生学会 学術集会（金沢市） 母性衛生、51(3)、p.213	事例検討し、胎児疾患を出生前に診断された女性の妊娠中の心理を振り返った。カルターの記述を質的に分析した。対象は、診断時に「不安・ショック」を受けていたが、徐々に「前向きな気持ち」になった。しかし、その後も「現実否認」「自己嫌悪」「無力感」などを感じていた。無事に出産したことで「安心」していたが、児の疾患をいつになったら受け入れられるかという「不安」を持ち続けていた。 共著者：大槻倫子、芳賀裕子、 <u>村井文江</u> 担当部分：分析に関わった。
111 死産を経験した母親が子どもの遺品を持つことでの体験	—	平成23年3月 (発表/抄録)	第25回日本助産学会学術集会（名古屋） 日本助産学会誌、24(3)、p.112	死産を経験した母親が亡くなった子どもの遺品を持つことでの体験を明らかにすることを目的とした。死産を体験した産後1年以内にある女性に半構造面接を実施し、遺品を持っている19名のデータを内容分析した。遺品としては写真15名、へその緒14名、手型足型8名、髪の毛4名であった。遺品を持つことは、母親とその家族にとって我が子を亡くしたことを確認し受け入れる後押しになっていた。また、亡くなった子どもが家族の一員であることを継続させるものになっていた。 共著者：能町しのぶ、 <u>村井文江</u> 担当部分：第一著者の修士論文の一部分。指導教員として、研究計画から発表まで関わった。
112 低出生体重児をもつ母親の心の支えとなったNICU看護師の関わり	—	平成23年6月	第30回茨城県母性衛生学会（阿見町、茨城県）	NICU看護師のどのような関わりが、低出生体重児を持つ母親の心の支えとなったかを検討した。NICUを持つ全国の医療機関において承諾が得られた35施設にて、低出生体重児を持つ母親を対象に、調査を実施した。92名を分析した結果、母親は、NICU看護師の関わりにおいて、【子どもの様子を伝える関わり】【子どもの関わりを促す関わり】【明るい雰囲気】【子どもを大切にす】5個のカテゴリーが、心の支えになったとして挙げられた。 共著者：南雲史代、 <u>村井文江</u> 、江守陽子 担当部分：研究計画から分析に関わった。
113 20年以上の看護職としてのキャリア継続を可能にした要因に関する質的研究	—	平成23年8月 (発表) 平成23年7月 (抄録)	第37回日本看護研究学会 学術集会（横浜市） 日本看護研究学会雑誌、34(3)、p.317	キャリア支援の視点から、後期キャリアにある看護職に注目し、キャリア継続について検討した。病院勤務経験20年以上の看護職を対象とし、グループインタビューを実施した。24名のデータを分析した結果、キャリア継続を可能にした要因としては、【看護をしたいという気持ち】【支えられている感覚】【仕事におけるやりがいを持つ】【仕事における自分の目標を持つ】【自分がしてきた仕事への自負】【仕事をするのが日常】などであった。 共著者： <u>村井文江</u> 、小池秀子、三木明子、江守陽子 担当部分：研究計画、グループインタビュー、分析に関わり、ポスター発表した。

114 「後期キャリア支援研修」を受講した看護師の研修内容の評価	—	平成23年8月 (発表／抄録)	第37回日本看護研究学会 学術集会 (大宮市) 日本看護学教育学会誌、 21 (学術集会講演集)、 p. 209	臨床経験20年以上の後期キャリア向けの院内研修は充実を計るために、後期キャリア支援研修を実施し、受講した看護師による研修内容の評価を行った。看護師70人が後期キャリア支援研修に参加し、65名から回答が得られた。研修内容の平均満足度は7.5点、平均重要度は7.2点であった。研修で勉強になったことは、キャリアアンカーがわかったこと(27人)、いろいろな人のキャリアの話が聞けたこと(13人)、自分自身のキャリアの振り返りができたこと(9人)等であった。 共著者：三木明子、小池秀子、江守陽子、 <u>村井文江</u> 担当部分：研究計画、グループインタビュー、分析に関わった。
115 思春期の子どもを持つ家庭における性教育の現状と性教育の実施に関連する要因の検討	—	平成23年8月 (発表) 平成23年3月 (抄録)	第30回日本思春期学会学術集会 (福岡市) 思春期学、30(1)、 pp. 64-65	保護者への性教育支援講座を実施するにあたり、家庭における性教育の現状と性教育の実施に関連する要因を検討した。小学校3年生の保護者387名、中学校2年生の保護者249名、計636名を分析した。結果、家庭における性教育の必要性は85.4%が認めており、うち37.4%が家庭で性教育を実施していた。家庭における性教育の実施には、家庭における性教育の必要性の認識 (OR = 10.2)、子どもの性に関する心配 (OR = 2.2)、性教育講座への参加経験 (OR = 2.0)、中学2年生 (OR = 1.5) が関連していた。 共著者：村井文江、江守陽子 担当部分：研究計画、アンケート調査、分析に関わり、口頭発表した。
116 NICU退院後の低出生体重児を持つ母親の育児自信に関連する要因の検討 レジリエンスに焦点をあてて	—	平成23年9月	第58回日本小児保健協会学術集会 (名古屋市)	低出生体重児を持つ母親のレジリエンスと育児に対する自信の関連、レジリエンスと看護支援の関連を検討した。74名を分析した。育児に対する自信は、レジリエンス($\beta=0.34$)、および育児経験($\beta=0.27$)が影響していた。レジリエンスは、両親・親戚からの援助(以下:両親・親戚)($\beta=0.29$)、夫($\beta=0.25$)、および年齢($\beta=-0.26$)が影響していた。 共著者：南雲史代、 <u>村井文江</u> 、江守陽子 担当部分：第一著者の修士論文の一部分。指導教員として計画から分析、発表まで指導をした。
117 不妊治療をしている女性の日常生活に関する調査	—	平成23年10月 (発表) 平成23年9月 (抄録)	第52回日本母性衛生学会学術集会 (京都市) 母性衛生、52(3)、p. 239	不妊治療中の女性の日常生活についてその実態を明らかにするとともに、不妊治療期間の長期化による女性の日常生活への影響を検討した。治療期間が13か月以上の群では、余暇やレジャーの中断が多くなっていた。また、就労は継続し、治療との両立を図っていた。不妊治療が長期化すると生活の一部に組み込んでいる状況があった。 共著者：鶴巻陽子、江守陽子、 <u>村井文江</u> 担当部分：第一著者の修士論文の一部分。担当教員として計画から分析、執筆まで指導をした。
118 臨床の看護経験者が捉える死産を経験した母親の悲嘆過程促進に効果的な看護支援	—	平成23年10月 (発表) 平成23年9月 (抄録)	第52回日本母性衛生学会学術集会 (京都市) 母性衛生、52(3)、p. 280	臨床で死産の看護支援を行っている看護職者が、母親の悲嘆過程促進に効果的と捉える看護支援を明らかにすることを目的とした。フォーカスグループインタビューを実施し内容分析を実施した。抽出されたカテゴリから、看護職者は母親の悲しみに寄り添いながら、母親となくなった子どもとの出会いと別れを長期的に支援することが効果的であると考えていることが死された。 共著者：能町しのぶ、 <u>村井文江</u> 担当部分：計画から分析まで関わった。

119 快適な妊娠生活のために妊娠期の女性がしているメンタルヘルスケア	—	2012年5月（発表） 2012年4月（抄録）	第26回日本助産学会学術集会（札幌市） 日本助産学会誌、25(3)、p. 197	「周産期メンタルヘルスプログラム」開発のニーズアセスメントとして、「妊娠期にある女性が安定したメンタルヘルスを保つためにしていることを明らかにすることを目的とした。インタビューデータについて内容分析を実施した。結果、妊娠中の【思い通りにならないことを実感する】を改善し、【変化を乗り越える】ことで、【妊娠を自分のものにする】にいたっていた。 共著者：村井文江、中田久恵 担当部分：インタビューおよび分析に関わり、ポスター発表をした。
120 病院で死産への看護支援をすることに助産師が感じている困難さ フォーカスグループインタビューから	—	平成24年5月	第26回日本助産学会学術集会（札幌市） 日本助産学会誌、25(3)、p. 233	助産師が病院で死産への看護支援を行う上での困難さを明らかにすることを目的とした。フォーカスグループインタビューを実施し内容分析を行った。結果、【母子を傷つけない環境づくり】、【適切とされるケアがいきょうできないときのケア】、【スタッフ間で共通したたケアへの認識が得られない】、【退院後に支援を継続すること】の困難が抽出された。 共著者：能町しのぶ、村井文江 担当部分：計画から分析まで関わった。
121 死産後の振り返りがもたらすこと	—	平成24年6月	第31回茨城県母性衛生学会（日立市）	死産した母親の振り返りによる母親の態度や行動の変化に注目し、その効果を検討した。3症例について検討を行った。結果、振り返りがそれまで抑えていた気持ちを表出し整理する機会になり、死産の受容が進んでいることが示された。 共著者：陶山小百合、鴨志田真理、芳賀裕子、村井文江 担当部分：分析についてアドバイスした。
122 先天性疾患のある児の母親が出産後に“表出”していくことを支える看護	—	平成24年6月	第31回茨城県母性衛生学会（日立市）	CCAM（先天性嚢胞状腫瘍様形成異常）と胎児診断された母親の“表出”を支えた出産後の看護を検討した。分析の結果、児の変化を伝え、共有することが母親と関係性を深めることになり、表出につながっていた。母親にとっては自分を認めてくれることが自信となり、児の状況や病態を受け入れ整理し、前向きに捉えられるようになっていた。 共著者：片川紗智、佐々木萌、芳賀裕子、村井文江 担当部分：分析についてアドバイスした。
123 コンドーム使用教育がその後のコンドーム使用行動に与える有効性の検討 高校生に対する調査から	—	平成24年8月（発表） 平成25年3月（抄録）	第31回日本思春期学会学術集会（軽井沢町） 思春期学、31(1)、pp. 57-58	コンドーム使用教育が、その後のコンドーム使用行動に有効であるかについて検討をした。高校生を対象に質問紙調査を実施し、763名から有効回答が得られた。性行為経験のある男子は19.0%、女子は31.7%であった。コンドーム使用教育は、性行為経験がない高校生のコンドーム使用に対する意図を高めていた。しかし、実際のコンドーム使用については、教育時期を行動変容ステージ別でわけて検討したが、コンドーム使用教育との関連は認められなかった。 共著者：岡島梨花、村井文江、江守陽子 担当部分：第一著者の修士論文の一部分。指導教員として、研究計画から発表まで関わった。
124 小学校3年生での“親子性教室”が思春期における家庭での性教育にもたらすもの 親子性教室後の自由記述式アンケートから	—	平成24年8月（発表） 平成25年3月（抄録）	第31回日本思春期学会学術集会（軽井沢町） 思春期学、31(1)、pp. 90-91	小学校3年生とその保護者を対象として実施している「親子性教室」が家庭における性教育にもたらすことを検討した。「親子性教室」に参加した保護者143名の自由記述を分析した。結果、小学校3年生で親子に性教育をすることは、保護者が子どもの成長に気づき、家庭で性教育することを後押ししてしている状況が示唆された。 共著者：村井文江、山海千保子、江守陽子 担当部分：性教育の実施、アンケート調査、分析に関わり口頭発表した。

125 初産婦における妊娠期の運動と精神的健康の関連 POMS短縮版およびEPDSによる精神的健康の評価	—	平成24年10月 (発表/抄録)	第53回日本母性衛生学会 学術集会 (福岡市) 母性衛生、53(3)、p. 228	妊娠期の運動実施に関連する要因および運動実施と精神健康の関連を明らかにすることを目的とした。妊婦を対象に質問紙調査を実施し、118名について分析した。結果、妊娠期の運動実施に関連しているのは、「身体活動を意識していること」、「非妊娠時に運動習慣があること」であった。また、妊娠期の運動実施は、POMS (短縮版)の緊張不安の低下に関連していた。 共著者：加藤良子、村井文江、江守陽子 担当部分：第一著者の修士論文の一部分。指導教員として、研究計画から発表まで指導した。
126 助産師による“死産の振り返り”の実施状況と課題	—	平成24年10月 (発表/抄録)	第53回日本母性衛生学会 学術集会 (福岡市) 母性衛生、53(3)、p. 244	“死産の振り返り”を効果的に実施することを検討するために、現在、助産師が実施している“死産の振り返り”を明らかにすることを目的とした。助産師27名を対象に質問紙調査を実施した。“死産の振り返り”は、分娩後3日までに90%がされていた。時間は30～60分であった。「自責の念」「児に対する思い」「妊娠中からすべてのこと」などを振り返っていた。助産師は、振り返りは表出できる場としてのメリットがあると実感しつつも、言葉をかけることへの困難を感じていた。 共著者：鴨志田真理、陶山小百合、熊本裕子、村井文江、芳賀裕子 担当部分：研究計画および分析について指導した。
127 大学生のSTI予防に関するピアエデュケーションの効果についての質的分析	—	平成25年8月 (発表) 平成26年3月 (抄録)	第32回日本思春期学会学術集会 (和歌山市) 思春期学、32(3)、 pp. 130-131	ピアエデュケーションを受けた大学生のSTI予防意識・行動について検討した。ピアエデュケーションに参加した大学生のうち、研究協力に同意した28名に半構造的グループインタビューを実施した。ピアエデュケーション後、「性に向き合いやすくなる」、「STIのリスク認識」、「STIを自分に関係する問題として捉える」ことができていた。さらにパートナーとの関係を考えるきっかけになり、性に向き合い続ける姿勢の必要性を認識していた。 共著者：松原由佳、村井文江、江守陽子 担当部分：第一著者の修士論文の一部分。指導教員として、研究計画から発表まで関わった。
128 「育児ストレス絵画テスト」とPOMS (Profile of Mood States) との関連	—	平成26年3月 (発表) 平成26年2月 (抄録)	第28回日本助産学会学術集会 (長崎市) 日本助産学会誌、27(3)、 p. 212	著者たちが作成した「育児ストレス絵画テスト」とPOMSとの関連を検討した。生後3か月から6歳の乳幼児を持つ母親307名を対象とした。結果、育児ストレス絵画テストによって、建前を本音に乖離が強いグループは、POMSにおいて緊張・不安、抑うつ、怒り・敵意、疲労、混乱が高く、活気が低いという結果であった。「育児ストレス絵画テスト」によって、育児において心理的支援が必要となる母親たちをスクリーニングしていける可能性が示唆された。 共著者：山海千保子、江守陽子、村井文江、小泉仁子、川野亜津子 担当部分：育児ストレス絵画テストの作成に関わった。
129 初めて父親となる男性の妊娠期における育児準備行動の状況	—	平成26年6月	第33回茨城県母性衛生学会 (つくば市)	妊娠期における父親の育児準備行動の状況を検討した。母親学級および両親学級において自記式質問紙調査を実施し、有効回答138名を分析した。父親の育児行動として、妊婦や胎児など「相手」があるものに対する行動は、比較してよくされていた。行動化が少ない「父親としての自覚に関する行動」、「父親になるための学習行動」、「出生後の話し合い」については、先輩の父親の体験談をもとに話し合いをしていくなどを行うことで、不明瞭な「将来」に対して具体的なイメージを促すことが必要である。 共著者：佐藤美保、村井文江、江守陽子 担当部分：第一著者の修士論文の一部分。指導教員として、研究計画から発表まで関わった。

130 茨城県内の産科医療機関における母乳育児支援の実態	—	平成26年6月	第33回茨城県母性衛生学会 (つくば市)	茨城県内の産科医療機関における母乳育児支援の実態を明らかにすることを目的とした。39施設から有効回答が得られた。結果、94.9%の施設が母乳育児を勧めており、完全母乳育児の母親の割合は退院時49.1%、産後1カ月健診時57.8%であった。母乳育児支援の実践率は70%を超えてはいるが、母子接触や母子同室の時期は施設によって異なり、その効果については疑問が残された。 共著者：小野加奈子、村井文江、江守陽子 担当部分：研究計画の協議、分析結果の討議に関わった。
131 高校生の安全な性行動に関連する要因の検討	—	平成26年8月 (発表) 平成26年3月 (抄録)	第33回日本思春期学会学術集会 (つくば市) 思春期学、33(1)、pp.105-106	高校生が安全な性行動を選択することに関連している要因を検討した。高校2、3年生を対象として、1,262の有効回答が得られた。性行為経験率は、男子21.7%、女子34.1%であった。性行為の選択には、知識(OR=2.22)、性への関心(OR=2.18)、性行為に対する規範(OR=0.50)、自己肯定感(OR=0.57)との関連が認められた。 共著者：小花有貴、村井文江、江守陽子 担当部分：第一著者の修士論文の一部分。指導教員として、研究計画から発表まで関わった。
132 女子大学生における冷えと月経痛・月経随伴症状の関連について	—	平成26年9月 (発表) 平成26年8月 (抄録)	第55回日本母性衛生学会学術集会 (千葉市) 母性衛生、55(3)、p.171	冷えによる月経痛および月経随伴症状の差を明らかにすることを目的とした。冷えは、末梢または全身の冷感、寒冷刺激曝露後の皮膚温の回復率、末梢皮膚温にて評価した。結果、月経痛は、冷感あり群、末梢皮膚温の低い群で有意に多かった。月経随伴症状においても冷感との関連がいくつか認められた。皮膚温が低いことや冷感があるという状態が月経痛の程度に関連していた。 共著者：東川このみ、江守陽子、村井文江 担当部分：第一著者の修士論文の一部分。指導教員として、研究計画から発表まで指導した。
133 妊娠期における父親の育児準備行動と父親及び母親のQOL、EPDSの関連	—	平成26年9月 (発表) 平成26年8月 (抄録)	第55回日本母性衛生学会学術集会 (千葉市) 母性衛生、55(3)、p.221	初めて父親になる男性がパートナーの妊娠中にしている育児準備行動と父親のQOL、父親のQOLと母親のEPDSおよびQOLの関連を検討した。134組の父親・母親の質問紙を分析した。父親のQOLは、父親の育児準備行動である妊婦への身体的援助、胎児への愛着行動、妊婦への精神的援助との関連を認められた。父親のQOLと母親のQOLは相関しており、母親のQOLとEPDSは負の相関が認められた。 共著者：佐藤美保、江守陽子、村井文江 担当部分：第一著者の修士論文の一部分。指導教員として、研究計画から発表まで指導した。
134 産科医療機関における母乳育児支援と退院時母乳育児率の関連	—	平成26年9月 (発表) 平成26年8月 (抄録)	第55回日本母性衛生学会学術集会 (千葉市) 母性衛生、55(3)、p.244	産婦人科医療機関における母乳育児支援の内容と退院時母乳育児率との関連を検討した。関東圏内の産科医療補償制度参加施設を対象に質問紙調査を実施した。221施設について分析した。退院時母乳育児率は47.6%であった。退院時の母乳育児率に影響している支援は、母乳育児環境と継続への支援であった。 共著者：小野加奈子、村井文江、江守陽子 担当部分：第一著者の修士論文の一部分。指導教員として、研究計画から発表まで指導した。
135 ペリネイタル・ロスのケアの質向上を促進するデスカンファレンスの検討 カンファレンスの出席者へのインタビューの質的分析	—	平成27年3月 (発表) 平成27年2月 (抄録)	第29回日本助産学会学術集会 (品川区) 日本助産学会誌、29(3)、p.514	産科病棟で実施しているペリネイタル・ロスのデスカンファレンスの改善に向けて、問題点を明らかにした。デスカンファレンスに参加経験のある13名の助産師にインタビューし、質的帰納的に分析した。結果、デスカンファレンスの問題としては、「達成されない目的」「活発なDCでない」「目的認識の差」「方法の不適切さ」「病棟のシステム」が挙げられた。 共著者：石原望、鶴田裕理恵、村井文江 担当部分：研究計画から分析まで関わった。

136 妊娠女性における隠れ肥満とその特徴	—	平成28年8月	第42日本看護研究学会学術集会（つくば市） 第42回学術集会抄録集、 p. 158	妊娠女性における隠れ肥満の出現割合とその特徴を検討した。妊娠18週以下の妊婦81名を対象とした。結果、BMIから肥満と判断される人は14.8%であった。標準体重における隠れ肥満は、20.7%であり、隠れ肥満傾向は43.1%であった。隠れ肥満体型と標準体型では生活様式等に有意差は認められなかった。しかし、ダイエット経験は、隠れ肥満体型と隠れ肥満体型傾向群が、標準体型群より有意に高かった。 共著者：上村真衣子、江守陽子、村井文江、川野亜津子、山海千保子 担当部分：第一著者の修士論文の一部分、計画から分析まで一連の過程におけるアドバイスをした。
137 高校生のデートDV経験の実態および予防に関連する要因の検討	—	平成28年8月	第35回日本思春期学会（台東区） 第35回日本思春期学会総会・学術集会抄録集、 p. 88	高校生のデートDV経験および加害予防・被害時の相談行動に関連する要因を検討した。協力の得られた高等学校で質問紙調査を実施した。結果、5381名の有効回答が得られた。交際経験者は、3054名であった。交際経験者において、デートDV行為の加害経験は、男子26.6%、女子38.9%に認められた。また、被害経験は、男子26.6%、女子36.4%であり、加害と被害の両方の経験は31.8%に認められた。 共著者：大平采音、村井文江、江守陽子 担当部分：第一著者の修士論文の一部分。指導教員として、研究計画から発表まで関わった。
138 ペリネイタル・ロスへの看護者のケアリング行動とその関連要因	—	平成29年10月	第58回日本母性衛生学会（神戸） 母性衛生、58(3)、p. 178	関東地方の総合および地域周産期母子医療センター39施設に勤務する助産師・看護師を979名を対象にペリネイタルロスを経験している女性へのケアリングについて質問紙調査を実施した。結果、ケアリング行動への関連要因として、ケア態度、経験年数、ロールモデル、時間の確保、マニュアルの有無が明らかになった。 共著者：石原望、村井文江 担当：第一著者の修士論文の一部分。指導教員として、研究計画から発表まで関わった。
139 大学生・大学院生が初経から体験してきている月経のセルフケア	—	平成30年3月	第32回日本助産学会（横浜） 日本助産学会誌、(31)3、 p. 409	大学生および大学院生が初経から体験してきている月経のセルフケアについて明らかにすることを目的にした質的研究である。12名にインタビューし、4つのカテゴリーが抽出され、月経のセルフケアが個人的経験の中で進められて状況が明らかになった。 共著者：杉浦実歩和、村井文江 担当：第一著者の修士論文の一部分。指導教員として、研究計画から発表まで関わった。
140 早期産・低出生体重児の退院後1か月間における母親の体験—母親としての自信を中心に—	—	平成30年3月	第32回日本助産学会（横浜） 日本助産学会誌、(31)3、 p. 443	早期産・低出生体重児の退院から1か月において、母親が母親としての自信を得ることに関した体験を7名の対象のインタビューから明らかにした。4つの主要カテゴリーが抽出され、退院後1か月において子育てにおける自信を感じる事が可能であることが明らかになった。 共著者：近藤瞳、村井文江 担当：第一著者の修士論文の一部分。指導教員として、研究計画から発表まで関わった。
141 救急現場における周産期救急の実態と教育のあり方 救急隊への教育体制の現状	—	平成30年5月	日本臨床救急医学会雑誌、21(2)、316 第21回日本臨床救急医学会総会・学術集会（名古屋）	周産期救急における教育を検討するために、救急隊の病院前周産期救急教育の実態について全国調査を実施した。結果からは、教育機会の乏しさとそれに対する周産期教育体制の確立への要望が示された。 共著者：宮園弥生、村井文江、榎本有希、小山泰明、井上貴昭 担当：計画に関わり、分析結果、発表内容を確認した。

142 救急現場における周産期救急の実態と教育のあり方 救急救命士養成機関における教育の現状	—	平成30年5月	日本臨床救急医学会雑誌、21(2)、316 第21回日本臨床救急医学会総会・学術集会（名古屋）	周産期救急における教育を検討するために、救急救命士養成機関で行われている周産期医療の教育内容について全国調査を実施した。分娩介助や新生児蘇生法の実習が8割以上で実施されていたが、系統的な教材開発や周産期医療教育機関との連携の必要性が示唆された。 共著：宮園弥生、 <u>村井文江</u> 担当：計画に関わり、分析結果、発表内容を確認した。
143 救急現場における周産期救急の実態と教育のあり方 救急救命士養成機関における教育の現状	—	平成30年5月	日本臨床救急医学会雑誌、21(2)、317 第21回日本臨床救急医学会総会・学術集会（名古屋）	周産期救急における教育を検討するために、病院前周産期救急体制について全消防本部を対象に調査を実施した。かかりつけ医のいない妊婦への対応が規定されている本部は38%、周産期搬送コーデイナーによる調整は5.8%であり、病院前周産期救急体制におけるシステム整備の必要性が示唆された。 共著：榎本有希、宮園弥生、 <u>村井文江</u> 、小山泰明、井上貴昭 担当：計画に関わり、分析結果、発表内容を確認した。
144 救急現場における周産期救急の実態と教育のあり方 病院前救急教育への助産師養成機関の協力状況と課題	—	平成30年5月	日本臨床救急医学会雑誌、21(2)、317 第21回日本臨床救急医学会総会・学術集会（名古屋）	周産期救急における教育を検討するために、救急隊員への病院前救急としての分娩対応の教育に対する助産師養成機関の協力状況について全国調査を実施した。助産師養成機関への教育協力の依頼は3割程度であったが、協力可能な機関は多くあり、連携促進の可能性が示唆された。 共著： <u>村井文江</u> 、宮園弥生、榎本有希、小山泰明、井上貴昭 担当：計画に関わり、結果を分析し発表までを分担責任者として行った。
145 救急現場における周産期救急の実態と教育のあり方 わが国の施設外分娩の現状調査	—	平成30年5月	日本臨床救急医学会雑誌、21(2)、317 第21回日本臨床救急医学会総会・学術集会（名古屋）	周産期救急における教育を検討するために、全消防本部を対象に、2015年における施設外分娩の現状調査を実施した。891件の施設外分娩が報告され、5.3%に新生児心臓蘇生が実施されていた。人工呼吸なしに胸骨圧迫が実施されている症例もあり、現状に即した教育のあり方について検討する必要性が示唆された。 共著：宮園弥生、榎本有希、小山泰明、井上貴昭、 <u>村井文江</u> 担当：計画に関わり、分析結果、発表内容を確認した。
146 退院時と産後1か月の授乳方法の変化に関連する要因	—	平成30年10月	母性衛生、59(3)、210 第59回日本母性衛生学会学術集会（新潟）	分娩の退院時と産後1か月児の授乳方法の変化に関連する要因を明らかにすることを目的とした。退院時から産後1か月の期間に乳栄養に向かう要因として、エモーショナルサポート、家族も含めた支援、母乳育児への意思の促進が示唆された。 共著：櫻井真帆、 <u>村井文江</u> 担当：第一著者の修士論文の一部。指導教員として、研究計画から発表まで関わった。
147 茨城県筑西市における思春期保健事業としての性教育の効果	—	平成30年10月	日本公衆衛生雑誌、65(10)、394 第77回日本公衆衛生学会総会（郡山）	茨城県筑西市が、思春期保健事業として取り組んでいる性教育に関する実践報告である。実施後のアンケート調査から、年長児および小学生の保護者は、性教育への肯定的な意見が多く家庭での継続した性教育の実施についての認識も高かった。中学2年生では、中学生・高校生が性行為をしないほうがよいという意見が講演後に多くなる一方で、性に興味関心がないという回答も一定数認められた。一定の効果を認めるとともにプログラムの内容を一層充実させる必要性が示唆された。 共著：倉持幸恵、小波恵子、高橋恵子、鳥海佐和子、百目鬼恵子、山海知子、 <u>村井文江</u> 、山岸良匡 担当：連携して実施している事業の活動報告であり、発表内容についてアドバイスするとともに確認した。

148 若手看護系大学教員のキャリア開発支援：看護系大学教員“不足”の解決策を探る	—	令和元年8月	第45回日本看護研究学会 学術集会 交流集会（大阪）	看護系大学若手教員のキャリア開発支援をしていくための交流集会を実施した。今までの調査から看護系大学における若手教員の実態、教育及び研究上で困難と感じていることやキャリア経路について発表した。その後、若手教員とベテラン教員のグループ討議で現状の問題点を確認した。 共著：村井文江、石原あや、石村佳代子、山田律子、鈴木明子、山本裕子 担当部分：研究計画に関わり、キャリア経路について主に分析をし、全体を総括した。
149 地域—大学連携における思春期保健事業 小学校3年生親子性教育“いのちのたんじょう”	—	令和元年11月	日本学校保健学会 第66回学術大会（東京）	地域と大学が連携して実施しているA市における小学校3年生を対象とした親子性教室活動について報告するとともに、保護者のアンケートから家庭における性教育の捉え方などをまとめた。保護者は、家庭における性教育に困難さや限界を感じていることが示唆された。 共著：南雲史代、中田久恵、村井文江 担当部分：実践および調査に関わり、発表にあたってのアドバイスをした。
150 若手看護系大学教員が経験している研究遂行上の困難	—	令和元年12月	第39回日本看護科学学会（金沢）	2名の若手看護系大学教員にインタビュー調査を実施し、キャリアを開発する上で経験している研究遂行上の困難について明らかにした。【教育活動・業務および家庭生活との時間的バランスがとれないこと】【研究を実施・継続する基盤を整えることの難しさ】をはじめとする5つのカテゴリーが抽出された。 共著：山本裕子、石村佳代子、鈴木明子、村井文江、石原あや、山田律子 担当部分：研究計画および分析の妥当性に関わった。
151 若手看護系大学教員が経験している教育遂行上の困難	—	令和元年12月	第39回日本看護科学学会（金沢）	22名の若手看護系大学教員にインタビュー調査を実施し、キャリアを開発する上で経験している教育遂行上の困難について明らかにした。13カテゴリーが抽出され、教育の遂行に多くの困難を抱えている実態が明らかになった。 共著：石村佳代子、山本裕子、鈴木明子、村井文江、石原あや、山田律子 担当部分：研究計画および分析の妥当性に関わった。
152 Characteristics of faculty members working at nursing universities in Japan: Supporting the career development of nursing educators at the early career stage	—	令和2年1月	The 23rd East Asian Forum of Nursing Scholars (Chiang Mai, Thailand)	若手看護系大学教員のキャリア支援の基礎資料として日本の看護系大学における教員に関する特徴をデータベースから明らかにした。結果、私立系大学が65.8%であり、国公立大学に比較し、学生の入学定員が多く教授が有意に少ない結果であった。設置主体別のキャリア支援プログラムの必要性が示唆された。 共著：Ritsuko Yamada, Akiko Suzuki, Fumie Murai, Kayoko Ishimura, Aya Ishihara, Yuko Yamamoto 担当部分：研究計画および分析結果について確認した。
153 Coping with teaching difficulties among nursing education at the early career stage	—	令和2年2月	The 6th International Research Conference of World Academy of Nursing Science (Osaka, Japan. web開催)	若手看護系大学教員の教育上の困難への対処について22名のインタビューから明らかにした。6つのカテゴリーが抽出され、大学内外の人材を活用して自己学習によって対処していることが示された。また、それらは、大学での教育と家庭での仕事とバランスにおける葛藤の中でされていた。 共著：Kayoko Ishimura, Yuko Yamamoto, Aya Ishihara, Fumie Murai, Akiko Suzuki, Ritsuko Yamada 担当部分：研究計画および分析の妥当性に関わった。

154 Coping with difficulties in conducting research among nursing education at the early career stage	—	令和2年2月	The 6th International Research Conference of World Academy of Nursing Science (Osaka, Japan. web開催)	若手看護系大学教員の研究遂行上の困難への対処について22名のインタビューから明らかにした。8つのカテゴリーが抽出され、上司から支援を受けて積極的に研究を進めている状況もあったが、一方で、ワークライフバランスを考慮した長期的視点での支援の必要性も示唆された。 共著：Yuko Yamamoto, Kayoko Ishimura, Akiko Suzuki, <u>Fumie Murai</u> , Aya Ishihara, Ritsuko Yamada 担当部分：研究計画および分析の妥当性に関わった。
155 高校生におけるデートDVおよび予防に関する意識と行動：デートDV行為としての認識とされたくない行為は関連するか	—	令和2年9月	第39回日本思春期学会総会・学術集会(金沢、web開催)	A県内の高等学校13校においてデートDVおよび予防に関する調査を実施した。デートDVとなる行為を恋人にしたことがある人は、男子14.7%、女子10.1であった。恋人からされたことがある人は、男子20.6%、女子35.2%であった。また、デートDVと認識している行為を恋人からされたくないと思うわけではないことが統計的に示された。 共著：猿田和美、坂間伊津美、中田久恵、 <u>村井文江</u> 担当部分：研究計画および分析の妥当性に関わった。
156 高校生を対象にした1コマのデートDV予防に関する講義の有用性	—	令和2年9月	第39回日本思春期学会総会・学術集会(金沢、web開催)	高校生において、1コマ(50分)のデートDV予防に関する講義がどのような有用性を示すかを検討した。統計的分析の結果、1)介入群では、デートDVに関する情報を集める、友だちと話をするといった情報収集・活用の行動が促された。2)デートDV行為としての認識および恋人からされたくない行為としての認識は高くなった。3)デートDVおよび予防に関する信念、デートDV予防行動をする自信、デートDV行為実行への影響は認められなかった。 共著： <u>村井文江</u> 、猿田和美、坂間伊津美 担当部分：研究計画から発表に至るまで、全体的に関わった。
157 若手看護系大学教員が直面している困難やニーズから考えるキャリア開発支援	—	令和2年9月28日～11月8日(web)	第46回日本看護研究学会学術集会 交流集会(札幌、web開催)	若手看護系大学教員が直面している教育上・研究上の困難およびそれらを解決してキャリアを形成していくためのニーズについて明確にした。また、昨年度の交流集会を踏まえ、若手看護系大学教員のキャリア開発支援として必要なことを提示した。 共著：山本裕子、 <u>村井文江</u> 、石原あや、石村佳代子、山田律子、鈴木明子 担当部分：研究計画および分析の妥当性に関わった。
158 若手看護系大学教員が直面している困難やニーズから考えるキャリア開発支援	—	令和2年12月1日～12月25日(web)	第40回日本看護科学学会学術集会(東京、web開催)	複線径路・等至性モデル(TEM)を用い、若手看護系大学教員のキャリア径路を可視化することを目的とした。結果、等至点は「看護教員を続けていく意思決定ができる」であり、その過程における分岐点は「看護職としての解決したい問題・課題」「看護教員がキャリアの選択肢になる」「助教としての仕事の順調さ」「博士の学位所得を考える」の4つであった。 共著：石原あや、 <u>村井文江</u> 、山本裕子、石村佳代子、鈴木明子、山田律子 担当部分：研究計画およびデータ収集、分析に関わった。

159 若手看護系大学教員のキャリア開発支援を探る	—	令和3年11月19日～12月28日 (web)	第41回日本看護科学学会学術集会 交流集会 (web)	若手看護教員を対象とした教育・研究遂行上経験している困難質的研究の結果を基に、若手看護教員が抱える課題と若手看護教員の教員としてのキャリア継続に影響する要因について報告した。そのうえで、参加者とともに若手看護教員のキャリア開発支援についてディスカッションをおこなった。 共著：山本裕子、村井文江、石原あや、鈴木明子、石村佳代子、山田律子 担当部分：研究計画および分析の妥当性に関わった。
160 保護者参観の小学校3年生の親子性教育に向けた市・教育委員会・大学講師の連携	—	令和4年8月20日、21日 (web)	第41回日本思春期学会総会・学術集会 (つくば, web)	A市で実践している小学校3年生の親子性教室について、市、教育委員会・大学講師の連携を中心、運営内容について報告した。2008年度からの事業であり、希望校をチャ用としているが、コロナ感染拡大前は、市内の全校で実施でき、100%近い保護者の出席がえられていた。 共著：中田久恵、南雲史代、村井文江 担当部分：実践に関わり、発表全体についてアドバイスをした。
161 小学校3年生を持つ保護者の家庭における性教育の実施状況と関連する要因の検討	—	第41回日本思春期学会総会・学術集会 (つくば, web)	第41回日本思春期学会総会・学術集会 (つくば, web)	小学校3年生を持つ保護者の家庭における性教育の支援を検討するため、性教育の実施状況と関連要因を明らかにした。200名の回答を分析した結果、性教育の実施率は17.0%であった。実施を予定している人は68.5%であった。性教育を実施するにあたって必要な知識を提供し、自信をもって性教育継続できるようにプログラムを構築する必要性が示唆された。 共著：南雲史代、中田久恵、村井文江 担当部分：計画から関わり、分析方法や考察についてアドバイスをを行った。
160 若手看護系大学教員のキャリア開発における教育遂行上の困難と対処	—	令和4年12月3日、4日	第42回日本看護科学学会学術集会 (広島、対面&web)	若手看護系大学教員がキャリア開発上経験している教育遂行上の困難や対処を明らかにし、キャリア開発支援の示唆を得ることを目的とした。169名の助教から回答が得られた。結果、授業での学びをより深められる教授活動に困難を抱えていた。また、教育に肯定的な思いと持つ一方で、周囲の期待へ貢献や自信は低かった。 共著：石原あや、石村佳代子、鈴木明子、村井文江、山本裕子、山田律子 担当部分：データ分析のディスカッションに参加し、最終ポスターを確認した。
161 若手看護系大学教員のキャリア開発における研究遂行上の困難と対処	—	令和4年12月3日、4日	第42回日本看護科学学会学術集会 (広島、対面&web)	若手看護系大学教員がキャリア開発上経験している教育遂行上の困難や対処を明らかにし、キャリア開発支援の示唆を得ることを目的とした。169名の助教から回答が得られた。結果、海外への研究の発信や、研究と他の役割との時間調整上の困難を抱えているものが多かった。学位(博士)への取り組みが研究への「困難」や「対処」、肯定的な思いに関係していた。 共著：村井文江、山田律子、山本裕子、石原あや、石村佳代子、鈴木明子 担当部分：主となりデータ分析を行い、メンバーでディスカッションを繰り返し、発表ポスターまでをまとめ、作成した。
162 SDGs × 看護学・研究・倫理	—	令和4年12月3日、4日	第42回日本看護科学学会学術集会 交流集会 (広島、対面&web)	日本看護科学学会看護倫理検討委員会として企画した交流集会である。SDGsが看護実践や研究における倫理的価値に組み込まれていることから、SDGsの目標達成に向けて看護学研究者の直面している課題を明らかにし、取り組み事例を紹介した。海外からの講師を招き、SDGsの達成に貢献するという課題に対し、学术界と社会との共創という形でのシチズンサイエンスを推進することが次のステップになることを共有した。 共著：手島恵、有森直子、岡田淳子、白鳥さつき、田中真木、鶴若麻理、村井文江 担当部分：委員会の委員として計画・運営に関わった。